
具現の錬金術師

一嘉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

具現の錬金術師

【Nコード】

N6936V

【作者名】

一嘉

【あらすじ】

突然の死と、新たな生。託された力を使い、異世界にてどう生きて行くのか。元漫画家のアシスタントが、錬金術を使って異世界で生きて行く物語。

まったり気ままな更新ですので、頻度は激遅。

メインは錬金術を使ってまったり異世界で過ごす事（予定）です。で、戦闘描写などはないかと思えます。

【注意】なんちゃって錬金な所があるので、完全な錬金術をお求めの方には作風が合わないかと思えます。

「01」天使の土下座（前書き）

拙い作品ですが、お付き合い頂けると幸いです。

「01」天使の土下座

日本と言う小さな島国で生きて来た全てが、一瞬の出来事によって無に返った。最後に見えたのは、居眠りをするトラックドライバーの顔。ぶつかった瞬間、つま先から脳天まで激痛が走ったが、直ぐに意識が飛んで視界は闇へと消える。最期まで手放さなかつた左脇に抱えていたスケッチブックは、彼の血で表紙を飾った。

ぶつかる寸前に確信した死。訪れる筈のない目覚めに、ふるりと瞼を震わせつつ目を開くと、そこは真つ白な空間。朦朧とする意識の中で動き辛い体を無理矢理起こし、辺りを確かめようと目を擦って開けば、目の前に土下座をしている景色と同じく白い衣服を着た数名の姿。背中には翼があり、印象としては天使。天使の土下座など、中々拝める物ではない。

「……え？ 何事？」

「申し訳有りません！ 久住^{クズミ} 零良様^{セラ}・21歳！」

「我々は、天界にて人の死を管理する部署の者です！」

「こちらの手違いと言うか、本来死ぬべきだった女性に惚れた同じ部署の天使が、その女性の代わりに貴方を死なせました！」

「丁度その女性の前に貴方が居たが故の出来事でした！」

「その天使はこちらにて処^はぶ^ん 罰を与えたので、どうかお許しを！」

土下座しつつ、彼が死んだ事に関し、説明をしてくれた天使達。どうやら零良は元々死ぬ予定ではなく、別の人間を生かす為に代わりに死なせたようだ。本来ならば誰かの代わりに死を強要されたと言う事で怒る場面なのだろうが、零良はそこまで生に貪欲ではなかった為、『そうなんだ』で済ませた。

本当に『そうなんだ』の一言を口にして死を受け入れた為、天使達は慌てて顔を上げる。天使達は皆顔立ちは整って居るが、違うタイプの美形。ハリウッド映画に出ていてもおかしくない彼等を見、『うわぁ、絵で書きたい』とズレた事を考える。

「え、つと、それで、ですね……と言うか、怒ってないんですか？」
「あー……死んじゃったのは仕方ないですし、俺の代わりにその人が助かったなら、いいんじゃないですか？」

天使の中で最も短髪、スポーツマンのような顔立ちをした男に聞かれた零良はあっさりとした言葉を返す。戻って来た返答に、天使達は互いの顔を見合わせた。零良が目を覚ます迄の間、零良にとっては数十分だが、地球上の時間はそれよりも早く進んでいて、助かった女性は目の前でトラックに人が跳ね飛ばされたシヨックにより、少し精神を病んでしまっただけ入院中である。

しかし問題は彼女が精神を病んでしまった事ではなく、その女性は結局？死ぬ事？に代わりはない。トラックに轢かれなかったと言うだけで、別の死因を以って彼女は死ぬ事となる。死因を詳しく調べてはいないが、大体想像出来るだろう。言わば、零良は完全なる無駄死にと言える。彼等は顔を見合わせ、『内緒にしておこう』とア

アイコンタクトを取った。

「じゃあ、俺を？あの世？って呼ばれる所に、案内して貰えますか？」

「それがですね、今回久住さんの死亡が完全なるイレギュラーでして、書類が整っていないんですよ」

「事務的ですね」

「ええ。効率化を図った結果、事務的になってしまいました」

長髪で切れ長の目をしたヴィジュアル系バンドでギターを演奏しているような天使の発言に対し、零良は死んだ後がそこまで情報化、かつ事務的になって居るとは思わずに驚きの表情を見せるが、声は淡々としていた。表情と声のトーンが合っていない事に天使達は苦笑。

V系の天使は、今回の騒動に関して大天使に報告した所、大天使から神の耳に入り、神の提案で零良を別の世界に転生させる事となったと言う。迷惑料として、特殊能力をオマケで付けて。なので、何の能力が良いか考えてくれと頼み、突然考えてくれと言われた零良は腕を組んで、自分に合った能力を考え出す。

「俺の行く予定の世界って、どんな感じですか？」

「地球とは違い魔物が居て、魔法があり、人間とは違う亜人と呼ばれる者も居ます。地球と言う所の、ファンタジーの世界を想像して下さい」

女顔の天使（喉仏があるので、男と判断）に言われ、その世界で生

活する為、どのような能力が良いか考えた。新たなる世界の情報を聞き、返答によって幾つかの候補を外してゆく。最初に候補から外されたのは、戦闘に関する物。魔法を使える、剣を使えるなどの能力は、零良は欲していない。

親の教育故、零良は剣道や柔道、合気道、空手などを幼少の頃から学ばされていた。しかし本人は内向的な性格をしていたので、どちらかと言うと書道や絵画、茶などを学びたかったが、言うところ『男に生まれて、強さを求めないとはなんたる事か!』と父に激怒され、その都度却下されていた。

なので零良は高校を出るまでは武道を極め、高校卒業と同時に友人の伝で漫画家のアシスタントとして働き出した。その漫画家は少年漫画では有名な人で家も広かった為、事情を知って零良を下宿させてくれたのだ。その代わり仕事は誰よりも頑張ったし、アシスタントとしての仕事だけではなく、家事・炊事も引き受けた。

元々絵を書くのが好きだった零良は、アシスタントとして仕事をしながら、ゲームに登場する武器や防具などのデザインを受ける仕事も始め、ネットでは『格好良い武器を生み出す職人』として有名になっていった。自分の人生を振り返って、ふと彼はその能力を利用出来ないかと天使に相談。

天使達はこんな能力はどうだろう、と？絵から物を生み出せる錬金術師？と言うのを提案。面白いし、これ以外に思いつかなかったの
で、零良は？自分の書いた絵から物を生み出せる？能力を天使に与えて貰った。

「一応、こちらの不手際と言う事で、最低5年は遊んで暮らせる金

を用意しました。この鞆……ああ、中は魔法で広げてあるので、ほぼ無限に物を入れられますよ」

「四次元ポケットのような物ですね」

開いているのか閉じているのか、一見するとわからないような目をした天使に渡された鞆は、ワンショルダーのリュック。中には日常良く使うような物が入っているから、中身の一覧表メモを入れてあるので暇な時にでも確認してくれと言う。この鞆も零良しか使えないようになっていて、例え盗まれても100m以上彼から離れた時に、自動的に彼の手に戻るようになっていそうだ。

「色々揃えて貰って、申し訳有りません」

「いえ、本当にこちらの不手際ですから。どうか、別の世界で貴方が幸せに暮らせますよう、我々天使一同は祈っております」

天使達は一列に並び、零良に向かって一礼をする。零良も深々と頭を下げてお礼を言うと、徐々に彼の姿が薄くなり、やがてはその世界に天使達だけが残った。別の世界に行ったのだと、彼等は深い溜息を吐く。次に話すのは、零良と言う人間の事。

「あんなんで大丈夫か？ あそこまで生に執着しない奴、初めて見たぞ。大抵は手違いで死んだっつたら、ブチ切れるもんなのに……」

「恐らくは大丈夫でしょう。一応、生きる気はあるようですし」

「なんて言うか、掴み所はないけど、憎めない感じの子だったね」

「じゃあ、大天使様に報告に行きましようか」

スポーツマン系、V系、女顔、細目の言葉に、後ろに控えていた数人の天使が苦笑する。確かに口を開く機会を与えられなかった天使達の目にも、零良と言う人間は他の人間とは違うように見えた。あがるがままの姿で生きている、その場、その時によって自在に形を変える水のように。掴む事は出来ないが、掬う事は出来る。しかし指の間からすり抜けるような。

それぞれが零良と言う男の印象を語りつつ、大天使と神に今回の件に関しての報告に向かおうと、翼をはためかせた。きっと大天使は与えられた能力を聞いて笑うだろう。神もまた、長い鬚を撫でつつ愉快そうに笑うだろう。大抵、似た様な事件で力を得た者達は、戦う力を欲しがったから。

これから零良が別の世界でどうやって過ごすのか、彼と言う人間と短時間だが接した天使達は興味を持ち、時折別の世界を覗く事となる。まさかそれが天界での一大ブームになるなど、誰もこの時には気付いていなかった。

「01」天使の土下座（後書き）

誤字脱字の指摘がありましたら、お願い致します。

「02」降り立った地でのテンプレ

零良は今、呆然と異世界の地に立っていた。見渡す限りに続く平野、背後にあるのは大きな森。水の音が聞こえるので、近くには川があるのだろう。近くには町もなく、人の気配もしない。あるのは大自然オンリー。

次に彼が確かめたのは自分の格好。ゲームに登場する旅人が着ているような革の鎧。腰には剣がぶら下がっている。着ている服は丈夫な生地で作られていて、日本に居た時の姿よりはこの世界に自然だろうと、無意識に自分の格好を認めた。

ここまで彼の姿を説明する文章はなかったが、零良は非常に普通の青年である。何度か女子から告白はされた事があるものの、モテるタイプの男ではない。身長は178cmと日本人男性の平均身長より高いが、顔立ちはそこそこ格好いいけど、『イケメン!』と言う程ではないのだ。彼の友人の言葉を借りるなら、?ゲームに出て来るモブキャラ?である。

髪の色は黒で、男子にしては柔らかい髪質は、母譲り。髪の長さが少し長めなのは、そろそろ切ろうと思っていた矢先に死んだから。なので、前髪も結構長い。瞳の色は黒と言うよりも焦げ茶色。肌の色は室内での仕事が多かった為、比較の色白。今でも時折体を動かす事があるが、それも室内で行う為、日には焼けなかったのだ。

「ん？ あれ、これ、俺のスケッチブック……」

足元を見れば、落ちていたスケッチブック。轆かれた時に持っていたので汚れていそうだったが、ぱっと見た感じ表紙も何も汚れていない。なんでこんな所に、そう思いつつ体を曲げて拾い、パラパラと捲ると、絵が書かれていないページに天使からの手紙があった。

なんでも、これを渡すのを忘れていたが、自分達はそちらの世界に介入する事が出来ない為、スケッチブックを投げ捨てるように置いてあるのは許して欲しい旨が書かれている。

これはオリジナルではなく、元々零良が書いていたスケッチブックのレプリカ。オリジナルのスケッチブックは、零良の血と車に轆かれた事で汚れてしまった為、渡す事が出来ないそう。

「まあ、それは別にいいとして……」

天使の1人から与えられたリュックの中にスケッチブックをしまい、彼はこれからどうするべきかと考える。取り敢えず、人が生活する上で必要な？衣食住？の3つを整えるべき。この3つの中で今最重要視されているのは、食。住に関しては、宿やホテルなどがあるだろうと考える。

ならばまずは、人の住んでいる場所を探さなければならない。その為には地図が必要だろうが、地図を見たって今居る場所がわからなければ、近くに町や村があるかわからない。顎に指を掛けて思うのは、大抵こう言うストーリーの主人公が異世界に来た時には、悲鳴が上

がって助けを求める声が。

「わああああああ！ 助けてええええええ！」

「……テンプレ」

タイミングとしてはバツチリな悲鳴。言葉が通じる所を見ると、天使達が異世界で困らないように優遇してくれたのだろう。しかし気になるのは、その人物の声の低さ。ここは普通美少女とか、妙齢の女性などではないのかと考えながら、悲鳴の聞こえた方角に足を進めて行くと、草むらの中にしゃがんで小さく悲鳴を上げる人物を発見した。

零良の方に背中を向けてしゃがんでいるので顔は見えないが、声の通り男性であろう。長い薄茶色の髪を頸椎の真ん中辺りでひとくくりにしている。肩幅は明らかに大の男であろう肩幅なので、間違っても女性ではない筈。

窺うように相手に近づき、離れた場所から声を掛けると、悲鳴を上げた男がバツと振り向いて来る。その表情は情けなく、今にも泣き出しそうな顔。男は零良の存在に気付くと、即座に立ち上がって駆け足で近づき、興奮したような声で彼に頼んだ。

「背中に、背中に虫が……！ 頼む、取ってくれ……！！！」

あまりに必死に縋られたので若干引きつつも、零良は彼の言う虫を探す為、彼の着ている服の背中をガバリと開く。虫を嫌がる男の服

は、零良に似たような服ではなあるが、零良のように革の鎧を着けていなかった為、背中を直ぐに見られたのだ。

中にはもう1枚シャツを着ていたの、それも捲りあげると、沢山足のついたムカデのような生き物が彼の背中を這い回っていたので、軽く手で払いのければ地面に落ち、そのままどこかに消えて行った。

「1匹だけ？」

「お、恐らく」

「だったら、今居なくなりました」

服を捲っていた手を離し、虫が居ない事を教えてやれば男は背中を捲った事で乱れた服を整えてから零良に向き直り、利き手の方であるろう手を差し出して来た。握手を求められている事に気付いた零良は、同様に左手を差し出す。あくまで、彼が左手を出したので左手を出したが、零良は本来右利き。

握手をしつつ、やっと平静に戻った男の顔を見る。髪は前述した通りの薄い茶色。眉も同じ色で、その下にある瞳の色は水色と灰色の中間と言った所か。顔立ちは整っている方の部類に入るのだろうか、少し前に美形の天使達を見てしまったので、？普通？と判断してしまふ。

腰には剣を携えていたので、彼は剣士なのだろうと零良は思う。この世界には魔法があると天使が言っていたが、彼から魔法使いのよくな印象は受けなかった。あくまでも漫画・小説・映画などでは、魔法を使う人は杖などを持っている印象があったから。ある種メディアの刷り込みとも言える。

「有難う、助かったよ。いやあ、虫だけは昔から苦手だな……」

「虫が苦手なのに、何故あんな草むらに？」

「まあ、その辺りは、生理現象と言うか……。その格好をみると、君も旅をしているんだろう？ だったら察してくれ」

「大きい方ですか」

「……うん、虫に驚いて引っ込んだ。だが出来れば口にせず、察するだけで……。いや、もう良い。兎に角、助かったよ」

どこか遠くを見詰めるような目をしていた男が、零良に視線を戻す。君はこれからどこに行こうとしているんだい？ その問いに零良は少しの間の後、行き先を決めず、行き当たりばつたりの旅をしている。この辺りに町か村があったら教えてくれと願う。

男は零良の言葉に一つ頷き、すつと腕を伸ばして森の影になっている方向を指差し、丁度この近くに？アサーカ？と言う小さな町があると説明。彼もそこに向かっていて途中で、道案内をしてくれると言う。目的地は決まったので、零良は男と共にアサーカの町を目指して歩き出した。

「態々すみません。有難うございます」

「いや、こちらこそ、虫を取ってくれた恩があるからな」

「恩義を感じられる程の事はしていませんよ。だけど旅人にしたなら、致命的じゃないですか？ 虫が苦手って」

「君は痛い所を遠慮なく突いて来るね」

視線を逸らしつつ、男は幼い頃に自分の使っているベッドマットを剥がしたら大量の虫が湧いていて、それからトラウマになったのだと教えてくれた。以降、どれだけ自己暗示を掛けても、虫だけは苦手なのだそうだ。

トラウマになる程の物だから、10匹や20匹の話ではないのだろう。過去の出来事を思い出したのか、己の体を抱きしめるように腕を回した男はブルリと震え、『ああ、気持ち悪い』と唸るように呟く。きつと日本の田舎料理、イナゴの佃煮など見たら卒倒するのだろつなどと、隣を歩く男をちらりと覗き見た。一瞬見ただけなのに、男はそれに気付いたのか零良に視線を向け、軽く首を傾げる。

「ん？ どうしたんだ？」

「まだ名乗ってなかった事に気付きました。俺は零良です」

「レラ……女のようだな。オレはダスティン・デイヴィソン。
？ダン？と呼んでくれ」

女のような名前と言うのは、日本でもよく言われていた。両親は意味があつてつけた名前なのだが、意味と両親の教育にあまりの差があり、それに気付いてから零良と両親の間に軋みが生じ、結果的には行き先を親に告げず家を出る事となつた。

親としては零良の事を考えた上での教育の仕方だったのであるが、彼にとっては名の意味と両親の教えの矛盾に葛藤し、選んだ道と人生だったので後悔はしていない。

零良はアサーカの町へと歩みを進めつつ、数度その町を訪れた事があるダスティンにどんな町でどんな人が住んでいるのかと言う情報

を得ようとしたが、人に聞くより自分の目で見た方が早いと言われ、初めての町はどんな町なのだろうかと、期待に胸を膨らませた。

「02」降り立った地でのテンプレ（後書き）

【ここまでの登場人物】

主人公：久住 クズミ 零良 レラ

大の人：ダスティン^{II}デイヴィソン

「03」町に着く前に、ちょっと学習（前書き）

お気に入り登録有難う御座います。

更新もまったりですが、進み方もまったりです。

「03」町に着く前に、ちょっと学習

森を避けるように、アサーカの町を目指している零良とダスティン。時折森から飛んで来る羽虫を『ひっ！』と悲鳴を上げて避けるダスティンの姿は、若干情けない。

女の子がやるならば可愛いのかも知れないが、男が体を縮ませながら虫を怖がっているのを見ると、何故こんな居た堪れない気持ちになるのだろうか、零良は彼を見ながら考える。男であろうと女であろうと、苦手な物は苦手だと零良もわかっているのだが。

歩いている途中、初めて？魔物？なる物に遭遇した。魔物とは、魔力が体内にて暴走した生き物だと言う。通常、普通の動物にも多かれ少なかれ魔力が存在するが、なんらかの異変があつて魔力が暴走。暴走したままの魔力で子を成すと、その子供にも魔力の暴走が引き継がれて魔物が増えていく。

魔物と動物の違いとして、外見が動物よりも若干グロテスクになる。繁殖力が半端なく高い。生命力もとんでもなく強い。故に、魔物は絶滅する事なく、絶えず生まれているそうだ。

だがそんな魔物が居れば、他の動物が危ないのでは？ 思うのは当然であろう。しかし、そこは野生の動物。危険を察知すれば瞬時に逃げると言う。魔物と共存して来た故の生き様と言うべきか、こちらの動物も中々強かに生きている。

所で何故魔物に関しての話になったかと言えば、魔物が出た時に直ぐ剣を構えたダスティンと違い、零良は数メートル手前でヨダレを垂らしながら自分達を警戒し唸っている狼のような生き物を見て、首を傾げた。何、この生き物、と。ダスティンはそれを見て、『魔物だ、構えろ！』と叫んだのだ。

魔物と言う単語に目の前の生き物をやつと理解し、剣を構えていたのだが、結局零良は1度も剣を振る事なく戦闘が終了。直ぐに剣を腰に戻す事となった。ダスティンは剣に付いた血を遠心力で振りい落してから零良に近づき、魔物が出て来たのに剣を抜かなかった零良に対して苦言を言う。

それに対して零良は、まず行動が遅れた事を謝罪してから、魔物だと言われるまであの生き物が魔物だと気付かなかったと説明すれば、彼は目を丸くしてから、『旅人なのに1度も見た事がなかったのか！？』と言われて素直に頷く。

「魔物を見た事がないと言うのも、珍しい話だ。よくそれで旅をしようと思ったな。結構無謀だぞ」

「突然、家　と言うか、町を追い出された形なので」

零良の言葉にダスティンは一瞬真顔になり、暫く何かを考えるような仕草を見せてから、魔物について詳しく話してくれた。以降、彼が町を追い出された理由に関してや、魔物を知らなかった事に関しても聞いて聞いて来なかったのは、氣遣ってくれているのだろう。

ついでに通貨の事なども聞いてみると、彼は再び目を丸くし、『君はそこまで……』とどこか同情的な顔で零良を見て来る。何か勘違

いをされている上、勝手に彼の中で零良の生い立ちが捏造されている予感。しかもあまり良くはない方向に捏造されている感がひしひし。

『自分の居た町では？円？と言う単位の金を使っていたので、恐らくこちらとは違うと思って』と彼にとつては言い訳してみた事を付け足せば、独自の文化を持った国の生まれだと自分の考えていた事が違っていた事にダスティンは気付き、通貨に関しても説明してくれた。

この世界での金は、？バド？と言い、日本円で換算すると、1000円が1バド程。細かく言うと、98円30銭のだが、わかりやすく1000円としよう。鉄硬貨は1バド、銀硬貨は100バド、金硬貨は1000バドで、庶民は10000バドは中々お目にかかれ無い。大きさ的には、500円玉程。

ちなみにバドは材料が前述の通り、鉄・銀・金で出来ているが、作っているのは国家に属する錬金術師達で金に微量の魔力が含まれて居る為、同じ材料で作っても複製物だと直ぐにわかる（各店は偽造金の流通を防ぐ為、国から支給された判別の道具を使って偽造金ではないかを確認しなければいけない義務がある）ので、偽造する事は不可能だと言う。

ただしこれは商店の場合のみ。商店を通じず、個人で金のやりとりをした場合には精巧な物を作られた場合偽造金とは気付かず、受け取ってしまうケースもあるらしい。その場合、知らずに受け取った人に罪はないが、金は戻って来ないので受け取った人が損をすると言っ。

こう言う事態を避ける為にはどうするか、と言えば、ギルドを使う

そつだ。どんな小さな物でもギルドに依頼しておけば、通貨をきちんと確認するので安心だと言う。ただし報酬を貰う側は仕事斡旋料として報酬から、20%の料金を引かれる事となる。20%と言うのは大きいが、騙されて偽造金を受け取り、実質手に入った金は0よりも良いと言えよう。

旅をする以上、ギルドで世話になる可能性もあるから覚えておいた方が良いと言われ、零良は素直に頷く。もし零良が能力を使って仕事をする場合、後々使う可能性がある。

「ああ、ほら。見えて来たぞ」

「あれが、アサーカの町ですか？」

ダスティンが指した先には、家がちらほらと見える。そこから先は町になっているのだろう。町を囲む塀などは一切ないし、彼の目は町の様子は見えない。当然だ、まだ彼等の居る場所から結構離れていて、辛うじて家だとわかる程度。

久し振りに太陽の下を長距離を歩いたので、早くどこか休める所に行きたい。そして喉を潤したい。この時、零良の頭には『もしかしたら、リュックに飲み物が入っているかも？』と言う考えはなかった。日常よく使うものに、食べ物や飲み物が入っていると思わなかったから。

荷物の一覧表を見て簡易食と飲み物が入っていると知った時、途中で飲んでおけばよかった、と言うかまず真っ先にリュックに何が入っているのかを確かめるべきだったと後悔するのは、宿にて1人になった夜の話である。

【03】町に着く前に、ちょっと学習（後書き）

【11.8/13】

ザル様のご指摘により、バドに関する部分を修正しました。

【11.8/14】

meo様のご指摘により、バドに関する部分を再び修正。……アホ
ですみませんorz

【11.8/18】

minami様のご指摘により、バドに関する修正を再び。0が
つ足りていなかったと言う事実。

【11.8/25】

黄昏不明様のご指摘により、誤字修正（通過 通貨）

「04」スケッチブックとシャツ

市街地から街中へと足を踏み入れれば、徐々に喧騒が近づいて来る。天使の言った通り、ファンタジーの世界。道を歩く人は堀の深い顔立ちの一見外国人と変わらない人も居れば、獣の顔を持つ人、顔は人間と同じでも耳は獣と言う者も居る。漫画や映画、小説の中でしか存在しない亜人が、ここには沢山居た。

零良は物珍しげにキョロキョロと辺りを見回す。メインストリートと呼べるだろう一番大きい通りには沢山の店が並んでいる。武器屋から始まり、道具屋、食材屋、屋台など。宿はメインストリートの入り口近くにあり、反対側の入り口にも1件あるそうだが、宿屋の主人は同じ者で、1号店・2号店だそうだ。

住宅街は、メインストリートから脇に入る道を行けばあると言う。アサーカの町は住宅街がメインストリートをぐるりと囲むように出来ていて、町の形としては長方形と考えればわかりやすい。

しかし魔物も居ると言うのに、住宅街が外に面してもいいのだろうか？ 魔物に襲われて、命を落とす人も居るのではないだろうか？ ダステインに尋ねると、確かにそうだが、木の柵では直ぐに壊されるし、煉瓦の柵では積み上げるのに時間が掛かる。鉄の柵は、コストが掛かる。故に、柵をつけずにいる町が多いと教えてくれた。

「これからオレは宿に向かうが、レラも1部屋取るか？」

「あ、はい。一緒に連れて行って貰ってもいいですか？」

勿論だとダスティンは笑みを浮かべ、少し通り過ぎていたので道を戻ると、3階建ての他の建物よりも一際大きい建物の前で足を止め、ここが宿だと教えてくれた。木の扉を開いて中に足を踏み入れると、直ぐそこに受付カウンターがあつて、40代半ば程の女性が『いらつしやいませ』と挨拶をする。

女性は割腹のいい体格で、こげ茶色の髪をトップでお団子ヘアにしている。カウンターが若干狭そうに見えるのは、体格の所為だろうか。にこにここと笑うその表情は、『まいう』のタレントと、アンパンマンを足して割って女体化させたような顔立ち。……想像出来ただろうか？

「おや、ダスティンさんじゃないか。ムーランから戻って来たのかい？」

「ああ。あの町は、どうも……虫が多くて」

「まだ苦手なんだね、あんたは。おや？ そちらの人は、お連れさん？」

「ここに来る途中で知り合ったレラだ」

「初めまして、レラです。今後はアサーカを中心に活動して行こうと思っておりますので、宜しくお願いします」

ダスティンに紹介され、零良は真っ直ぐに背筋を伸ばしてから、そのまま腰を曲げて礼をする。礼に関しては、習っていた武道の師範達に『礼に始まり礼に終わるのが？道？と言うものだ』と厳しく言われていた為、体に染み付いている。

しかしこんな礼をする旅人はいないのか、女将とダスティンは少し

呆気に取られてから苦笑。たかだか宿屋の女将に、そんな畏まった礼をする必要はないよと彼女は言う。どうやらこの世界では、あまり零良のような行動を取る物はいないようだ。昔、武道の合宿の際に世話になる寺や旅館などで礼を取っていた癖とも言えよう。

「2人は一緒の部屋でいいのかい？」

「いや、2部屋頼むよ。オレの部屋は……」

「わかつてるさ、虫の出辛い3階の部屋だろう？ レラさんは、どこでも良いのかい？」

「俺は虫は平気なので、どこでも大丈夫です」

「言われてるよ、ダスティンさん」

零良の言葉に豪快に笑ってダスティンを茶化してから、何泊泊まるかと問われる。ここの宿は、1泊15バドと日本円に考えれば格安の値段。食事は1食につき3バドで食べさせてくれると言う。食堂もあるが、部屋で食べる事も可能（トレーに乗せてくれるので、自分で持つて行くそう）弁当も前日に頼めば、指定した時間までには作ってくれる。

部屋の掃除は言えばサービスで行ってくれるが、洗濯などは別料金を支払うか、もしくは自分で行う。宿としては、簡単な仕事しかないそうだ。日本のホテルは頼まなくても掃除をしてくれるのに、頼まなければ掃除をしないのは何故だろうと考え、直ぐに？傭兵や魔法使いも泊まるから？と言う異世界ならではの理由に至った。

武器や道具などだけではなく、貴重な物を置いておいたり、素人が触ると危ない物もあるから、最低限のサービスに止めたのだろう。自ら掃除を頼めば、先に危ない物や触れて欲しくない物を片付ける

なり、掃除の間部屋から持ち出したりが出来る。

取り敢えず、今は何泊泊まるか考えなければいけない。明日1日町を見て回って、雰囲気が良いればこの町に住もうと考える。他の町を見てあるくのは面倒だし、最初がこのアサーカの町と言うのも何かの縁だと思うから。

「では取り敢えず、3日間の朝夕の食事付きでお願いします。その後で延長を頼むかも知れませんが、出来ますか？」

「ああ、勿論さ。ダスティンさんは？」

「オレも、まず3日で頼む。折角レラと知り合えたから、時間のあ
る時にでも町を案内してやりたい」

今日は疲れただろうし、明日にでもどうだ？ ダスティンの申し出に『是非お願いします』と頼んで、2人は3日分の宿代を前払いする。渡された鍵に付いた番号は201。ダスティンは303。階段を上って、ずっと奥の突き当たりの部屋が1号室。丁度角部屋で、隣は空き部屋。

階段でダスティンと分かれる前に、浴室とトイレの場所を教えられる。浴室は1階の裏手にあり、トイレは各階の階段の直ぐ傍に男女別のトイレがある。男女のトイレは廊下を挟んで向かい合わせにあり、わかりやすく赤いマークと青いマークが付いているので、間違える事はないだろう。どうやら異世界でも、男は青、女は赤のよう
だ。

「何かあったら、遠慮せず部屋に来てくれて構わないから」

「有難う御座います。じゃあ後で」

短く返事をしたダスティンは3階へと上って行き、零良はそれを少し見送ってから廊下の1番奥、201号室へと向かった。廊下を真っ直ぐ行き、突き当たりの右手側の部屋が、201号室。正面の部屋は、207号室。女将に預かった鍵を使って扉を開けると、6畳程の広さを持つ部屋。

入って直ぐに視界に入るのは、零良から見て左手の壁際にあるベッド。シーツは薄いベージュ。白ではないのは、白だと汚れが目立つからだろう。この文化で？驚きの洗浄力？を持っていたり、？白さが際立つ？洗濯洗剤があるとは思えない。

ベッドのある壁際の反対の壁際には小さな机と椅子。その隣には小さな棚があるが、中身は入っていない所を見ると、ここに荷物を置くのだろう。クローゼットはなく、代わりに壁に打ち付けられているフックとハンガー。本当に泊まるだけの部屋と言える。

別に贅沢を言うつもりはないし、寧ろ初めての異世界の夜が野営ではない事が喜ばしい。零良はベッドに腰掛けると、天使から預かったリュックを背から下ろし、何が入っているか調べる為のメモを探す。1番大きいスペースに入っていると探せないだろうと思ったので、小物を入れるスペースのファスナーを開けてみると大当たり、メモが入っていた。

「使用方法……中身を取り出したい時には手を入れて出したい物を考えれば、それが手に触れるので、引っ張り出すと良い、か」

試しにファスナーを開いて手を突っ込みスケッチブックと念じると、手の平に何か当たったのでそれを掴んで引っ張り出せば、スケッチブックが出て来た。きつと未来の世界の猫型ロボットもこんな風にして取り出しているのだろうと考えるが、たまに自分の望んだ物が出てこず、アイテムを次から次へと放りだしているのを思い出し、性能はこちらが上か、とリュックを一瞥。

他の荷物の確認は後にして、先に具現錬金をやってみようとスケッチブックを開き、適当なアイテムを探す。1度具現させた物は絵に戻す事が出来ないと言われたので、最初のアイテム選びは慎重にと、ページを次々捲る。

零良の目に止まったのは、ハンガーに掛かっていた洗濯物のシャツを何気なく書いた絵。丁度死んだ時に着ていたシャツもこれだったと考えながら、錬金しようと思えるのだが、どうやって錬金するかを知らない。

「両手を合わせてから、スケッチブックを叩く訳でもないだろうし

……」

暫く絵のシャツを見詰めていて、ふと、このスケッチブックに天使が書いたメッセージがあった事を思い出す。見落としている物があるかも知れないとページを最初に戻し、1文字目から最後まで見落とす事のないように読んでいくと、最後のページに錬金術の使い方説明有り小さく書いてあった。

本当に小さかった為見落としてしまったのは、零良の責任ではない

だろう。契約書を細かく偽装する詐欺師のように、小さく小さく書いてあったから。何より、零良は最初のページから具現させても良いようなアイテムを探していて、まだ最後のページまで達していない為、気付かなかったとも言える。

そもそも、このスケッチブックも最後まで使っていないのだから、気付かなくて当然だ。ある意味嫌がらせとも取れるような天使の手紙だが、零良は何かを感じる事なく最後のページを開いて錬金の仕方調べると、とんでもない説明が書いてあった。

？手を突っ込んで引っこ抜け？

説明と言えないような説明だが、簡潔で至極わかりやすい。要するに、リュックと同じ構造だ。恐らくこの説明を書いたのはスポーツマン系天使だろう、個性が字に溢れている。

この説明を補足するように美しい字で『錬金はこのスケッチブックでしか出来ないようになってるので、リュック同様魔法を掛けてあります』と書かれている。なんとなく、細目天使の字だろうと零良は字から人を判断。

補足はまだ続いていて、汚れないようにコーティングを施してあるそう。弾丸すらも貫通させないスケッチブックだから、いざと言う時の盾にも使える。スケッチブックを盾にする方は兎も角、スケッチブックに攻撃を弾かれる方はシヨックだろう。

説明や補足は理解したので、1度実行してみようとシャツのページを開き、指先をシャツに触れさせる。白いページにゆっくりと沈んで行く零良の指。ミルクの入ったバケツに手を入れるように手首まで差し込んで、指先に生地を感じるとそれを掴み、一本釣りのよう

に引っ張った。

手に掴んでいたのは、絵で書かれていたTシャツ。縫い目や繋ぎ目など、絵に書かれていない部分もきちんとあるのは、抜き出す時に零良の記憶やこの世界・異世界にあった物の情報を取り入れ、能力が自ら補正しているのだろう。不自然ではなくなる為に。

スケッチブックにあったシャツの絵を確認すると、描かれていた絵はなくなっていて、空白に変化。初めての鍊金に感激を覚え、シャツを両手で持って見、ある事に気付いた。

このシャツは生地の色は白で、中心部に柄が入っているのだが、元々のシャツは裏にも柄があった。しかし鍊金したシャツの裏の背中の部分は、何も書かれておらず真っ白。絵でシャツの柄を書いていなかったから、書いていない部分が具現されなかったのだろう。

大抵服などのデザインを書く場合、同じページに表と裏のデザインを書く。細かい部分のデザインなども、作者によって書き方が違うが（ふきだしを付けてその中で表現したり、矢印で？この部分？とわかるように）拡大して書く。

しかし表と裏を別々に書いた絵を具現した場合、1枚のシャツと認識して具現されるのだろうか。じゃないと2枚のシャツと、どの部分かわからない布地が出来上がってしまう。

そして何より、このシャツのサイズは零良が着ていたサイズよりも若干小さい気がする。洗濯をしてシャツが縮んだと言う訳ではなく、元々このサイズで鍊金された感じなのだ。

「背中部分の柄と、サイズは……ああ、襟首の所にタグを付ければ良いのか？」

考えても無駄だ、やってみるしかない。リュックからペンを探して取り出し、何も書かれていないページにシャツを書く。柄は白と黒で書く事が出来るパンダにして、前面にパンダの顔を、背中にはパンダの後頭部を書き、ふきだしを襟首の辺りから出してサイズを？M?に。

書き終えてから手を突っ込んでシャツを抜き出せば、別々に柄を書いた絵は両方の絵を合わせて一枚のシャツとして認識されたようで、表と裏の絵はきちんと描かれていたのだが……。

「メンズのMじゃないよな、これ。でもレディースにしても……大きいのか……？　メンズとレディースの間……？」

そこまで細かく設定しなければいけないのかと、零良は小さく溜息を吐いて、今度はシャツの形だけを2つ書く。そして2枚のシャツのタグに？メンズ・M?？レディース・M?と記入し錬金すれば、思った通りにメンズとレディースの無地のシャツが2枚出来上がった。

ここまで考え方としては間違っていないかったようで、柄物のTシャツは見事に錬金された。次に気になったのは、服の素材。どうやら綿100%のシャツのようである。綿は自然に出来るもので、ナイロンやポリウレタンは地球には素材としてあっても、こちらにはない可能性があるから、綿で出来たのだろうか？　それとも元々綿の

シャツのイラストだから、綿なのだろうか。

「これは……色々試行錯誤が必要か……」

思った以上に、絵から具現させると言う錬金は深い。絵で書いてポンと出すだけではなく、素材から色々考える事が出来るなんて。しかし服などのタグで表示出来る物は良いとして、金属などはどうすればいいのだろうか。剣の刀身や柄に？鉄？？銅？？鋼？などを小さく書けば良いのだろうか。

次から次へと考える事が出て来て、零良は深く息を吐く。ただ絵に書いた物を具現化させれば良いと思っていたが、大間違い。錬金はそんなに簡単な事ではない。過去に呼んだ漫画の錬金術師はこんなに面倒な錬金をしていたのかと思いつ返すが、彼等は元々ある材料を駆使して錬金していた。零良と違い、1から作り出した訳ではない。

「……ちよつと休憩」

スケッチブックを置いてベッドに横になると、視界には見慣れぬ天井。深く息を吸えば、嗅ぎ慣れない部屋の匂い。身を擦じらせると、着慣れない服が布ズレの音を立てる。

これからその全てが、零良の日常となるのだ。日本で通用した常識は異世界では通用しないから、色々覚えなおす必要もある。何よりも、どこかに腰を落ち着かせて、この世界の間人として暮らさなければ。夢でも、映画を見ている訳でもないのだから。

だが今は暫しの休憩がしたい。ゆっくり目を閉じて遠くに聞こえる人々の声に耳を傾けていると、やがて意識は沈み、数十分後には部屋に微かな寝息だけが音として存在していた。

「04」スケッチブックとシャツ（後書き）

【11・8/15】宿泊料金を30バド 15バドに変更

【11・8/19】シャツ錬金の際の説明を加筆（縫い目・繋ぎ目
部分）

「05」チャンピオンベルトな腕時計

街中に響き渡るような大きな鐘の音が聞こえ、零良は目を覚ます。ぼーっとした頭で『ここはどこだろう』と自分の居る場所を考え、死んで異世界に訪れた事を思い出すと、体を起こして窓の外を見た。美しい夕焼け空が窓の外に広がり、カラスのような鳥が巣に戻るのか数羽飛んでいた。

この世界に来たのがどの位の時間だったかわからないし、この町が何時に日の出・日の入りを迎えるのかわからない為、時間の感覚が掴めない。時計でもあればいいのだが、残念ながらこの部屋に備え付けの時計などはなく、時間を知るのは不可能。後で時計でも書いて錬金しようかと考え、大きく伸びをする。

少し眠って精神的にも体的にも落ち着いた所為か、零良は空腹を感じる。前金は払ってあるし、既に夕方なので夕食でも食べに行こうか。だったら明日アサーカを案内してくれるダスティンも誘った方が良さそうかと、ベッドから下りリュックと部屋の鍵を持って部屋を出ようとするが、スケッチブックをベッドの上に放置したままな事に気付いてリュックに仕舞ってから部屋を出る。

3階に上ってダスティンの居る303号室のドアをノックすれば、中から声が聞こえた。零良は名乗って、夕食を食べに行く旨を告げると、自分も行くので少し待ってくれと言われる。ドアの近く、壁に寄りかかって待つて数分もしない内にダスティンは部屋から出て来て、待たせた事の謝罪をした後、2人は1階にある食堂へと移動。

食堂は4人掛けの丸いテーブルが幾つかあり、予備の椅子が壁際に

数個並んでいる。食事はどうやって頼めばいいのだろうかとダステインを見れば、彼はこっちで頼むんだと言って、入り口から右手にある厨房へと繋がる小窓に『食事2人分頼む。201と303だ』と部屋番号を言って、適当な席に着いた。

「食事を頼む時には、あの窓に向かって部屋番号を言えばいいんですか？」

「ああ、そうだ。この町だけじゃなく、大抵の宿屋は同じだな。宿の食事は日替わりでメニューが変わるが、好きな物を出してくれるって訳じゃないから、食べたい物があるなら外食をおすすめする」

日本でも大抵日替わりの定食などはあるが、中身を見ずに商品が出て来ると言う事はあまりない。食物アレルギーがある人が、アレルギー反応が出る食べ物を出されると困るからだろう。

零良は好き嫌いはなかったのだ、ある程度は何を出されても大丈夫だが、彼が世話になっていた漫画家は好き嫌いが酷かった。食事を作るのに色々試行錯誤し、嫌いな食材でも食べられるように工夫して、なんとか野菜嫌いをある程度直したものだ。

暫く待っていると、厨房へと繋がる小窓の横にある扉から20代前半程の女性が出て来た。手にはトレーに乗った食事を持っている。零さないよう、注意しながら歩いている女性は、真っ直ぐに零良とダステインの座っている席へと向かって来た。他に客が居ないので、直ぐに2人の食事だとわかったのだろう。

近づいて来た女性は、肌の色は白く、髪は赤毛で三つ編みにしている。顔にはソバカスがあり、大人になった赤毛のアンと言った所か。

赤毛のアンのような格好をさせたら似合うのだろうが、彼女の着ている服は、麻の布で出来たようなシンプルなワンピース。その上に腰下に付ける短いエプロン。

「お待ちどうさま！ お代わりは2杯までですので」

「有難う」

「有難うございます」

彼女は笑顔で声を掛けて来て、トレーを置くと直ぐに厨房へと引っ込んで行く。零良は何となく視線で彼女を追いかけて、開けっ放しのドアの向こうに彼女が消えて行くのを見ていたのだ、ダスティンは彼女ではなく零良を見て『好みか？』とニヤニヤ笑って聞いて来た。

ここで過剰な否定をしてもからかわれるのがわかっていたので、小さく首を振って『服を見ていただけです』と言うと、今度は不思議そうな顔に。コロコロと表情が変わる人だと思いつつトレーを見れば、バターロールのようなパンが2個と、ステーキ、スープが湯気を立てている。

「服？」

「服の形を考えたりするのが好きなものですから。服だけじゃなくて、物もですね」

「レラは商売人向きか」

「商売人と言うよりも、作る方で仕事をしたいと思っています」

頂きます、と言ってからパンを千切って口に運ぶと、焼きたてでは

ないだろうが温まっている為にふわりと口の中にパンの芳ばしい味が広がる。ステーキも食べようと、ナイフ・フォークを持って肉を切り、ソースを付けて熱々を口に入れれば、一口噛むごとに肉汁が溢れて思わず口角が上がってしまう。恐るべし、アサーカの宿屋の食事。

零良が先に食べ始めたのでダスティンも食べ始めるが、零良同様にパンを千切って口に運び、ステーキもナイフ・フォークを綺麗に使って食べている。ちらりと零良が彼を見れば、スープを口に運んでいる所。

「あの、時間ってどうやって知ればいいんですか？」

「さつき鐘の音が聞こえなかったか？ あれが午後6時の鐘だ。朝6時、昼12時、午後6時に1回ずつ鐘が鳴る」

「それ以外で、時間を知りたい時には？」

「勘。懐中時計も売ってはいるが、買えるのは貴族くらいだろうな」

この町に暮らす人々は、鐘の音を中心に活動しているようだ。後は日の傾き方で、大凡の時間を計って活動するらしい。時間に支配されていた日本とは違い大雑把な感じも受けるが、本来ならこの方がストレスは感じないのかもしれないと零良は塩味のスープを口に運びながら考える。

塩味のスープは中に野菜が少しと、糸コンニャクのような、寒天のような物が入っている。食材としては何かわからないが、ツルリと食べられて美味しい。これなら何杯でもお代わり出来そうだが、そもそも零良はそんなに大食らいではないので、この量で十分。

明日の予定を話しながら食事をし、食べ終わった後でダスティンは外に飲みに出ると言う。一緒にどうだと誘われたのだが、酒を飲まないで部屋に戻ってこれからの事を考えたいと言うと、彼は神妙な顔で頷き、夜の街へと消えて行った。

1人部屋に戻ると鍵を掛け、リュックからスケッチブックとペンを出し、ソーラー電池の腕時計を作れないか考えた。時計を絵で書くのは簡単だ。小物を描くのは、アシスタントの仕事だったから。しかし問題は、ソーラー電池で動くと言う事を、どう絵で表現するか。服のサイズのように、裏にでもソーラー電池内蔵と書けばいいのか、それともそれらしく描けばソーラー電池で動く時計になってくれるのか。加減がまだわからない為、なんとも言えない。確実なのは、時計の裏に彫る方法。

考えるだけでは答えは出ないので、まず表側のデザインを描く事に時計としての機能のみを求めているので、デザインは至ってシンプルな銀の時計。文字盤は青にし、この部分で太陽光を受け電気を作る。腕に付けるバンド部分は革。

次に裏面の腕時計の設定を考えた。まず必要な機能は、？ソーラー電池？？1時間充電・24時間稼働？？防水加工？？衝撃に強い？？自動時間調整？？寿命3年？の以上。これを他人にはわからないようにする為に日本語で書くのだが、一見模様のようにすればどうだろうか、適当にデザインを考えて、拡大すれば文字が刻まれているように工夫。

描き終わって、スケッチブックに手を突っ込み取り出したのだが、リュックから現れたのは思った以上に大きいサイズの時計。大きな的には人間の頭……零良の頭と変わらないサイズの時計が出て来た。

しかも革バンドまで付いているので、零良のウエストに巻けるサイズ。

「これはないだろ。これをどうしろと……」

そもそも腕時計の場合、大きさをどう設定すればいいんだ。零良は巨大な腕時計を見ながら頭を抱えた。下手に腕と一緒に書いて、腕も付いて来たら流石に悲鳴を上げそうだ。

絵だけでは表現しきれない物を文字で書いたが、それも刻みこめと？　そもそも他の腕時計も大きさが記入されているのか？　腕時計をそこまで真剣に見た事はない。と言うより、絵で描かれない内部構造はどうなるんだ。流石に中を分解して見た事などない。時計の外見をした、ただのケースになる可能性がある。

ベッドやタンスなど、ある程度の造りがわかっているものならば兎も角として、器械内部の構造は零良にはどうしようもない。外観を描けても中が描けないなら、どうしようもないではないか。

八方塞な状況に、盛大に溜息を吐いて時計を見る。いっそ、これを分解してみようか？　巨大腕時計に手を伸ばした時コツンと音が聞こえ、音の発信源を見れば、床に紙が落ちている。正月に神社で引いて木に縛り付けたような形の紙。どこから？　と天井を見上げるが、天井にはなんの変化もない。

忍者でもいるのだろうかと考えるが、異世界に忍者が居る訳がないだろうと直ぐにその考えを否定して、落ちていた紙を拾って広げてみると、どこか丸文字気味の手紙らしき物。どうやら天使からのメ

ツセージのようだ。字からして、女顔の天使だろうと推測。

手紙の内容は彼が今悩んでいる事で、絵とは言っても限界があるから、ある程度は文字で表示しても大丈夫だとの事。ただし、内部構造に関しては零良が考えて居る通り。むやみやたらに地球の技術を、そちらに持ち込まないようにとの配慮でもあると書かれている。そして、零良が視線を止めたのは、ある一文。

？懐中時計、リュックに入ってるよ？？

時計も日用品だった。思わず呟いてしまったのは、仕方ないだろう。リュックに色々荷物が入っている事を失念していたのは、零良なのだから。大事な事を思い出させてくれた天使に感謝を込め、天井を見上げて礼を言い、鍊金よりもまず先にリュックの中身確認を始める事とした。

メモを見ると確かに日常使う物で、こちらの世界にあまり影響を及ぼさないようなものばかりが書かれている。鏡、丁字カミソリ、綿棒、ティッシュなどや、服、下着、パジャマなども。文房具も充実で、足りなくなったら色鉛筆を書いて具現させればいと助言まで。

メモを読み進めて行くと携帯用の食料やパン、飲み物なども書いてある。腐らないのか？ と言う零良の心配を解消するように、『中は時間が止まっている状態なので安心』とあって、だったらここから出て旅をする時も食糧が腐らなくて安心だと思ふ反面、アサーカに向かう途中で水分補給がしなくなった時に我慢していた事を思い出し、真っ先にリュックの中を確認しなかった自分を後悔。

以後、こんな事がないようにしっかりと周囲のチェックを怠る事なかれと自戒し、再び荷物の確認を始める零良。時間を掛けて一つ一つ

リュックに何が入っているかを確認。個数もきちんと確かめ、何が足りないのか、他に何が必要なのかを書き出す。

それが終わったのが、午後11時を迎える頃。昼寝はしても、短時間だが集中して疲れた。その上風呂に入るタイミングも逃してしまったので、今日はもう寝て、入浴は朝にしようとしていた服を脱ぎ、パンダのシャツとスウェットの下だけを履くとベッドに潜り込むと眠気は直ぐに訪れ、零良は抗う事なく夢の世界へと身を委ねた。

「05」チャンピオンベルトな腕時計（後書き）

ダスティンの名前がどうしても覚えられず、どうやって覚えようかと考え、考え、あだ名を考えました。

ダスキン。

……1発で思い出せるようになった彼に、祝福あれ。

【11・08/15】句読点を修正。

「06」量産方法発見

「 以上がアサーカの街だ。後は住宅街だから、あまり見て回る物はないと思う」

「 態々有難うございます」

翌朝、8時過ぎにダステインと合流して朝食を食べた後、軽く浴室（風呂と言っても湯船はなくて、湯を体に掛けて洗う程度の浴室）で汗を流してから街を案内して貰った。街の雰囲気としては悪くはなく、この街に住んでも良いかも知れないと言う気持ち湧いて来る。

案内が終わった後、他にどこか行きたい所や知りたい場所はないかと聞かれたので、行きたい所はないがギルドに関して聞きたい事があると、登録に関して尋ねた。ギルドの登録は身分証明の代わりにするのかと尋ねれば肯定の返事。

他人た他の種族に関わらず、部族で固まって暮らしていた者が出稼ぎなどで部族を出る時、身分を証明する物が無い事は多々ある。部族で固まって暮らしているなら、身分は皆知っていて必要ないから。

しかし外で仕事を貰う場合、どうしても身分を証明する為に必要になる。そういう時に、ギルドに登録して与えられる身分証明を使うのだとか。ギルドの身分証明書を提示すれば、検問所のある町も簡単に入れると言う。

「そのギルドの証明書で、家を買う事も可能ですか？」

「家！？ あー、まあ、買えると思うが……借家じゃ駄目なのか？」

「出来れば落ち着きたいと思って居るので、借家よりも持ち家の方が……」

誰かに金を払い続けると言うのも面倒だし、家を汚した時に『申し訳ない』と言う気分になるので、持ち家の方が気持ちが良い。零良はそう思っただけで家を求めて居る。

何より、以前は漫画家の所で下宿させて貰っていたから、自分の終の棲家と言う物に憧れていたりもする。実家は父親の持ち家だが、将来己の物になっていたとしても、自分の物だとは思えなかったのだ。

「取り敢えず、身分証明の代わりにギルド登録に行こうか？」

「お願いします。すみません、何から何まで付き合っただけです」

「いや、気にしないでいいさ。レラは、どこかオレと」

そこで言葉を止め、曖昧な笑みを浮かべて『こっちだ』とギルドに足を向けるダスティン。笑みの意味がわからず、軽く首を傾げる零良は、ダスティンの後に付いて行く。彼が入ったのは、メインストリート、宿屋から少し離れた反対側にある建物。宿屋と同じくらいの大きさ。

中に入ると真っ先に目に入る受付に、壁に貼ってある依頼であろう

の紙の数々。椅子やテーブルが幾つか置いてあって、数人の傭兵達が零良に一瞥をくれるが、直ぐに興味が失せたように視線を戻す。

立ち止まっている零良を呼ぶダスティンは、受付の前で待つてくれた。彼の元に向かうと、既に受付の女性に話は通っていたのか、こちらにご記入下さいと一枚の紙を差し出された。

必要事項を記入し、紙を彼女が見えやすいように回転させてペンと一緒に返すと、女性は軽く目を見開いた。一瞬表情を変え、直ぐに業務用の表情に戻した女性は、ギルドカードを作りますのでこちらに手を置いて下さいと、目覚まし時計サイズ位の水晶玉を零良の前に置く。

「これは？」

「個人情報を記憶・暗号化させる為の物だと思って下さい。ギルドカードが紛失、盗難にあった場合、再発行手続きを簡単にする為に行います。ギルドカードにも記載されますので、他人のギルドカードを使う事は一切出来ません」

DNA情報の抜き取りと、ICチップのようなものか。零良は水晶に手を触れると水晶は薄い緑色の光を発す。その後でふわっと風が起き、彼の髪が服が揺れる。もういいですよ、と言う女性の言葉に手を離すと、彼女は直ぐに水晶を仕舞った。

カードの発行には1時間程度掛かるので、1時間後位に来て下さいと言われる。その間に何か軽く食べるかと言われたので、屋台に足を運ぶことにした。ギルドから出て少し歩くと、一見ハンバーガーのような食べ物売っている屋台を発見。これにするかと言われ、

ハンバーガーを購入。飲み物も一緒に付いて1バド。中々のお手ごる価格。

置いてあるベンチに腰掛け、薄い皮で包んである物を開いて口にすれば、少し硬めのパンズに甘辛い肉が挟んである。ハンバーガーの肉と違ってそんなに柔らかくない肉だが、じっくりと煮込んである為か噛み千切るのは簡単だった。

「……なあ、レラ。家探しに、オレも付き合わせてくれないか？」

「え？ でもダンさんは旅をしている途中なんじゃないんですか？」

「いや、実はオレもレラと一緒に、家を追い出されたと言うか……。まあ、取り敢えず行く当ても旅の目的もなく、フラフラしてるんだ」

ガブリと大きな口を開けて噛み付いているダスティンを一瞥するが、彼は視線に気付いているのか居ないのか、零良に視線を向ける事なく、笑いながら歩いている母子を見ていた。

元の世界で死んで0から始めている零良とは違い、ダスティンはこの世界に家族が居て、その上で家を出たのだらう。横顔に哀愁を感じはしない。哀愁を放っていたとしても口元のソースが、全てを台無しにしている。

「ダンさんが良いなら、お願いします」

「ああ、是非付き合わせてくれ」

「ついでにお願いしたい事もありますし……」

「ん？ なんだ？」

今、その頼みたい事を聞こうとするが、まだ出来ていないし出来るかわからないので後で頼むと言えば、わかったと頷いてくれる。町まで同行してくれたり、町を案内してくれたり、家を探すのを手伝ってくれたり、ダスティンは良い人だ。剣を錬金したら、まず真っ先に彼に使うて欲しいと零良はハンバーガーに齧りつきながら思う。

1時間後にギルドカードを取りに行き、他に行きたい所もないので宿に戻った零良。ダスティンは宿に戻らずギルドで仕事を探して、良いのがあれば行ってくると言うので、1人で宿に戻った。特にどこかに寄らず、真っ直ぐに部屋に入ってスケッチブックを取り出し、作るのはシャツ。

メンズ、レディースのシャツをデザインし、S・M・L・LLを各5枚ずつ、合計40枚具現させた。デザインは40枚全部同じで、スタイルの良い女性のシルエット。正面を向いているが少し斜めに立って、足は肩幅程まで開き、腕を上げ、長い髪を腕に絡ませている。日本では結構見かけそうなデザイン。

イラストは正面だけに描いたので簡単だったが、問題は枚数だ。40枚のイラストを描き続けるのは、正直大変だった。絵を書くのは好きだが、同じ物を何枚も描くのは相当大変な作業。ずっと下を向いて作業していたので、凝り固まった肩を回しながら、ふと、量産

出来そうな方法に気付いた。

1枚だけシャツを書き、ショップで販売しているように畳んである感じで何枚も同じ物を重ねていると言う風にしたらどうだろう。もしこれが成功するなら、錬金がとても楽になるし、疲労によってデザインに違いが出る事も少ないのではないだろうか？

試しに1枚デザインシャツを書いて、そのシャツが畳んで折り重なっている常態の絵を書く。絵としては、こんなデザインのシャツがここに10枚ありますよ、と説明するような感じで。

完成した後でスケッチブックに手を突っ込み、服を掴むと1枚の時よりも分厚い物を掴み、引っ張れば数枚のシャツ。しかし枚数を数えてみると5枚しかなく、後の5枚は？とスケッチブックを見れば、10枚書いた筈のシャツが5枚だけになっていた。

「1回取りきれない分は残るのか。……40枚の苦労は……」

残った5枚を取りながら、40枚を頑張って書いた自分に虚しさが出た。しかし40枚の苦労がなければ、こんな事を思いつかなかったかも知れない。前向きに考えようとシャツを見て、作ってしまった50枚のシャツをどうするか考えた。

試しに宿の入り口で売って貰えないだろうか。素材としては結構良い物だろうし。女将に交渉してみようと、零良は紳士物のシャツを1枚手に取り、部屋を出て受付に向かう。受付のテーブルを拭いていた女将に声を掛け、自分が作ったシャツを50枚程売ってくれないだろうかと見本のシャツを見せると、彼女はシャツを手にとって

驚いた。

「素晴らしい服だねえ！ 中々こんな上等な生地はないよ。一体幾らで売るんだい？」

「1バドでどうでしょう？」

「何言ってるんだい、これだったら6バドで売れるよ！」

「じゃあ3バドで」

女将は6バドで買えると言つが、零良は2バド値上げしただけ。これだけ素晴らしい布と縫製技術、模様の綺麗さならば6バドで売れると言つのに。欲のない零良に苦笑する女将は、最初1バドで売ろうとした彼に対して『あまり金銭感覚ないんだね』と一言。

女将の言葉に対し、自分の居た地方はバドを使わず別の単位の金を使っていたので、今一まだ感覚が掴めないと説明すれば納得してくれた。金銭感覚を掴みきるには、暫く時間が掛かるだろう。

この生地はとても上等な物で、こんなに真っ白い生地をあまり見た事はない。見たとしても貴族のドレスなどで、あまり自分達が手に入れられる物ではないと言つ。受付で売ってくれるそうなので、残りの49枚を持って受付に戻ると、女性用のサイズを見てガツカリする女将。

「あたしも1枚欲しいけど、サイズがねえ……」

レディースのLLでは入りそうになかった。だったらメンズのLL

はどうですかと、彼女の背中に回りこんでメンズLを合わせてみた。大体丁度いいくらいのサイズだろう。着てみないとわからないが、綿のシャツもそこそこ伸びる。

世話になっているし、ここで売って貰うので一枚贈りますとプレゼントすると、彼女はただでさえ頬骨が出ているのにそれをさらに強調するようにニコニコ笑って受け取ってくれた。

もし欲しいと言う人が居て、サイズがわからなかった場合は背中に合わせてみると良いと助言し、シャツを頼みますと一礼してから部屋に戻る。部屋に戻ってメモ帳を出し、『綿のシャツ 3バド』と記入。大体これを目安に値段を決めて行こうと考える。

夕食に向かった際、宿泊客がシャツを購入して直ぐに着用し、皆が同じシャツを着て食事を取っている上、厨房の料理人や料理を運ぶ赤毛の子も同じシャツを着ていたのを見た時、零良がすかさず『どこのサークルだ』と内心突っ込んでしまったのは、仕方ない事だと言えよう。

「06」量産方法発見（後書き）

宿代が3000円 1500円に変更

食事が3000円（宿泊者特別・宿泊無しは通常6000円 400円に変更）

洗濯は2000円 1000円に変更（洗剤代金込）

Tシャツは6000円 3000円に変更

…… 妥当な所でしょうか。

年収とか計算して数字を割り出せばいいんでしょうが……うーむ……。

*追記

シャツが6000円だと高いのではないか、とご指摘を頂き、ちょっと値段下げてみました。

どうも日本円で考えてしまうのですorz

お金に関しての表記を一切せず、話を進めるならばこのような事がないのですが、なんかコロコロ変わってしまって申し訳ありません。

「07」考え過ぎると、ドツボに嵌る

「おはようございます、レラさん！」

「お早う御座います、リーズさん。朝食をお願いします」

「はい！」

赤毛娘ことリーズは笑顔で零良に挨拶をし、食事を頼むと元気よく返事してくれた。零良が女将にTシャツの販売を頼んだのは昨日の事。彼女は夕食を運んだ時に、零良が作ったシャツをとても褒めてくれた。着心地がとても良く、今迄こんな素敵なお服を来た事がないと嬉しそうに言ってくれたのだ。

日本では安く売っている綿のシャツでも、この世界では中々手に入りにくい商品。綿を作るには綿花の種を植えて、綿花が弾けるまで育て、綿を収穫し、綿を打ち糸を作る。糸を重ねて織り、そこから布を作るのだから、大変な作業。

人件費の安い海外に仕事を頼むのとは違い、自分達で作っているのだから、値段が上がって当然である。零良は絵を書いて引つ張り出すだけで出来るのだから、職人や綿花を育てている人には申し訳ない。

受付で売っていたTシャツは、殆ど完売した。何故殆どなのかと言えば、レディース各種とメンズのSだけはあまり売れなかった。宿

泊客に女性が少なかった事と、男の宿泊客にはSサイズを着られる体格の人が居なかったからだ。

売れ残ったシャツは引き取ると言ったのだが、女将は全部店で買い取り売りたいと言ってくれたので49枚分の料金を受け取った。合計、147バド。中々の売り上げと言えよう。

「お待たせしました！ レラさん、新しいシャツって作らないんですか？」

「今は考えていません。もしかしたら、店を開いて売り出すかも知れませんが……」

「わあ、だったら買いに行きますね！ あのお値段でこんなに素敵なお服が買えるようになるなんて、素敵ですもの！」

この町では決めていなかったのだが、リーズがあまりにも嬉しそうに言う為、言い出しにくくなってしまふ。しかしリーズの一言が零良にこの町で暮らすと言う事を決定付けさせた。

80%程はここに決めようかと思っていたのだが、残りの20%は他に良い所があるかも知れないと言う迷いがあったのだ。彼女の言葉で、自分の作った物で喜んでくれる人が1人でも居るなら、アサーカの町にしようと思った。

決まったなら、早速住む所探し。販売に関しては、まだ何も考えていない。取り敢えず必要なのは在庫と、自分が住む為の家。住む家に関してはダスティンに協力して貰う予定なので、後で相談に行こうと考えて居ると、丁度良いタイミングでダスティンが食堂に入ってきた。零良の作ったシャツを着て。

「お早う、レラ」

「お早うございます、ダンさん。……貴方も買ったんですか」

「ああ、とても着心地が良い！ レラが作ったんだって？ 凄いな！」

「お買い上げ有難う御座います、そんなに喜んで貰えるとは思っていなかったなので、嬉しいです。ダンさん、俺、この町に家を買おうと思います」

厨房に料理を頼んでから席に着いたダスティンは、着ていたシャツを摘んで引つ張り嬉しそうにしている。小さく口元に笑みを浮かべて礼を言い、アサーカの町に家を買いたいと告げると、嬉しそうな顔をして『食事の後で家を探しに行くか』と言ってくれた。

町民でもないのに、何故そんなに嬉しそうな顔をするのだろうか首を傾げると、疑問に思った事を察したのか、『オレはこの町が好きだから、レラがこの町を気に入ってくれた事が嬉しいんだよ』と。

前から思っていたが、ダスティンはちょっと良い人過ぎるのではないだろうか。数日前に初めて会った零良に対してここまで親切にされると、何か企んでいるのか？ と思ってしまう。出会ってから今日まで、零良は世間に疎い事を見せ続けて来たのだから、詐欺師が彼を見た場合、良い鴨と言えよう。

しかしその後も暫くニコニコしながら食事をしているダスティンを見て、零良の中で『もしかしたらダスティンに騙されているのかも知れない』と言う疑惑は徐々に薄れていく。そうになると、浮かんで来るのは疑問。

「何故そこまでこの町を？」

疑問を口にするつもりはなかったのに、気付けば問い掛けていた。ダステインは食事の手を止めて零良を見ている。気にしないで下さい、と質問を取り消そうと思ったのだが、彼はこのアサーカの町を好きな理由を話し始めた。

家を追い出されて旅人を始めた時に苦勞し、旅を始めた頃の自由な気持ちも縛られ続けていた環境から抜け出せたと言う開放感も消えて、心は荒んでいった。旅を始めたばかりでギルドのランクも低い為収入は少なく、町に着いても宿に泊まる金もあらず、野営する事もしばしば。魔物との戦いだって、今のようにはいかなかった。

食べる物が無い時には、森で野うさぎなどを捕まえて焼いて食べていた（虫が出る度悲鳴を上げ、その悲鳴で獲物が逃げてしまう為、中々捕まえられなかったそうだし、半日掛けて魚を取った事もあった）。

旅を楽しむ事よりも生きる事に必死になり、心も体もボロボロになって、もう駄目かも知れないと思い始めた頃、辿り着いたのがこの町だった。倒れそうになる体を引きずってこの宿に訪れた時、ダステインの姿を見て介抱してくれたのが、この女将の娘だと言う。

宿を訪れた際1泊程度の金しか持っていなかったダステインを、体力・気力が回復するまで面倒を見てくれて、食事も与えてくれた。ある程度体力が回復したらギルドの仕事を請け、その分の金を稼いで返した。宿の力仕事を行ったりもして、旅をし始めた頃の楽しい

気持ち思い出した。

ある時、どうしてここまでしてくれたのかと聞いたのだが、女将も娘も笑って、『旅人が居なければ、自分達の仕事は成り立たない。だから将来有望な人を助けただけの先行投資さ』と言っていたが、きっと気負わないようにそう言ってくれたのだろうと、ダスティンは言った。

「勿論女将だけじゃなく、皆良い人さ。なんでも相当昔、この町が危機に陥った時に助けてくれたのが、旅人だったそうさ。その旅人が町を去る時に、もし困っている旅人が居たら助けてやってくれって言ったのがまだ残っているらしい。女将の曾爺さんの代の話らしいが、根付いているのは素晴らしい事だ」

「その旅人が町を助けなければ、今のアサーカはないと言う事ですね」

「ああ。だからオレも誰か困って居る人が居たら、手を差し伸べようと思ってるね。傭兵を引退した奴等は、この町で暮らす事が多い」

きっとオレも将来ここで暮らすんだろうな、との言葉を最後に、ダスティンは語りを止めて食事に集中。話しながら食べていたので残りは少ない。この町に来た時、塀も囲いもないのに魔物が来る事はないのか、被害はないのかと聞いたが、きっと傭兵を引退した人達が町を守っているのだろうとなんとなく考える。

嘗て旅人に救われた町は、旅人を助け、助けられた旅人が町を助けるようになる。漫画や小説、映画ではよくある設定で、使い古された感じはある。しかし現実これを目の当たりにし、自分もその？旅人？のくくりに入れられるなどは思いもしなかった。漫画のア

シスタントをやっているとしても、所詮作った物語の中の事だと思っただから。

そう言えば、この宿に来てから部屋に籠っていたり、食堂と受付とトイレ、風呂の行ったり来たりしかしていないからか、ダステインを助けたと言う女将の娘を見かけた事がない。時折掃除をしている人は見かけるが、娘と言う年齢の人は居なかった筈。リーズはダステインと親しげに話していた記憶はないので、違うのだろう。

「ダンさん、その娘さんは今どこに？」

「ん？ ああ、彼女は別の町の宿に勉強に行っている。サービスの特徴はその宿によって違うからな」

成程、見た事がなくて当然だ。態々他の町に勉強しに行くなんて、この仕事を余程誇りに思い、後を継ぎたいと考えて居るのだろう。見た事もない女将の娘に少しの尊敬を覚えるが、それと同時に思い出したいくない過去の片鱗が現れそうになる。嫌な記憶はふとした夕イミングで思い出しやすく、零良の顔は無意識に顰められた。

零良が機嫌悪そうな顔に変化したのを見て、ダステインが苦笑しながら『そんなに会いたかったのか？』と聞かれ、自分の顔が変化している事に気付き、違うと否定してから眉間に寄っているだろっ皺を指で伸ばした。

「全く関係ない所の関係ない話を思い出して、苦い気分になっただけです」

気にしないでくれと言わんばかりの言い方だったが、ダステインは詳しく聞く事をせず『そうか』と一言言つて、食べ終わったから早速行こうかと立ち上がる。即行動の人だなあと食器を下げてから、ダステインの背を追いかける零良。直ぐに着替えてくるから、少し待つて居てくれと言われ、宿屋入り口にあるベンチに腰掛けてダステインを待つていた。

日本ではあのシャツを着て歩き回つても平気だろうが、良質の綿を手に入れにくいであろうこの世界であのシャツを着て歩き回るのは憚られる。そもそも綿の値段は幾らなのか、皆は幾らで服を買つていいのか、市販の物はあるのか、それともオーダーメイドなのか、全くわからない。

試作品とは言え、49枚のシャツを売りに出したのは拙かつただろうか。6バドで売れると言われたので3バドにしたのだが、今更値段をあげられはしない。それよりも、自分が大量に生産して物流が狂つたりしないのだろうか。物が増えすぎると価格が落ちる可能性があり、零良と違つて一から作り出している人に見れば価格が下がるのは喜べない事だろう。

「どつしたんだい、難しい顔して」

受付に座つて繕い物をしていた女将が、眉間に皺を寄せて考え込んでいる零良を見て声を掛けた。女将も零良の作った服を着ていて、嬉しい反面今その事について考えて居るので、なんとも言えない表情になつてしまう。

「女将さん……。いえ、商売って難しいなと実感しました」

「商売？ レラさんは商売人じゃないだろう？」

「そうなんですけど、物価を知らない俺が服を安く売りに出して、綿の値段や価値が下がって、服を作る職人さんが苦労しないかと……」

これだけの短い説明で女将は理解してくれたのか、金持ちなら兎も角として町で働いている人が着ている服は麻や三級品の綿が多い。貴族の服を作って余った物や、所謂アウトレットの状態で下がって来る物が多く、儲けは期待していない為にあまり深く考えなくてもいいと助言をくれた。

布は三級品でも、作っている人がいるのでは？ 零良の問いに返って来たのは、大抵の服は布を買って自分で作ると言う事。なので難しいものは作らず、簡単に作れるものばかりを空いている時間に作る。裁縫が苦手な人は頼んだり、市販の物を買ったりするが市販の物は布の割りに値段が高いので、あまり買う事はないと言う。服を自作する為、皆がある程度の裁縫が出来るとか。

「安い値段で服が買えるのは、あたしらは嬉しいけどね」

「調整が難しい所ですね」

やはり自分が作って、商売は人に任せの方が良い気がして来た。思いがけない物価の差と価値観の相違に零良は溜息を吐き、商売の難しさを実感していた。

「07」考え過ぎると、ドツボに嵌る（後書き）

名前が付きまして、赤毛の女性・リーズ。

名前は命名サイトにてポチリとボタンを押し、気に入った物が出るまで押し続けます。

「08」マイホーム、ゲットだぜ！

ダスティンと空家を探して、3時間程。街からは少し離れた、郊外にある2階建ての家。街から離れているので、値段は街中の建物よりも安く、20000バド。値段の安さは建物の古さと、環境にあった。丁度零良達がアサーカに訪れた時に前を通り過ぎた所で、隣の家は十数メートル離れている。人の気配が疎らなので、魔物が出やすいのだ。

だが零良はこの環境を気に入り、古くても良いとこの家を買う事にした。一括で購入も出来るが、分割で支払う事にする。家を管理しているのはアサーカの町なので、1度町まで戻って役場に向かい、購入手続きをし、前金として幾らかを支払って家の鍵と権利書を買った。これで零良はアサーカの町の住人となる。

宿に戻って女将にこの町に住む事に決めたと告げると、嬉しそうな顔をして住所を聞かれた。別段教えても構わないので、住んでいる場所を教えると、何か困った事があつたらいつでも頼っておいでと心強い言葉を掛けてくれる。

3日泊まっただけの客である自分に、そんな風に言っただけで貰えるなんて。例えリップサービスでも嬉しい言葉。深々と礼をして部屋に戻り、唯一部屋に置いてあつた元腕時計を持って部屋を出る。背中にはリュック、肩には大きな腕時計を掛けて廊下に出ると、ダスティンが待っていた。

「オレは1カ月位はここに居ると思うから、何か用事があつたら来てくれ」

「はい。こちらから訪れるべき所を、態々来て貰ってすみません。数日以内に頼みごとをしに来るかも知れませんが、その時は宜しくお願いします」

「1から始めるのは大変だと思うが、頑張れ」

右手を差し出されたので、握手を仕返すと力強く握って来た。頑張れ、に力が入っているようで、心から応援してくれているのだろう。ダスティンの目を見てしつかり頷き返すのだが、ふと彼の視線が肩の巨大腕時計に移る。そんな物を持っていたか？ と聞かれ、リュックの中に入っていたと説明するが、結構無理がある大きさ。

興味があるのか、態々立ち位置を変えて繁々と見、それが時計である事に気が付く。これは時計じゃないか、と驚いた顔で言うのだが、外見時計だが仕掛けがないので時計ではなく処分に困って居ると言う、ダスティンが欲しがった。捨てるなら欲しい、と。

失敗作だし使い道がない物を人にあげるのは気が進まないが、本人が欲しいと言っているのだから良いか。ダスティンに差し出すと、彼は笑顔で受け取ってバンドを器用に外し、腰に巻いた。やはり扱いは腕時計ではなく、時計の形をしたチャンピオンベルトのようだ。

腰に巨大腕時計を巻き、『似合っているか？ このベルト』と嬉しそうに尋ねて来るダスティンに対し、まさか『ベルトではなく巨大な腕時計です』とも言えず、曖昧な笑みを薄く浮かべて『はい、とても』と言ってしまったのは彼の責任ではないだろう。曖昧な笑みと言葉でその場を濁すと言う技術を身に付けた、日本人の気質故の事だから。

ダスティンは宿の入り口まで来てくれて、女将とリーズ、そして今

迄顔を見た事がなかった厨房のシェフも見送つてくれる、零良の作ったシャツを着て。3日間ですが世話になりましたと頭を下げ、また何かあつたら宜しくお願いしますと挨拶をした後、家に向かう。振り返る事はせず、歩きながら考えるのは新しい家でまず何を作るべきか、だった。

日用品はあると天使は言っていたが、ベッドがある訳ではない。中に入ってみたのだが、クローゼットが唯一あるだけで、家具も何もなかった。当然だが。まず必要なのは家具。ベッド、机、椅子、棚。鍋やフライパンも具現させればいい。取り敢えず、家に着いたら家具を作る事に専念し、必要な物は徐々に足して行こうと考える。

考えながら歩いていると、危うく家を通り過ぎる所だった。改めて見てみると、日本なら幽霊屋敷と称されそうな家。屋根は三角で壁は元々白かったのだから黄ばんでいて、雨が流れただらう跡がくつきり浮かんでいる。屋根は屋根瓦が敷かれていて、数枚剥がれ落ちていている部分もあった。

家の前に小さな庭になるスペースがあるが草がボウボウと生えていて、決して庭とは呼べない。手入れをするにも、庭弄りなどした事がない零良には出来そうにもない。精々、色違いの石を敷いて綺麗に整えるしか思い浮かばないのだ。

外観を見ても仕方ないと、鍵を開けて中に入る。入って直ぐにリビングスペース。玄関入って直通と言うのは、日本には中々ない構造。縦長の建物なので、部屋は左右よりも奥へと広がっている。リビングの向こうにはキッチン、その隣には浴室とトイレ。玄関入って右手には2階に繋がる階段があるが、壁1枚隔たり。

部屋は2階に3室あって、3部屋とも大体同じ大きさ。2階にもト

イレがあるので、一々下の部屋に下りなくても済むのが良い。階段から1番離れている部屋を自分の私室と決め、他の2部屋は作った物を置くのに使う物置と、客室として使う事にした。

まずは絵を書く為の机と椅子でも作るうかと思っただが、スケッチブック大きさは通常販売されている物と同じくらいのサイズ。それに対して机は大きい。物理的に可能なかどうかと考えるが、やはりこれも試してみなければわからないので、取り敢えず1階に行つて机と椅子を書いてみる事に。

昔、アシスタント時代に書いた主人公の家のリビングチェアを思い出しながら書き、色鉛筆で木の質感を出しつつ色を塗って行く。家自体が濃い茶色の木目調なので、薄い茶色の木目にして。色を塗り終わつたら、試しに手をつ込んで椅子を探す。椅子の背もたれ辺りに手が触れたので、それを握つて引つ張り出すと、スケッチブックからニョロリと、まるでトコロテンが出て来るような勢いで椅子が出て来た。

「……………吃驚した。ちゃんと硬い」

軟体動物を思わせるような形で出て来たので、まさか柔らかいのではないかと思ひ叩いてみると、ちゃんと木で出来ている。どうやらスケッチブックよりも大きい物は、出て来る時に形を変えて出て来るらしい。これならベッドも安心して出せそうだと一安心し、椅子を作つたので今度は机を作るべく、床に座り込んで椅子を机代わりに絵を書き始めた。

長方形の4人家族が使う程度の大きさの机を作り、椅子も既に1つ

作ってあったので後3脚は欲しい所だ。零良が座って作っている椅子と同じ物をもう3脚作るうと、1つずつ書いては出し、書いては出しして、最後の1つを出そうとした時、

「おい、レラ？ ちょっといいか？」

「あ、ダンス」

返事をし、玄関の扉を開けていいかと問われる前に扉を開けたダステイン。丁度最後の椅子をスケッチブックから取り出そうとした時に訪れた為、スケッチブックからニヨロリと出て来る様子を見られてしまう。硬直するダステインと零良。

この能力が果たして人に知られてよいかわからない能力だったので、零良は言葉が何も出て来ず、零良の出した椅子が倒れて大きい音が鳴っても、2人は微動だにする事はなかった。

「08」マイホーム、ゲットだぜ！（後書き）

今更ながらR15のタグはいらなかったんじゃないかと思うんですが、後々戦闘シーンとか出て来てスプ ラッタな事になったらアレなので、外さないで置いてあるんですが、この展開で……そんな事になるのかどうか……（笑）

【11・8/18】minami様のご指摘により、家の価格設定に0がひとつ足りなかつたので、足しました。

【11・8/27】編最中 棘様のご指摘により、机と椅子がリュックからになっていたので、スケッチブックに修正。

「09」これが本当の1歩目

沈黙を貫いたまま、2人はいつ口を開こうかと互いを窺っていた。その様子はまるで見合いの席にて仲人と付き添いの親に置いてけぼりを食らった内向的な男女のよう。尤も、2人は男同士であり、その気は全くないが。どちらからか言葉を発そうとして、音にならずに口を閉じる。数度繰り返し、それでもまだどちらも話を切り出せない。

ダスティンは返事があっても扉を開ける了承を取る前に開けてしまったと言う申し訳なさがあつてなかなか話を切り出せず、零良は錬金術と言う技術はあつても自分のと違う可能性と、自分の生い立ちを話していいのかわからないと言う疑問があつたから。天使達に口止めはされていないが、あまり話されたくないだろう、身内の不始末などを。

「あー……良い、机だな」

「有難う御座います……」

ダスティンがやっと一言発するが、会話が終わってしまった。自分が錬金で作ったと言い、そこから話を繋げていけば良かったのだろうが、普通に礼を言い『しまった』と思つた時にはもう遅い。再び沈黙が流れてしまう。

漫画の効果音としては『シィ……ン』と言った所だろう。『シーン』ではなく『シィ……ン』なのは、彼を雇った漫画家のこだわりだった。道具の一つ、効果音の一つ、小さなアイテムの一つにもこだわりを持つていた師匠だったからこそ、零良も道具の一つ一つにこだわりを持つようになった。色んな角度から道具を見て、絵を書いたのが懐かしい。

つい過去を思い出して現在の状況を忘れかけた零良だが、ダスティンは意を決したような目をし、彼に問う。『あれは魔法なのか？』と。核心を突いているようで、若干外れたダスティンの問いを否定するように小さく首を横に振ると、誤魔化す事など最初から諦めていた零良は短く『錬金術です』と答える。戻って来た言葉に、目を丸くするダスティン。

「まさか！ あんな錬金術などありえない！」
「ありえなくても、あれが俺の錬金術なんです。見られてしまった以上、誤魔化す事は不可能なのである程度をお話します」

小さく息を吐いてから、零良は自分に起こった出来事を話し始める。事故で死ぬ筈だった女性の代わりに、女性の前を歩いていた自分が殺された。自分を殺した犯人は、その女性に惚れたと言う天使。天使は人の死を管理する部署で働いており、女性を死なせたくはないが故に自分を女性の代わりに死なせて、誰かの？死？と言う事実を作り上げた。

しかし自分の死は元々予定されていたなかったので、天使の仕出かした事への謝罪として自分の住んでいた世界から別の世界へと渡り、

異世界で生きる事となった。特別な能力を特典として貰って。その能力が、スケッチブックに自分で絵を書き、それを取り出すと具現化されると言うもの。宿で売っていたシャツも、ダステインの付いている巨大腕時計も、この机も椅子も自分の能力で生み出したものだ。

ダステインと会ったのは本当に偶然で、生き返って直ぐに彼に出会った。出会ってから、会話の中でダステインに嘘を吐いた事はない。追い出されたのは町だけではなく世界からだが、世間に疎いのは本当だし、こことは違い？円？と言う通貨を使っていたので、金銭感覚もまだ慣れずに色々苦労している、と。

今説明すべき話は終わったので、他に何か質問があれば答えると言うが、特に聞きたい事はないと言われてしまう。その口調や態度がどことなく硬い為、やはり信用されていない、もしくは信用を根底から突き崩してしまったのだと感じてしまう。

「レラの話を利用しない訳じゃないんだが……」
「いえ、信用はしなくていいです。こんな話だった、程度に思っただけで貰えれば。俺がもしダンさんの立場で、行き成りこんな事を言われなくても信用出来ると思いませんし」

きっぱりと自分の話を信用しないでいいと言った零良に、ダステインは呆気にとられる。普通、あくまでダステインの感覚の普通だと『嘘じゃない、信じてくれ』との言葉があっても良い筈。だが零良はそれを発せず、信用出来ない物は出来ないで良いと言う。

正直だが、単語の前に？馬鹿？が付きそうだ。彼は額に手を当てる

と、くつくつと笑い出す。肩を揺らしながら、堪えるように。何故笑われているのかがわからない零良は、不思議そうな顔でダスティンを見ているだけ。

「そうだな、話自体は信じられるものではない。だがオレは自分の勘で、レラと言う人間は信じる事が出来ると思ってる」

「はあ……荒唐無稽の話だとはわかっています」

「レラの話を実際と考えると、君はこの世界に関して殆ど知識がない。それを知った以上、オレは君をこのまま一人で暮らさせるのは心配だ。だから、一つ提案がある。オレを宿と同じ料金で、ここに住ませて貰えないだろうか」

突然の申し出に、今度は零良が驚く番だ。ダスティンがここに暮らす。部屋はあまって居るし、ベッドも自分が出せばいいのだが、旅をしている彼がこの町、自分の買った家に留まる理由はなんなのか心配しているにしても、少し過剰に心配しすぎなのではないだろうか。

「オレも家を追い出されたと言う話をしたが、オレの生家は有名な錬金術師を生み出して来た名家でね。オレも幼少の頃から両親に錬金術を叩き込まれたんだが、元々興味が持てなかった所為で、そっちの方はからつきし。それでも親に認められるよう必死で努力していたけど、ある時に言われたんだよ。錬金術の才能のある妹に当主の権利を譲るから、お前は必要ない。荷物を纏めて明日までに出て行けって」

錬金術中心の生活を送っていた為、普通の勉強をあまりして来なかったダステインは、世間に出て非常に苦労した。出かける時にも見張りのように付いて来た使用人が居たし、友人など作る暇もない位に朝から晩まで勉強と錬金実験の繰り返し。それ故、金銭感覚もつく筈がなく、与えられた小遣いを使う事もあまりなかった。

家を出てから、『世界を見て回りたいから旅人になろう。それには剣の技術が必要だ』とギルドに登録して初歩から始めた時は、勉強するより体を動かす方が好きだったので剣を覚えるまではとても早かった。だが旅人として必要な金銭感覚や日常を暮らす為の技術がなかったため、そこが非常に苦労した、と。

「オレは行き倒れ掛けてアサーカの町で助けられたが、レラは違う。君は素晴らしい能力があつて、家も買つて、違う道で生きていこうとしている。だが、この世界を知らないのは危険だ。殆ど何も知らないだろう?」

「そうですね。一般的な知識が欠如しているのは、わかっています。だから決められた期間……1年でも半年でもいい、オレをこの家に置いて勉強してみないか? 1年あれば、食事の間の会話でも十分知識は得られるだろう?」

ダステインの零良への気遣いや心配は、全て過去の自分の経験から来た物。形は違ってても、世界を追い出された零良と、全てだった家を追い出されたダステイン。自分に似ている境遇の零良だから、近しい物を感じて助ける為の手を差し出してきているのか。

ダステインの言葉に、零良が甘えていいのかはわからない。協力してくれると言うのなら、頼めばいいのかも知れない。それでも零

良が中々首を縦に振れないのはダスティンを信用していないからではなく、零良の脳裏にこびり付いたように離れない言葉が、差し出された手を握るのを躊躇させている。

「レラ？ もし迷惑だと言うなら、断つてくれてもいいんだぞ？」

「いえ、とても助かる申し出です。ただ、俺が本当にその言葉に甘えていいのか、わからないんです」

「オレが頼んでいるんだ、この家に住ませてくれってな」

「……部屋の使用料は要りません。日用品と食費は1週間に1度、合計した金額を半分でどうですか？」

共に暮らす条件を出して来た彼に、ダスティンは笑顔で頷いてから『本当に部屋代は必要なのか？』と問う。彼の事だ、金を渡してその金をローンの代金として積み立てればいいと思って居るのだろう。しかしその必要はない。そもそも、ダスティンがこの町に居る間に、頼みたい事があつたから。

宿代の代わりにと頼み事に関して話をすれば、そんな簡単な事で良いのか？ と聞かれてしまう。ダスティンには簡単であっても、零良にとっては中々簡単に行かない事。何より、さまざまな物を使つただろう彼だからこそ、頼める事と言える。最初は金を払つて頼む貰うつもりだったからと言えば、ダスティンは笑いながら『金を貰わなくてもやってやるよ』とまで言ってくれた。

かくして、元・漫画家アシスタントの零良と、ギルドの傭兵で旅人のダスティンの奇妙な共同生活が、こうして始まる事となった。これから数々の騒動を巻き起こすなど、共同生活を始めたばかりの2人は、まだ知る由もない。

「09」これが本当の1歩目（後書き）

取り敢えず一区切りが付きました。

錬金術師としては、これからが始まりになります。

「10」順調生活……順調？

熱したYの形をしたフライパン（フライパン自体は丸だが、中がYのように3箇所に分かれている）の1箇所に卵を割って落とし、少し水を入れてから蓋をして焼く。その間にパンを温め直すのだが、この世界には電子レンジもなければ、オーブントースターもないので、鍋にお湯を張って蓋を逆さまにし、その上にパンを乗せる。間に紙を一枚引けば、蒸れてパンがベチャベチャになる事はない。

フライパンのもう1箇所にウインナーを投入。あともう1つは何にしようかと考えていると、階段を下りる音が聞こえて来てリビングの方を見ると、ダスティンが大きなアクビをしつつ腹を掻きながら起きて来た。

「お早う御座います、ダン。朝食はもう少しで出来ますよ」

「お早う。悪いな、いつも君に任せて」

「いえ、師匠の家の事も俺がやっていたんで、慣れていきますから」

フライパンからウインナーが焼けるジリジリと言う音が聞こえ、蓋を開けて様子を見ると卵もウインナーも良い具合に焼けている。皿に取り出して、温めたパンも別の皿に乗せ、入れてあったコーヒーをカップに注ぐ。全て2つ分。

トレーに乗せた料理をリビングまで運び、一つをダスティンの前に、一つを自分の座る席に置いて、つけていたエプロンを外して隣の空いた席に。いただきます、と食事の前の挨拶をしてから、2人は朝食を口にする。

朝食の時に話すのは、決まってこれからの予定。今日1日どこに居るのか、何をするのか、双方の行動に関しての予定を言っておかないと、携帯電話がないこの世界で緊急の連絡を取りたい時に困るのだ。

「今日は食料を買出ししてから、服を錬金する予定です」

「オレはギルドに行つて、出来そうな仕事があれば仕事をして来る。泊まりになりそうだったら、1度戻つて置手紙をするよ」

「あ、だったら昨日練成した剣と一緒に持つて行つて下さい」

ダスティンと共に暮らし始めてから、零良は3日に1度剣を練成して彼に渡し、切れ味や硬度、使い勝手などを調べて貰っている。武器屋になるか、服専門の仕事をするか、それとも別の仕事にするかはまだ決まっていけないが、今は作れる物は作つて、売れる物は売ろうと考えているのだ。

2人が共に暮らし始める時、ダスティンは自分を呼び捨てにし、敬語を外して欲しいと頼んだ。これから暫く一緒に暮らすのだから、仲良くしたいと。それに対して零良は、呼び捨ては出来るが敬語は外せないから、この口調が自分だと受け入れて欲しいと返事をした。

何故敬語を外す事が出来ないのか？ダスティンの疑問に、昔師匠に「お前は淡々と話しすぎるから、敬語を使って文字数を増やせと

言われた』と言うと、淡々とした口調で話す零良を見てみたいと言われ、1日限定で敬語を外してみた。半日もしないでダンに戻して貰ってもいいか？』と言われて、直ぐに戻したが。

ダステインの部屋は、階段上がった直ぐの部屋。零良の部屋と空室を挟む。ベッドや家具などは零良の能力で出したのだが、絵を書いている間もじつと手元を見、具現させた時には見るのは2度目でもとても驚いていた。そしてしみじみ『他の錬金術師が見れば悔しがる能力だな』と笑っていた。

ちなみに現在零良とダステインの部屋、リビングには時計が置いてある。驚く事に、時計の構造をダステインが知っていた。なんでも錬金術の勉強中に時計の構造を学ぶ授業があり、彼の説明通りに書いて具現させたら、きちんと動く時計が出来たのだ。

この時、彼はしみじみと『今となっては無駄だと思っていた知識が、こんな風に役に立つなんて』と、何事も無駄ではないのだと言う事を証明。

リビングにある時計は一般的にリビングに掛けてあるような時計で、ネジ巻式。時間は零良の持っていた時計に合わせて調節。個室にある時計は目覚まし時計サイズで、こちらもネジ巻式。ついでに作った腕時計は2人分、零良とダステインの物。防水加工と壊れない設計になっている。これもネジ巻式。

食事を終わると、それぞれ仕事や買い物の用意。ダステインはギルドで仕事を受ける為に着替えをしに向かい、零良も部屋に錬金した武器と錬金して作り出した買物力ゴを取りに向かう。部屋に立ってかけてある剣を取り、廊下に出ると同じタイミングで廊下に出た2人。零良の手に持っている剣を見て、『それが新作か！』と輝いた

目を見せるダステイン。

「以前言われた事を前提にして作りました。柄部分は前より持ちやすいと思いますよ。剣が滑って来ても大丈夫なように、ガードは厚くなっています。刀身が少しそっているので、切りつける方がメインになりそうです」

「ポンメルも丈夫になっているな。うん、今日はこれを主に使ってみる」

「不具合があつたら、忘れずに教えて下さい」

ここはこうした方がいい、この飾りが邪魔になったなど、戦ってみなければわからない意見を貰い、その都度武器を改造して行く。デザイン重視だったゲームデザインの剣とは違い、実際使うとなると無駄が多いと言つのがわかる。ダステインにも『格好いいとは思つが、実用的ではないな。飾りか?』と言われてしまった。内心相当凹んだのは、仕方ないと言えよう。

2人は必要な荷物を持って家を出ると鍵を閉め、街へと向かう。零良の目的地は野菜や果物、肉などを売っている店で、ギルドよりも家寄りの場所にある為途中で2人は別れると、数日分の食材を購入他に必要な物はなかった為、家に戻る為に再び郊外へと足を向ける。

「あ、レラさん!」

「リーズさん、お早う御座います。お休みですか?」

「ううん、買出しです。あ、この間の服、有難うございます! 今日はいはこれから仕事だから着てないけど、お休みの日にはいつもあの服で出かけるんです。そしたら皆に『どこで買ったの? 幾らなの

「?」って聞かれるの!」

零良は宿で世話になった人達に、それぞれ服をプレゼントした。女将には、体格の大きい人が着てもいいようなワンピースを、リーズには若い女性が好みそうなワンピースを、厨房に居るコックには、料理をする時に動きやすい肌着を、他の従業員の為にも何種類かの服を作って宿に置いて来た。代金は要らない、世話になった礼だと言って。

シャツは全て売り切れてしまつて、他に欲しい人が居ると教えてくれたのだが、今はまだ作つておらず、暫くは作る予定がないと言うと残念そうな顔をしていた。作る予定がないのではなく、作つてあつても売る場所がないので売る事が出来ないと言つのが一番。武器などは武器屋に引き取つて貰えば良いが、服はそうもいかない。低価格で良い品質の物、?お値段以上?を目指しているのだ。

「店を開く事が出来れば1番良いんですが、まだ考えられなくて」

「じゃあ、もし店を開く事になったら、1番に教えて下さいね!」

「勿論、リーズさんや宿の人達に1番に教えますよ」

嬉しげな表情を見せたリーズは、買出しの途中だと言って零良と別れて街の向こうに消えて行く。その背を少しの間見送つてから、家に戻る道を進んで行く。戻つた後で考えるのは、今日作る物の事。絨毯を作つてみるのもいいし、それより小さなマットも良い。カーテンはこの間カーテンレールと一緒に作つたので必要ない。

考えて居る間に家に到着し、また通り過ぎる所だったと鍵を開けて部屋の中へ。男2人暮らしなので殺風景なこの家に、他に何が必要だろう。零良は食材を鞆の中に入れ（冷蔵庫の代わり）てから、リビングの机でスケッチブックを開く。

剣ばかり書いていたので、そろそろ他の武器も書いてみようか。そう思ってペンを紙に立てた時、扉を全力で開いた音がし、そちらを見るとみすばらしい格好の7、8歳前後の少年がナイフを構えて立っていた。

「10」順調生活……順調？（後書き）

バドに関するご指摘、有難う御座います。

皆さんにご指摘される度、申し訳ない気持ちになります。

これからも十分気をつけていきますが、また「これはおかしい」と思う所がありましたらご指摘頂けると幸いです。

勿論、読んで下さる方に余計な手間を掛けさせぬように、気をつけて書いていきます。

後、服の縫い目や生地をあわせている部分はきちんとあります。

漫画やアニメ同様に描いていないだけで、実際練成すると、ちゃんと縫い目はついております（笑）

天使補正・主人公の記憶からの補正くらいに思って頂ければ。

【11・8 / 19】ぷにぷに様のご指摘により、太陽電池 ネジ巻式に変更。

「11」金髪の少年×2（前書き）

突っ込み所の多い小説を閲覧頂き、有難う御座います。
この後も引き続き、具現の錬金術師をお楽しみ下さい。

「11」金髪の少年×2

ナイフを構えた少年は、鋭い視線を零良に向けて唸るような声で金を出せと言った。くすんだ金髪の髪に、薄い緑の瞳。ナイフを両手で掴んで零良に向けているが、切っ先は少し震えている。両足を肩幅まで開いて、必死に金を寄越せと叫ぶ。

零良は静かにリュックを掴むと、少年の足元に投げ捨てた。そして一言『その中から勝手に出せ』と。少年は零良とリュックを交互に数度見、ナイフをそのままに手に持ってリュックを開き中身を見ようとするが、少年の目には鞆に何か入っている気配はない。

からかわれたと憤慨し、リュックを零良に投げつけて『ふざけんな！』と怒鳴る少年は、今直ぐに零良に向かってナイフを突き立てに来そうな程。足元に投げつけられたリュックを取り、零良は少年が開いたままのファスナーに手を突っ込んで、中から金を出す。確認した時には入っていなかった金がリュックから出て来て、目を丸くしている少年。

「金、要らないのか？」

「だっ、だって、その鞆何も入ってなかった……！」

零良はもう一度金をリュックに仕舞って少年に投げつけると、少年は慌ててリュックを拾い、金を探す。しかしやはり鞆には何も入っ

ていない。最初にリュックを投げた時のように、しかし違った表情で何度もリュックと零良を交互に見る少年。

零良は少年を観察するように見てから、『腹が減ってるなら、飯くらい食わせてやる』と言うと、持っていたナイフを落とし、唇を噛み締めてフルフルと震えだした。やがて少年の目からは、大粒の涙が次から次へと零れ出す。

顔も汚れて泥だらけ、腕にある大きな傷跡はきちんと治療をしなかったのだろう、引き攣ったように治っている。服もボロボロで汚れているし、履いている靴は辛うじて底がある程度。

「きよ、だいが……」

「なんだ？」

「きょうだ、い。おなかすかせて、まってるっ……んだ……」

「1人か？」

首肯する少年に連れて来いと言うと、少年は顔を上げる。涙が流れた跡は、涙で汚れが落ちたのか、くっきりと跡に。少年は返事をする事もなく、涙を流したまま外に走り出した。彼が落したナイフは危ないからと拾い、手が届かない場所に隠しておく。

暫くすると、少年はもう1人少年を連れて来た。ナイフで金を脅しとろうとした少年よりも小柄で、目もぱっちりしている。年齢的には、後から来た方が弟なのだろう。早く食事をしたいのだろうが、あまりにも2人が汚れている為、先に風呂に入って来いと風呂に案内。フェイスタオルを渡してこれで体を洗い、上がったらこっこのタオルで拭けとバスタオルを指す。

この家は元々近くに温泉の源泉があるのか、昔あった汲み上げ式のポンプが風呂にある。ポンプを動かすと大きな桶にお湯が入り、それで体を流す仕組み。湯船に浸かると言う文化がこちらの地方にはないらしく、体を流すだけ。

石鹸だけは辛うじて零良の能力で作る事が出来た為、？自然に戻る、泡立ちの良い固形石鹸？と？自然に戻る、泡立ちの良い固形シャンプー？？自然に戻る、髪つやかな固形コンディショナー？を製作。それぞれ色を変えておいてあり、それも簡単に説明してから、少年2人を置いて風呂を出た。出る直前に『着替えも一緒に置いておくから、その服はどこかに置いておけ』と言って。

キッチンに向かい、作るのは卵のスープ。何日か食べていないだろう少年には、肉などはきついだろうから、消化に良い物をと考える。以前同じアシスタントをしていた人が胃を壊した時、パンのお粥などを作った筈。記憶を呼び起こし、こんな感じだっただろうかと思いつながら作って味見。中々の味だったので、ダスティンが酔って返って来た次の日の朝食に作ってみようとレシピに加えた。

次に零良が行ったのは、子供服を作る事。子供服は身長に合わせて作っている。大体強盗少年は120から130前後だろうと大凡の身長を推定し、120〜130のサイズでシャツと短パン、下着を作る。もう1人はそれよりももう小さい身長だった為、100〜110のサイズで同じように服を作った。それを風呂場のカゴに入れると、風呂ではしゃぐ2人の声。数十分前まで金を出せと強盗をしていた同一人物とは思えない。

熱いと食べられないだろうと鍋から皿に移し、スプーンも用意して待っていた。やがて風呂から出た2人はおずおずとリビングに顔を

覗かせる。零良は頬杖を付いた状態で視線を2人から自分の正面に置いてある食事に移すと、2人は気付いたのか慌てて近寄って椅子に座り、スプーンを手にして必死に食べ始めた。ガツガツと、マナーも何もなく。

汚れていた髪は綺麗になり、顔に付いた泥も落ちて2人の顔立ちがよくわかった。2人共金の髪に薄緑の瞳。夢中で食事をしているので、頬や口元が汚れているが、外見としては可愛い方。米国の歯磨き粉のCMに出て来てもおかしくない。

零良が観察するようにじつと見ている事にも気付かず、ひたすら口の中に食べ物を押し込む2人。冷ましておいて正解だったと思いつつ2人を見続けて居るのだが、徐々に瞳は潤み始め、やがて泣き始めた。しかし泣きながらも、2人の手は止まる事はない。

「…………ごめ、なさい」

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

強盗した少年も、その少年に連れて来られた少年も必死に謝る。ほたりぼたりと涙をスープに落としながら。壊れた再生機器のように何度も謝る彼等に、もういいと一言言っつて鞆から果物を出す。赤く熟れたリンゴ。一緒にナイフを出してスルスルと皮を剥き、食べやすい大きさに切って空いた皿に乗せてやる。ちゃんと噛んで食べるよ、と。

パン粥もスープも食べ終わった2人は、少し赤い目をしてリンゴを齧る。その仕草がリスのようで口角が少し上がってしまう。それに

気付いた2人、強盗少年はむすつとした表情で照れ、もう1人ははにかんだように照れ笑いする。

「服、大きくなかったか？」

「だいじょうぶ」

弟の方らしい子が答え、強盗少年は首肯。先程はサイズを確認していなかった為わからなかったが、どうやらサイズはあれでよかったようだ。ある程度腹も満たされて安心しただろうから、零良は2人に尋ねた。お前達の保護者はどこに居る？ と。保護者の意味をわからなかったのか首を傾げられたので、親はどこだ？ と聞けば、2人は俯いて『親はもう居ない。捨てられた』との返事。

捨てられたとわかっているのに、尋ねるのは酷な事だろうが、強盗されたのは零良だし、事情があるなら聞く権利もある筈。何故捨てられたのかと聞けば、この2人体格の差はあれど、双子だと言う。彼等の居た村では双子は災いの元とされ、村人からあまり良い仕打ちを受けてこなかった。

母は彼等を産んだ時に死んでいて、父が2人を育ててくれたのだが、2人を養うのに無理をしたのか、仕事中に倒れてそのまま亡くなってしまった。災いである双子を引き取ってくれる人間など居る訳もなく、村から追い出されて、魔物に襲われながらも必死で生き延び、別の村から荷馬車にこっそりと乗ってアサーカまで来たそうだ。

この家には、世界を追い出されたり家を追い出されたり、村を追い出された物が集う呪いでも掛かっているのか？ 零良は2人に向けていた視線を天井に向けるが、何かが映る訳もなく、再び双子に視

線を戻す。

「名前は？」

「アーヴィング」

「ロリーナ」

「……………女の子？」

名を聞けば、強盗少年の方はアーヴィングで、もう1人の少年だと思っていた方は少女だったらしく、強く頷かれた。髪が短かったのが少年かと思っていたが、とんだ勘違い。下着は男の子用のボクサーパンツを作ってしまったが、今更「男の子用だった」とは言えない。

1人申し訳ない気分になりながら、零良は言った。「この家には俺と同居人が1人居る。そして部屋が一つ余っているが、ただ飯を食うだけの人間を迎え入れる余裕はない」と。2人は零良の言葉の意味をわかり、静かに俯いた。最初から受け入れられると思っていなかったが改めて言葉に出され、自分の存在を否定されたように感じたのだろう。

だが零良の言葉はそこで終わらず、尚も続く。「庭の手入れ？洗濯の手伝い？家の掃除？買出しの手伝い？食事を作る手伝い？どれも子供でも出来そうな事で、2人は零良が言いたい事に気付いたのか、「ボクが庭を綺麗にする！買出しの手伝いもするし、なんでもする！」「わたしも、お洗濯する！お料理も頑張る、お家のお掃除もする！」と言って拳手。

「お願いです、ここにおいて下さい！」
「おねがいします！」

椅子から下り、頭を下げる2人。零良も立ち上がった2人の前に行くと、『俺は零良』と言って両手を差し出した。本来なら利き手である右を差し出すべきだが、2人同時に握手をする為に両手を差し出したのだ。握手を求められている事に気付いた2人は、それぞれが零良の手を取り、『宜しくお願いします』と元気に声を出した。

そして早速、零良は手伝いを命じる。2人が自分で食べた食器を洗うのだ。ここでも活躍するのは、零良の作った食器を洗うようなスポンジと石鹸。固形石鹸の名前は？油污れも綺麗に落ちて、水切れも抜群な自然に返る固形石鹸？説明なのか商品名なのかわからないが、わかりやすいので名前を変えずにしている。

2人は食器を洗って居る間、零良はリビングテーブルを綺麗に拭くと、スケッチブックを開いて2人の部屋に置くベッドを考える。男同士なら別に部屋は一緒にいいだろうが、男女となれば話は別。将来的には、別々の部屋があるだろう。だが今は2人の部屋を用意出来はしない。

考えたのは部屋の中央に二段ベッドを置き、左右に部屋を分ける事。下段は左側、上段は右側に壁を作って完全に封じてしまえば、同じ部屋でも隣は見えない。音や声は聞こえるだろうが、そこは仕方ない。後は女の子が好きそうな可愛いデザインと、男の子が好むようなシンプルなデザインでベッド周辺を飾る。

茶碗を洗い終わった2人が、リビングに戻って来た。しかし最初からそんなに頑張らせる事もないので、後は自由に置いて良い。庭

に出ても良いが、魔物には気をつけるよう忠告。2人は顔を見合わせる、外へと出て行った。

零良はその間に、2階の空き部屋に移動。書き終わったベッドを錬金して部屋の中央に置く。変な置き方になったが、なんとか1人でも動かせる重さだったので、片方ずつ動かして部屋の中心にベッドが来るようにした。次に作るのは2人の使う机と椅子。勉強もさせるべきだと考え、小さな机と椅子を具現化。本を入れる為の棚や、服を掛けるハンガーラックも用意。

他に今日中に必要なのは今晚着る為のパジャマだろうと、2人分のパジャマを書いてベッドにおいておく。後は徐々に増やしていけば良い。子供部屋に居る必要もなくなったので1階に戻って外に出てみると、はしゃぎまわるアーヴィングとロリーナの姿。なんで結婚する前に子持ちになっているんだらうと考えながら、零良は走り回る2人を見ていた。

「12」4人で一緒に晩御飯

仕事を終えて家に戻って来たダスティンが見たのは、リビングのテーブルで何かを書いている子供2人。「ただいま」と扉を開くと、目をまん丸にしてダスティンを見詰めている少年が居て、彼は家を間違ったか？ と1歩後ろに下がって辺りを確認してから、やはり零良の家だと1歩踏み出す。

子供の向こう、キッチンから零良が「お帰りなさい」と顔を覗かせる。困惑しながらも「ああ、ただいま」と返事をするダスティンの視線は零良に向かわず、己を見ている二対の瞳。

困ったようなダスティンに気付いて、零良は「もう1人の同居人だ。挨拶」と言えば、2人は持っていたエンピツを置き、椅子から下りてダスティンに挨拶をした。今日から一緒に暮らす、アーヴィングとロリーナだと。

「一緒に暮らす……？」

「住んでいた村を追い出されて、行く所がないので引き取りました」「追い出された？ こんなに小さいのにか……？」

同情的な視線を向けられ、アーヴィングは少しむっとした顔を、ロリーナは悲しげに俯く。2人の様子の変化に彼は気付き、慌てて「オレも生家を追い出されたんだ。追い出された者同士、宜しくやる

う』と2人に言えば、逸らしていた視線をダスティンに向ける2人。どうして？ と視線が理由を求めていたがそれに答える事なく、ダスティンは着替えて来ると行って自室に向かう。2人の視線は彼が階段へと消えるまで向かっていたが、姿が消えた後は再び机にあるノートへと向かった。

双子が今書いているのは日記。日付は今日からで、朝起きてから零良に会うまで何があったか、どう思ったのかを詳しく書かせているのだ。主に文字の練習の為だが、何かを感じ取っても人と言うのは忘れてしまう。

地球のようにデジカメなどがあれば、写真から記憶を呼び起こす事が出来るが、こちらにはそんな機能を持った物はない。子供の頃に日々をどう過ごし、何を感じとったのか、少しでも残しておいて欲しくて日記を書かせたのだ。今はまだ辛い思い出が多くても、これから楽しい思い出を増やしていけばいいと、零良は考えている。

「ヴィン、リナ、書き終わったら手伝いを頼む」

「あ、わたし手伝う！」

「ボクも終わった」

ノートを閉じ、キッチンに来る双子。2人の消化の事も考え、ダスティンは牛肉だが、3人は鶏肉を食べる。焼いた物ではなく、茹でた物を。ほんのり塩味風味にしてあり、素朴で自然な鳥の味を楽しめる。他にはパンや茹でた野菜を付け、あまり負担の掛からない物に仕上げた。

ダスティンが牛肉なのは、体力を使って金を稼ぐ仕事だから。比較的に居る零良達を基準にした食事ではなく、カロリーを多く摂取させる食事であれば、体力が持たない。

アーヴィングにはナイフで鳥肉を食べやすいサイズに切らせ、ロリーナには盛り付けを手伝わせる。その間に零良はテーブルを拭いて、階段から2階のダスティンに向かって夕食が出来と呼ぶと、ドア越しに返事をしたのかくぐもった声。

返事が聞こえたのでリビングに戻り、4人分の食事をトレーに乗せてリビングへ。零良とダスティンは向かい合わせに座り、双子も向かい合わせに座るので、どちらかが零良の隣、もしくはダスティンの隣に座る事に。2階から下りて来た彼はいつも座って居る席に着き、食事の支度が終わった零良達も席へ。

どっちに座るか悩んでいるアーヴィングとは違い、ロリーナは零良の隣の席へと跳んで座る。座った後で零良を見上げて照れ笑いした彼女に、何故懐かれたのだろうと疑問を抱きながら、視線を少女に送る。そしてアーヴィングを見ると、少し不満そうな顔をしながらダスティンの隣へと腰を下ろした。

「オレだけ牛肉か？」

「双子の胃が、牛肉を受け付けられる程回復してないと思うので、俺達は鶏です。ダンには気にせず食べて下さい。明日もギルドに行くんでしょう？ 体力を付けないと」

「すまないな、気を使って貰って」

苦笑するダスティンに、気にしないで下さいと零良は言い、4人は

夕食を食べ始める。牛肉を羨ましそうに見ていたアーヴィングだが、胃が落ち着いて何でも食べられるようになったら牛肉を食べさせてやると言つと頷き、鶏肉を口に含んで蕩けそうな笑みを浮かべている。ロリーナも同じく、茹でた野菜を咀嚼しながら嬉しそうな顔。

双子が必死に食べている間、零良とダスティンは今日1日何をしていたのかと話し合う。ダスティンはギルドにて魔物討伐の任務を受け、それをこなして来たそう。魔物はとても弱い種類で、彼1人でも出来る仕事だった為、早い時間に戻って来られたと言う。

「そうそう、零良の作った剣だが、素晴らしい切れ味と使い勝手だった。あれを商品化したら売れるぞ」

「硬度はどうです？ 刃こぼれは？」

「硬度も中々だったな。余程鱗が硬い魔物でなければ、刃こぼれもそんなに起こらないだろう」

2人の会話を聞いていたアーヴィングが、『レラは鍛冶屋なの？』と聞いて来る。確かに剣を作ったと言われれば、鍛冶屋を思い浮かべるだろう。零良とダスティンは顔を見合わせ、正直に答えるかどうか考えた。

錬金術師はとても貴重な存在。零良が錬金術師、しかもあんな風に絵を書いて引つ張り出すだけで錬金出来ると知られば、国からお呼びが掛かってもおかしくはない。貴族達はこぞつて零良を自分の元に欲しがらるだろうし、国お抱えの錬金術師として働かされる可能性もある。

前者も後者も高い立場を得るだろうが、その分恨み辛みを買う事が

多く、自由がなくなる事と同義。他の国お抱えの錬金術師から、命を狙われる可能性だってあるのだ。

零良はそこまで頭が回っていないが、ダステインは深く考えて錬金術師だと言う事を今はまだ告げない方が良いと考え、零良は何でも作るんだ、と誤魔化した。彼が正直に言わなかったので、零良も言わない方が良いのだろうと一つ頷くと、納得はしていないだろうが『ふーん』と言う返事。

深く追求される事はなかったので、2人は再び仕事の話に戻り、ダステインに今度は歩きやすい靴が欲しいと言われ、靴のデザインを考え始めた。街中だけではなく、森の中も歩く為、水に濡れた土で滑ったりしないような靴底が良いだろう。靴に関して詳しい話をしてしていると、双子が同時に大きくアクビ。

「眠たいのか？」

アクビをした後に目を擦るロリーナを見、夜の片付けは自分がやるから寝て良いと言って、歯を磨かせてから2人を子供部屋へと案内。階段を上り、ダステインの部屋の隣にある扉を開く。扉は内開きで、廊下からは丁度右手にドアノブがある。双子は部屋を覗き、1つの部屋がベッドで二つに仕切られているのを見て驚いた。

右側が下のベッドになっていて、右がロリーナの部屋。左側が上のベッドで、アーヴィングの部屋だと言い、2人にそれぞれ入るように言うと、驚きと喜びの混じった声を上げ、ベッドにダイブする2人。喜んで貰えた事に安心し、息を吐いてドアに寄りかかれれば、2人の大きな声が気になったのか、ダステインも2階に上がって、部

屋を覗き見た。

「考えたな」

「？劇的な匠？が考えていたものです」

「は？」

「二番煎じって事ですよ」

テレビで見て知っていたから作る事が出来ただけで、自分だけの力で生み出した訳ではない。肩を竦める零良に、ダスティンは成程と頷く。ベッドにはしゃぐ双子に、パジャマがあるからそれに着替えて寝るように告げ、お休みと告げてから1階に下りる。おやすみなさい、とハモった声が背中に掛けられ、ゆっくりと扉を閉めると、2人は下のリビングへ。

ここで初めて双子を引き取る経緯を聞いたダスティンは、双子と言うだけで村から追い出された2人を痛ましく思う。双子の住んでいた所に行った事はないが、そう言う文化が根付いている地域もあるんだと、溜息を吐きながら教えてくれる。

これからどう生きるかは双子次第だが、それぞれ独立するまでなんとか補佐しようと思うと告げれば、彼は苦笑。皆追い出された者同士仲良くやれるだろうと言って、自分とアーヴィングの分の食器を下げてから風呂に入ると言い、2階へ着替えを取りに向かった。

零良もロリーナと自分の分の食器を下げてから洗い、棚に戻してテーブルを拭くと、双子の服を作ってやるべくスケッチブックを開いた。取り敢えず1週間分と7枚の服を作り、籠を2つ出してその中にしまう。

それからダステインのリクエストである靴をどう作るうかと、錬金用ではないスケッチブックに簡単にデザインを書き始める。風呂から上がったダステインがそれに参加し、外観と靴底は出来上がった。

後はサイズだと、ものさしで彼の足を測り、靴底にサイズと防水・防臭加工済みと文字を入れて錬成。出来上がった靴は、日本で売っていてもおかしくないようなウエスタンブーツ。大喜びするダステインを見、そう言えばあの2人の靴がないかと、靴の代わりにサンダルを錬成。明日はこれで我慢して貰おうと思いつながら、リビングにある棚に2足のサンダルを並べた。

「13」家での仕事

風呂場で零良はロリーナと共に洗濯板を使って、ザブザブと服を洗っている。この洗濯板も彼が練成したもので、師匠（アシスタント先の漫画家）が昔の日本を題材にした漫画を描いた時に調べ、小道具として書いた事があったので製作出来た。

練成して作り出した、？自然に返り、汚れがみるみる落ちる、柔軟剤配合で手肌に優しい？洗濯用固形石鹼を使つての洗濯。ある程度コツを掴んだロリーナは後は一人で大丈夫だからと言い、洗う物も大して多くはなかった為、残りの洗濯物は彼女に任せて、零良はリビングや廊下の掃除をしているアーヴィングの様子を見に行った。

雑巾バケツに手を突っ込んで雑巾を洗い、それを硬く絞って床を綺麗に拭いているアーヴィング。きつと家でも手伝いをしていたのだろう、その手つきは慣れてる。ロリーナは家では足で踏んで洗っていたと言うので、2人共父を支える為に色々と子供が出来る範囲で手伝っていたのだろう。

「ヴィン、2階の廊下は俺が……」

「あ、2階はもう終わってるよ。後はここだけ」

「そうか。なら、外の雑草を抜いて来る」

「後で手伝うね」

「俺の方よりも、リナが洗濯物を干すのを手伝ってやれ」

まだ洗濯している浴室の方を見て言うと、『わかったー』と元気な返事が戻って来る。部屋に向かい、軍手を作る。1つは大人用、2つは子供用。きつと洗濯物を干すのが終わったら手伝ってくれるだろう双子の事を考えて。日差しが強いので、アーヴィングにはキャップを、ロリーナには麦わら帽子を作って錬金。出来た物を持って下に下りるとアーヴィングはリビングには居らず、外から2人の声が聞こえた。

リビングの窓から外を見ると、物干し台に洗濯物を掛けている姿。アーヴィングの身長でギリギリ届く竿に洗った洗濯物を掛けている。台を作ってやらなければと考えながら子供用の軍手と作った帽子をテーブルに置き、玄関を出て草が至る所で成長を遂げている庭を見た。軍手を着け、家の周りから少しずつ抜いて行く。

抜いた草は何かに使えなかっただろうか？ 過去に漫画の小道具として色々資料も読んでいたから、その手の情報も記憶にあった筈。記憶を掘り起こし、確か土を掘ってその中に草を埋めればよかった筈。スコップはまだ作っていないので、草を埋めるのは明日にし、一カ所に抜いた草を積んでゆく事にした。

「レラ、草を抜いていけばいいの？」

「全部抜くと、夕方になりそうだね」

「ああ。リビングの机の上に、軍手と帽子あるから使え」

「はい」

双子は家の中に入り、机の上にある自分達用の軍手と帽子を見て声を上げる。両方共2人の名前が入っているので、間違う事はないだろう。帽子を被り、軍手を着けて家から出て来た2人は、レラの近

くで草をむしり始めた。

根から抜かないと、また生えて来るから根から抜くように教え、黙々と作業を行う3人。一つの事に集中すると、人間は無口になる為、お喋りを楽しむ事なく黙々草を抜く3人。ポコツ、と土が付いて来る程大きな根を張った草を抜いたアーヴィングは、大物が取れたとばかりに零良とロリーナを見る。少しドヤ顔をして。

その表情を見た2人は同じように根っこから草を抜き、根の小ささに落胆して次を抜くとアーヴィングの抜いた物よりも大きい草を抜いたロリーナ。零良の抜いた草は2人の物よりも小さく、ガツカリした気分。しかし零良を挟んで双子は勝負を始め、大きい根の付いた草を抜くと、互いに見せ合って勝敗を決めている。零良は2度目に抜いた草が小さかったので、既にリタイア。1人黙々と草を抜くのみ。

途中で3人レモンを入れた水を飲んで休憩をし、再び雑草を抜き始める。2、3時間程掛けて家の周りの雑草を抜き、草がなくなっすつかり綺麗になった。昼には卵とハムのサンドイッチを3人で作って食べ、昼からはゆっくりとした時間を過ごす。双子の前で鍊金を行わない為、何かを作るなら夜にやらねばならない。

「お庭、綺麗にするの？」

「した方がいいだろうな」

庭を綺麗にするなら縁をレンガで囲んだ花畑を作り、柵を作って敷地をわかるようにしたい。木で出来たベンチも欲しいし、テーブルも欲しい。色々欲しい物を考えて居るのだが、頭に声が過ぎる。

父親の怒鳴るような声が。

小さく息を飲み、目を閉じて眉間に手を当てグリグリと揉めば、『何してるの』とアーヴィングの声。目が痛かったから揉んだんだと誤魔化し、先程の声を忘れる為に庭をどのように飾りたいかと、双子の意見を聞き始めた。

ダスティンがその日帰って来たのは、日付が変わる頃。彼は鍵を持ってるので零良は部屋に居て、階段を上る音で彼の帰宅を知り、廊下へと顔を出せば、窓から入る月明かりでうっすらダスティンの姿が見えた。

双子がもう寝ているのであまり大きな声を出せないが、『お帰りなさい』と言うと彼は零良を見、『ただいま』と返事。何か食べて来たのか問えば、店は既に閉店していて疲労からか酒場に寄る気もなく、真っ直ぐ家に戻って来たと言う。

簡単な食事で良いなら作れると言えば、彼は少し考えてから『申し訳ないが頼めるか?』と言って来たので、軽食を作る事となった。キッチンに向かい、野菜を切ってハムと共にパンに挟めるだけの簡単な物。スープは夕食の時の残りがある為、それをマグに入れて出す。

『すまないな』と遅い時間に作ってくれた零良に礼を言い、出され

た食事を食べるダスティン。彼が食べている間に、零良はスケッチブックを開き、売りに出そうと考えている剣を書く。滑るように動くシャープペン。零良は普通に絵を書くように、シャープで下絵、その上からペンで主線を書いて消しゴムを掛け、色鉛筆で色を付ける。

「能力には慣れたのか？」

「いえ、まだ何が出来て何が出来ないのか、よくわかっていません。取り敢えず家の金を払いきる為に、色々作って売り出そうかとは思っています」

今迄でわかっているのは、サイズ指定をすればその大きさに出て来る事や、サイズ指定をしなければ予想外の大きさに出て来る事がある事。絵として描ききれない物は、簡単な説明文を書いておけば良い事。絵の中に書かれていなくても、勝手に補正が入る（服の縫い目等）事。

「服は縫い目を書かなくても勝手に入っていましたから、その辺りはなんらかの影響があつて補足されているとは思いますが。漫画でもそこまで一々書いていられませんし……。俺の記憶か、元の世界を基準にしてるのはわかりませんが」

「食べ物を出せないのか？」

「食べ物を出せるんだったら、リュックに食料を入れておかないと思っんです」

「それはそうか……」

試した事はないけど、そう言いながら簡単にドンブリに入ったうどんを書き、手を突っ込んで引っ張り出す。立派なうどんが出て来たのだが、食べられるものではなく、蟬で出来た食品サンプルのような物が錬金される。これはこれで売れるかもしれないが、これを売ってどうするんだと言う話でもあるような気がする為、リビングに飾っておく事にした。

スケッチブックに剣の下絵を描きながら、どんな仕事をして来たのかの話をする。今日は中々大変な仕事で、魔物を狩る仕事。強くはなかったが、数が多かったので大変だった。なんとか全てを倒し終えた時には日が傾いていて、そこから倒した証拠となる体の一部を切り取って袋に詰めてと、溜息を吐いて思い出すように語るダステイン。

「疲れているのはわかりますが、シャワーは浴びた方が良いでしょう」

「臭うか？」

「鉄臭い匂いが、少し」

後で軽く浴びる、と言ってサンドイッチを全て口に放り込み、温かいスープを飲む。2人共話す事がなくなり静かになったりリビングには、零良の走らせるペンの音だけが聞こえていた。

ペンを入れている時、多少の誤差はあっても、その辺りも修正してくれているのか、形に出した時には綺麗な状態で生み出される。1度何が出来て何が出来ないのかを確かめた方がいいのだろうか、咄嗟に思い浮かばないのだから仕方が無い。徐々に力を知っていくのもいいだろうと、零良は考えて居る。

「風呂に入つて、そろそろ休むよ」

「はい、俺もそれを洗い終わったら、部屋に戻ります」

「いや、オレが洗つておくからいい。レラは部屋に戻つてくれ。態々すまないな」

「ではお願いします。お休みなさい」

ダステインの返事を聞いてから部屋へと戻り、ランプを付けて部屋の机で絵を書き続ける。既に具現化されている剣は3本。書いて・出してを繰り返しているのでページは進まない。右のページに書き、左のページに別の紙に書いたデザインをクリップで止めてある。流石に幾つも書くと、デザインを忘れてしまいそうになるから。

5本程錬金した後で、シャツでも作つておこうかとデザインを考える。なんのデザインがいいだろうと色々考え、レディースは花柄を、メンズは馬が後ろ足で立ち上がる姿のシルエットを描こうと決めた。サイズはMとL、メンズのLLをそれぞれ10枚ずつ。値段は前と同じく、1枚3バド。

シャツが出来た頃には午前1時を過ぎていて、そろそろ自分も寝ようかとランプを消してベッドに入る。日本を離れて、十数日。すっかり見慣れたベッドと家に、前の部屋はどんな天井だっただろうと思ひ出そうとしたが、薄ぼんやりとしか思ひ出せない。

自分が生きていた場所を徐々に忘れていく、忘れている、と言う寂しさから逃げるように、目を閉じて眠りに就こうとする零良。彼の気持ちを表すように、アサーカの町を雨雲が覆い始めていた。

「14」雨上がりにシャツを売る

明け方近くから降り始めた雨は、昼近くになっても止む事はなく降り続けている。鬱陶しそうに窓から外を見ているアーヴィングとは違い、ロリーナは零良の前の席（ダステインの席）に座って足を揺らしながら、機嫌よく絵を書いていた。なんの絵かと言えば、家の周りの設計図。花をどう植えるのか、どこにブロックを置くのかと楽しそうに考えていた。

ダステインは昨日の疲労からかまだ眠っていて、昼食前には起こす予定である。零良はロリーナの前、いつも彼が座っている席にてスケッチブックではないただの紙に、シャツのデザイン画を色々書いている。

「晴れたら街に行くって約束だったのに……こんなんじゃ、夜まで止みそうにないよ」

「仕方ないだろ」

「ヴィンもこっちで一緒に考えてよー」

雨が止んだら作ったシャツと剣を持ち、3人で街に出かける予定だった。剣とシャツを売り、役場に寄って2人を引き取った事の報告をしなければいけないのだろうと考えていた。ただ『引き取りました』だけでいいのか、それとも引き取るにあたって一定の収入がなければいけないのかは、相談してみないとわからない。流石のダステインも、そこまでは知らなかった。

役場に寄った後で、屋台で何か食べようと言う話もあったから、アーヴィングは主にそれを楽しみにしていたのだろう。しかしロリーナの言葉に、やっと窓から離れた彼はロリーナの隣に座って、ここは花よりも木の方が良いよ、ここに花壇を作って、などと相談し始めた。

「ねえ、レラのお父さんとお母さんって、どんな人だったの？」

突然の質問に、デザインを考える事に集中していた零良は顔を上げる。なんで両親の話聞いて来るのだろう？ 疑問が直ぐに浮かぶが、どうやら2人は庭の設計図を書きながら、『お父さんも野菜を育てていたね』と家庭菜園をしていた話になり、そこから零良の両親の話に飛んだらしい。

双子が答えを待っているので、零良は自分の記憶から両親を引っ張り出す。家を出て以来、1度も連絡を取らず、顔を見せる事もしなかった。零良が家を出てから、零良に師匠を紹介した友人に『零良を返せ』と言っていたようだが、自分がいかに両親を信用出来ないのかと書いた手紙を預けていたのでそれを渡して以降、友人には何も言っただけで来なくなると言う。

「矛盾が多い人達だった」

「ムジユン？」

「俺の名前は？ゼロ？と？良い？と言う意味がある。両親は？人は無欲であるべきだ？と言う考えを持っていて、俺にもそれを強要していた」

？無？つまり零とを良しとする、で？零良？と言つ名前なのだと、幼少の頃から言われ続けていた。無欲であるべき、我儘を言わず、欲しい物があると言つなら頬を思い切り引つ叩かれた。唯一買つて貰う事が出来たのは、授業に必要な筆記用具や、勉強に関する物。誕生日には分厚い辞書。クリスマスには問題集。誕生日にケーキを食べた記憶もない。家に居ると常に勉強させられ、習い事に行かされた。

無欲を良しとする両親が、自分には？勉強をしる？？成績を上げる？？男なら武道を習え？？高校は？の高校にしる？？就職するなら人の役に立てる職業にしる？？と零良に求め続けた。小学生の頃は親の言つ事が絶対だと両親が満足するよう必死になっていた。

だが中学・高校と進学する内、彼等の矛盾が理解出来ず、それを指摘した時に『親に反抗するとは何事だ！』と父親に顔を思い切り殴り飛ばされ、リビングの窓に頭からぶつかって割ってしまい、頭部から大量出血、病院で数針縫う怪我をした。

幾ら武道をやっているても、疑問を口にしただけで殴られると思っていなかったし、加減をせず全力で殴って来るとは思わなかったので油断していたと言つのもある。話をしていた時、零良が窓際にいたと言つのも大怪我の原因の一つであろう。

怪我をして以降、流石に悪いと思つたのかあまり零良に関して何も言わなかった両親だったが、高校3年の時に大学に行かず就職活動をする予定だと言つた彼に、試験を受けて消防士になれ、警察学校に行け、自衛隊に入隊しろと、再び口煩く言い始めたのだ。

「両親が欲しかったのは、自分達の言う事に逆らわず、我儘を言わない、思い通りに動く子供。無欲であるべきだったのは、俺だけだった」

中学の時から仲が良かった友人に両親の愚痴を言っていたのだが、そこから師と仰げる漫画家に出会い、生活は一変した。しかし何か欲しいと思った瞬間、頭の中で父親の声が響く。名の通り無欲であれ、と。20年近く聞かされた言葉は零良の中に強く残っており、今でも必要以上の物を求めるなど、頭が勝手にセーブしてしまう。

勿論今迄自分の為に使った金は返そうと、給料から毎月5万ずつを家宛に現金書留で送った。自分に何かあった時の為に保険に入っていたので、死んだ事によって両親に保険金が入っているだろう。幾らになるかはわからないが。

「何か欲しいと思っても、言えなかったの？」

「子供の頃、欲しい物があってねだったら、1日押入れ……クロークゼツトの中に閉じ込められた。それから、勉強で使う物以外はねだった事はない」

「で、でも今は自分で、欲しい物を買えるだろ？」

「欲しいと思った瞬間、頭の中で父親の声がある。だから必要以上の物を買う事が出来ない。生きるのに必要な金や道具を買っても、娯楽に関する物を求めようとしななんだ」

淡々と話す零良に、双子は黙り込んでしまう。顔を上げると、聞いてはいけない事を聞いてしまった、と言う表情をしている2人。彼

は小さく苦笑し、『変な話を聞かせて悪い』と謝罪してから『もう終わった事だ』と氣遣わせないような言葉を2人に掛けた。

そもそも最初からこんな話をせず、適当に誤魔化せばよかったのかも知れないが、嘘であっても『良い両親だった』などとは言えない。嘘でも言ってしまうえば、日本で生きて来た己を否定してしまうような気がしたのだ。

「ああ、2人は遠慮なんかなくて良い。欲しいと思った物は、相談してくれ。あくまで俺がそういう環境にあったと言っただけの話だ」

「う、うん……」

「わかった……」

「まずは、晴れたら買い食いだ」

買い食い、の言葉に2人は笑顔になり、何を食べよう、何が食べたい？ とすっかり食べ物話題に。そう言えば、この家には傘がなかったと考え、日本で売っている普通の傘でも書いて作ろうかと考える。しかし傘の内部構造（スライドする部分や、止める部分）の構造は今一わからない為、買う事にした。流石に開いたままの傘は作れない。

ダステインが起きたのか、階段を下りる音が聞こえる。作ってあったスープを温めようかとキッチンに向かう零良。朝の挨拶をしている3人の声を聞きながら、まるで家族のようだと、口元を緩ませた。

昼過ぎにやつと雨は上がり、零良は双子を連れて街へ向かう。剣を売ると言う事でダスティンも共に来てくれた。袋に入れたシャツを持ち、街に出掛ける事を喜ぶ双子。比較的水はけの良い道だったので、足元が泥だらけになる事もなく4人は街へ到着。

まずは宿に向かい、リーズにシャツを見せてから武器屋へ寄って作った剣を売り、その後で何か食べようと予定を話す。シャツをどこで売るかに関してはまだ考えていないが、取り敢えず全部持って来た。やがて宿に到着。中に入れば、いつもの場所に女将の姿。

「おや、久し振りじゃないか、レラさんにダスティンさん。ん？」

その子達は……？」

「訳あって引き取りました」

「2人共可愛い子だねえ。食事に来たのかい？」

「いえ、新しい服が出来たので、リーズさんに見せに来たんです」

軽く双子を紹介してから、服が出来た事を告げると女将は食堂に居るから見せておいでと言つて、食事をしなくても入る事を許してくれた。有難う御座いますと一礼し、4人は中へ。丁度客が帰つた後だったのか、テーブルを拭いているリーズを見つけ、声を掛けてシャツが出来た事を告げる。彼女はテーブルを拭くのを止め、零良に近づくとシャツを見せてくれるよう頼んだ。

レディース物はロリーナに持たせていた為、ロリーナから荷物を受け取つてMサイズを出して手渡すと、可愛い！との声上がる。胸に幾つかの花の模様。リアルに描かれている花ではなく、デフォルメされている花が大小書いてあるのだ。

「可愛い！ これ、1枚下さい！」

「有難う御座います。値段は3バドですが、後でまた来ましようか？」

「ううん、今払います！ ちょっと待って下さいね！」

厨房の中に財布を置いてあるのか、財布を取りに向かうリーズ。厨房からコックの男が出て来て、男用はないのか聞かれたので、アーヴィングの袋からLサイズを出すと、男は3バドを零良に手渡した。直ぐに金が出たと言う事は、どんなデザインでも買うつもりだったのだろうか？

リーズが戻って来て、3バドを受け取ってシャツを渡す。有難う御座います、と2人に礼を言い、受付に戻ると女将に呼び止められた。女将も1枚買ってくれるらしいのだが、メンズのLLは馬のシルエツト。このデザインで良いかと聞くと、素敵なデザインだと言ってメンズサイズで買ってくれた。

「レラさん、そのシャツをまた買わせてくれないかい？ 前のシャ

ツ、評判が良くて売り切れてしまっただよ」

「構いませんが、幾らで売ってるんですか？」

「同じ3バドさ」

「なら価格を5バドにして2バドを売り上げとして貰って下さい。場所を頂いている以上、ただで置かせて貰う訳にはいきません」

零良の売り上げが3バドなのに、2バドも貰うなんて申し訳ないと

言う女将。しかし女将の厚意がなければ、シャツを売る事が出来ない。店とシャツの宣伝になるような事は出来ないかと考え、この店オリジナルの服を売り出してみてもどうかと提案した。所謂、ご当地宣伝シャツ。この店でしか買えない商品があれば、旅人に喜ばれる筈。

「俺は自分の商品の宣伝をこの店で行って貰え、女将さんは俺の作った服を誰かが着る事で店の宣伝が出来る。そう考えて頂ければ、2バドを気兼ねなく受け取って貰えると思いますか？」

「う、うーん、レラさんがそう言うなら……」

「決まりですね。柄が出来次第、持って来ます」

デザインは零良の自由で、アサーカの町の名を入れて欲しいと言う。元々、地球の企業とは違って店1件1件に名前が付いていない。宿は宿、武器屋は武器屋。呼ぶとしたら、？さんの店？と店主の名前で呼ぶそつだ。

本当は店の名前があれば良いのですが、との呟きに、零良の居た町では店に名前をつけるのか？と聞き返された。首肯し、自分の居た町は宿だけでも数十件あったので、店主が違うなら1件1件名前が違ったと教えると、それは面白いから是非うちも取り入れよう！
と言う事に。

しかしそんな唐突に名前を考えられる筈もなく、唸りながら考える女将。待っている零良達に『あんた達も考えとくれ』と言い、結局5人で唸りながら考える。考え、考え、考え抜いて、零良の口からポロツと出て来た名前は、

「憩……」

「イコイ？」

「俺の住んでいた所では、一つの文字に意味を付ける所だったんですが、こんな字を書きます」

机に置いてあるメモに『書いていいですか？』と聞けば、自分に向けていた物をひっくり返して差し出してくれる。漢字で憩と書き、この字には？心と体を休める？？休息？と言う意味があると説明すると、女将は直ぐに宿の名前を決定。『アサーカの宿・憩』がシャツに書かれる名前となった。

折角名前を決めたんだから、看板も欲しい所だと言う女将に、それも作ると名乗り出る。看板は壁に貼り付けるのか、それとも宿の2階程の辺りからぶら下げるように付けるのか相談し、壁に貼る形の看板に。大きさとしては、50cm x 50cm程の大きさで良いだろう。

「レラは色んな事を思いつくな」

「そうですね？ 文化の違いと言うだけな気がします」

思いついている訳ではなく、地球の文化とこの世界の文化の違いを指摘して取り入れているだけなのだから、自分が考えました！と声を出せる訳がない。取り敢えず看板とシャツを作る話は決まったので、後日デザイン画の候補を何種類か持って訪れようと考える。

今持っているシャツはそれとは別に仕入れてくれると言うので全て

置いて、先に代金を貰う事に。服と看板を楽しみにしてるよ！と
の言葉に、零良は振り返って一礼、双子とダスティンも礼をして、
宿を出た。

「15」肉の話を書くと、肉が食いたくなる

次は武器屋に行つて、作った剣を売りに行く。武器屋までの案内はダステイン。双子はきちんと付いて来ているかと、何度か振り返りながら足を進め、宿からそんなに離れてはいない武器屋に入店。店内は中々広く、剣や槍などの武器が置かれ、壁にも剣が飾られている。

武器屋と防具屋は、どうやら別々の店らしい。物珍しげに店内を見て回ろうとする双子に、『商品には手を触れるなよ』と声を掛けてから、ダステインに店主を紹介して貰う。店主らしき男は、たんこ鼻で赤ら顔に少し薄くなった頭。一見すると、どこかの漫画の酒場に出て来そうな男である。

「おつ、ダステイン。武器でも壊れたかい？」

「いや、今日は売りに来た。今世話になつているレラって奴なんだが、結構良い武器を作るんだ。見てくれるか？」

「おお、郊外に家を買つたつて言う兄さんか？ 実はアンタの作った服を俺も買ったんだ。宿の厨房に居る男がいるだろ？ アイツは俺の友人でね、アイツが着てて、俺も欲しくなつてね！」

「有難う御座います。今、新しいのを宿に置いて来た所なんです」

後で見に行つて来るよ！ と言つてくれる店主に、有難う御座いま

すともう1度礼をしてから、作って来た剣を出す。全て同じ剣なので、鑑定は楽だろう。男は剣を1本手にし、縦にして下から覗き込んだり、水平にして片目を閉じたりしてから、硬度を調べる為か、木槌で刀身を軽く叩いている。音を聞いて、剣の硬度を判断しているのだろうか。

「1本1100バドつて所だな。結構良い品じゃねえか」

「すみません、剣の価値が今一よくわからないので……」

「作ってるのに価値がわからないなんて、珍しい男だよアンタ」

全部買い取っていいのかい？ 店主の言葉に頷いて作った5本の剣を全て渡し、5500バドを受け取る。受け取ったバドを財布にしまい、剣を見て回っている双子を呼んで財布から10バドを取ると、手を出させて5バドずつ乗せてやった。

目を丸くし、首を傾げる双子に『小遣い。食事代は俺が払うから、欲しい物があつたらそれで買え』と言うと、有難う、と声を揃えて言い、ポケットにバドを突っ込んだ。家に戻ったらシャツのデザインを考える前に、双子に財布でも作ってやるう。

零良はそう決め、また武器が出来たら売りに来ますと店主に挨拶すれば、剣だけじゃなく、服も作ってくれよ！と言われてしまった。どうやらあのシャツを余程気に入っているようだ。4人は店を出、武器屋から少し離れる。零良とダスティンは双子を見、何が食べたんだ？と聞いた。

「牛肉！」

「……屋台で牛肉ありましたか？」

「あるぞ。串に刺して、甘辛いたれを付けた店のが。リナもそこでもいいのか？」

「うん！」

再びダスティンの案内で屋台へ行くと、じゅうじゅうと炭で焼かれている牛肉が芳ばしい匂いを立てている店に着いた。焼いているのは牛肉だけではなく、1度茹でて串に刺したのだろうジャガイモや、鶏肉、トウモロコシなどもある。野菜と肉と一緒に刺した物もあるし、別の肉を数種類刺した物もある。

何が食べたい？ と聞くのだが、焼いてある物が見えないようなので、まずはアーヴィングを抱き上げて注文させて下ろし、それからロリーナを抱き上げて注文させる。ダスティンの分の注文が終わってから、零良の注文。

4人掛けのテーブルに着いて、焼けるのを楽しみに待っている2人。零良とダスティンはそんな2人の仕草に小さく笑みを零しながら、2人が無邪気な子供であって嬉しいと思っていた。特殊とも言える環境で育ったからだろう、せめて一緒に住むようになった2人には、肉体的・精神的な苦勞を負わせたくない。殆ど自由がなく、親の言う通りに生きて来た2人だから思うのだろう。

「お待たせ！ 熱いから、気をつけて食べるんだよ、坊ちゃん、嬢ちゃん！」

「有難う！」

出て来た牛肉に齧り付く2人。熱い、けど美味しい！ と嬉しそうに口の端にタレを付けて喜ぶ2人を見、雨が止んでくれてよかったと思う。朝から2人はずっと楽しみにしていたから。折角町まで出たのだから、食材と傘を帰って返らなければ、とブロックの豚肉を齧りながら思う。

食材のあるなしはキッチンにおいてあるメモに記入しており、何かあるのかは大体把握している。米も欲しい所だが、売っていただろうか。米があれば、レパートリーも増える。昼にオムライスも作ってやれるし、リゾットも出来る。

「ダン、この町に米は売ってるんですか？」

「ん？ いや、どうだろうな。殆ど外食がメインで、食材屋に行ったら事がないから、わからないんだが」

「兄ちゃん、米を知っているのかい？」

「あるんですか？」

話を聞いていたのか、焼けた肉を持って来た店主が「食材屋にはあるんだが、調理の仕方が今一わからず、独特の臭みがあつて食べる奴が居ないから、買う奴もいないんだよ」と教えてくれた。独特の臭みは、恐らく米を磨がずに炊いたりしたのかも知れない。最初のとき汁を直ぐに捨てず、長時間漬ければなしにした可能性もある。

後で食材屋に行って買って来よう。久し振りに米が食べられると、楽しみになって来た零良。他に何か面白い食材はないかと聞くと、黒いインクのような調味料も入って来たのだが、これもどう使うかわからず、放置してあると言う。名前は？ソイソース？と言うそうだ。ソイソース、つまり醤油。

「醤油もあるんですね。……帰りに米と醤油と豚肉を買って、明日の夜はカツ丼にしましょうか」

「カツ丼？」

「炊いた米の上に、揚げた豚肉と玉ねぎなどを味付けした物を掛けるんです」

「美味しい？ それって美味しい？」

「人気はある」

美味しいかどうかは好みの問題だし、日本人なら兎も角として他国の人に受け入れられているのかはわからない。今迄零良の作る料理の味付けに何も言わなかったので、大丈夫だろうとは思うが。もしカツ丼を食べられるようなら、親子丼、牛丼と色々レパートリーも増える。

丸く握ったご飯を平たくして表面を焼き、味付けした肉を挟んだライスバーガーなども作れそうだ。沢山作ってリュックに入れておけば、小腹が空いた時に手軽に食べられるだろう。色々考えるだけで楽しいので、シャツを作り終わったらご飯茶碗も作るうと計画を立てる。

「レラ、また注文していい？」

「腹壊すなよ」

「大丈夫！」

アーヴィングが追加注文をしに向かい、ロリーナも野菜が食べたい

と店主の所まで行って注文。直ぐに戻って来て、焼けるのを楽しみに待っている。ダスティンも注文しに向かう。零良はもう食べないの？ とのロリーナの言葉に頷き、腹八分目が丁度良いんだと言って皿を横に避けた。

この腹八分目も、子供の頃にお代わりをしようとした時、父親に言われた言葉。あまりガツガツ食べるな、卑しく見える。まるで飯を食わせていないようじゃないか、と。成長し、食べる量が足りない時でも言われていた為、その量で足りらせうようと沢山水を飲んだものだ。

熱々の肉や野菜を食べている3人を見ていながら、零良は紙を取り出し、シャツのデザインを考える。憩と言う漢字と、こちらの文字を合わせてシャツをデザイン。折角なので絵も欲しいが、何の絵を書けば良いのか。宿と言えばベッドだが折角の憩と言う名なので、その特徴を生かしたい。

憩と言えば、浮かぶのは自然に囲まれた環境だが、この町は回りに結構な自然がある。だったら緑を入れる必要はない。あの店と言えば、女将とリーズとコックの男しか知らないの、その3人を某探偵事務所所属女性3人組のポスターのように立っている3人を描く事にした。シルエットのみなので、違和感なく受け入れてくれる筈。

デザインを書き始めた零良を覗き込む3人。中央に憩の文字と、憩の上部にアサーカの宿、下部に憩の読み仮名を書く。3人は文字の後ろに立たせて、アオリの状態で書けばそれなりなデザインになった。店名の後ろに立つ3人に『女将とリーズとコックだな』と、わかる人にはこの3人がわかる。

ある程度出来る頃には3人も食べ終わっていて、金を支払い食材屋

に寄って米と醤油、一緒に味噌も買って帰る。なんでもこの食材、アサーカの近くにある村・ターミと言う場所で作っているそうだ。ターミの食文化は日本に近いらしく、他にも日本食で使いそうな物があつた。

ただアサーカの町の人には、あまり受け入れられていないらしく、仕入れはするがあまり売れないと言う。今度から自分が買うので、そのまま仕入れて欲しい事を伝えると、店主は快く応じてくれた。

なんでも元々、この店主はターミの出身だと言う。地元の食材を好んで食べてくれる人が居なくて、寂しかったそうだ。今度からは零良が食材を買ってくれるので、色々地元の食べ物のお話が出来ると喜んで居る。

麻の袋に入った米と、木の樽に入った味噌、硝子の瓶に入った醤油と幾つかのオマケを持って、家に戻る4人。来る時よりも重い物を持っているのに、文句の一つも言わない双子。大丈夫か？ と時々声を掛けながら、なんとか家まで辿り着く。

憩の看板、シャツを運ぶのに、リヤカーでも作るうか。今回はダスティンが手伝ってくれたが、次回買物に行く時に居るとは限らない。幾つか作るべき物を頭に描きながら荷物を運ぶと、零良は一息吐く為の茶を入れにキッチンに向かった。

「16」忘れていた手続き

朝からダステインはギルドへ仕事に向かい、零良はリビングにてシヤツのデザインを清書し、双子は洗濯や掃除を買って出た。零良も最初は一緒に家事をこなそうとしたのだが、これは自分達の仕事だと言って聞かず、結局双子に任せる事に。

しかしその間に幾つかのデザインは考える事が出来たので、シヤツに関しては女将に確認すれば良いだけになった。看板は凹凸の多い木を切った形にし、年輪も形に合わせて付ける。憩の文字を中央に明朝体で大きく書き、浮き彫りになっているような効果を付けた。文字の色は黒。

勿論この世界の人は漢字を読めないなので、いこい、と読み仮名を付ける。素材は木で、重さは5kg。防腐加工、防水加工を看板の裏に書き込み、次に看板の大きさを設定しようと、リュックを手に取り、ファスナーを開く。

天使の用意した荷物の中にメジャーがあったので出し、50cm x 50cmを計ったら予想していたサイズ以下だったので70cm x 70cmのサイズに変更。スケッチブックにサイズも書き込み、後は錬金するだけにしておく。

次に作ったのは、リヤカー。重い荷物を運ぶ時に持っていく為の物。そんなに大きい物は必要ないので、双子が乗れる程度の物を作った。

タイヤは2個だとバランスが取り辛いので4つ付け、簡単な構造の物を書く。

ロリーナは洗濯、アーヴィングは2階の掃除をしているので静かに外に出て辺りを確かめてからスケッチブックで看板とリヤカーを出す。どちらも良い出来で満足し、2つを外に置いて家に入り、双子に声を掛けた。

「ヴィン、リナ。区切りが付いたら町に行く」

声を掛けると、2階からバケツを持って下りて来たアーヴィングが『もう出来たの?』と首を傾げる。それに首肯で返事をし、まだ洗濯しているだろうロリーナを手伝いに行くと、丁度服を絞っていた所。後は干すだけなので彼女を手伝い、終わったら3人で街に行く為戸締りをした。

見た事のないリヤカーが家の前にあり、いつ作っていたかわからない看板が出来ている事に驚く2人。視線を投げかけてくる2人に対し、零良は『行くぞ』と一声掛けてリヤカーを引っ張り、進み出す。慌てて付いて来る2人は、小さな声で『いつ作ったの?』『さあ…?』と会話しているが、彼には丸聞こえ。

まだ2人に能力の事を告げるには早過ぎる気がして、零良は聞こえて無視。もし2人がきちんと聞いて来たなら、重要な点を省いて答えるが、直接聞かれてはいない為、右から左に会話を流した。

やがて街に着き、宿に看板を置きに向かう。扉を開けて受付の女将に声を掛け、看板が出来た事を伝える。もう出来たのかい、と驚く

女将はカウンターから出て、リヤカーに乗っている看板を見、『良い看板だね!』と喜びの声を上げた。

「素材は木で出来ていますが、防水と防腐加工はしてあるので、雨に濡れても大丈夫です。本来なら取り付けもやるべきでしょうが、あまりそう言った作業が得意ではなくて……」

「その点なら大丈夫さ! 得意な子が居るからね」

「あと服のデザインも考えました。数パターンあるんですが……」

どれも憩の文字の後ろにシルエツト姿の3人が居るのだが、少しずつデザインが違う。その中で女将の1番気に入った物を選んで貰い、シャツとして作り出す。女将が1番気に入ったのは、憩の文字の後ろにアオリで立っている3人のシルエツト。

ただ、他のデザインも良い物なので、売り切れたら順番に品を入れて欲しいとの事。最初の注文は、M・L・LLを各20枚ずつ。前に仕入れた分は、既に売り切れているそうだ。何でも前の分を買った人が新しい物が入ったのを聞きつけて買ったらしい。その中には武器屋の男も居たと言う。

「では、出来次第持って来ます。リヤカーは置いていきますか?」

「いや、持って帰ってくれても大丈夫だよ。看板のお金は今払うかい?」

「服と一緒に結構ですよ」

「じゃあ、その時に渡すよ。値段だけ教えてくれる?」

値段を考え、40バドでどうですか？ と聞くと、そんなに安くても良いのかと言われる。看板を作った事などないし、売った事もないので高いのか安いのかはわからないが、この値段で十分だと領けば、本当に欲のない男だねえと苦笑されてしまう。欲がないのは、そう言う風に育てられて来たから仕方ない事と言えるだろう。

零良も小さく苦笑。服の枚数とサイズを確認した後、もう話す事もないし女将も仕事なので退散する事に。真つ直ぐ家に戻るのではなく、米と味噌を売っていると言う情報を聞いてすっかり寄る事を忘れていた役場に向かい双子の事を告げると、町の住人として登録しておくと言われた。

双子は零良の養子と言う形になり、結婚もしていないのに子供が出来てしまったと申し訳なさそうな顔になるが、別に気にしてはいないと2人の頭に手を置くと照れてはにかむ表情になった2人。手続きをしてくれた役人の顔も、2人を見て思わず緩んでしまう。

15歳未満の子供が居る家庭は税金が多少免除される説明を受け、零良は忘れないようにメモを取る。詳しい説明を聞き、質問はあるかと聞かれたか思いつかないので、もし聞きたい事があったら再び来ると告げ、役場を出た。リヤカーを引いて家に戻るのだが、ローナが乗ってみたいと言うので乗せてやり、アーヴィングも乗せて零良が引く張る。

「すごいすごい！ 馬車みたい！」

「俺が馬？」

「え、えつと、ヒトシャ……？」

「言つとすれば、人力車」

ロリーナに馬扱いされた事に対し、気分を害した訳ではなく普通に突っ込みをいれたのだが、彼女は怒らせたと思ったのかオドオドしながら言い直す。日本人の言う人力車とは違うが、人の力で動いているので人力車と教えた。

はしゃぐロリーナとは違い、アーヴィングは何かを考えているようにじっと黙って座っている。乗り物酔いするタイプなのだろうか？ 考えるが、リヤカーに乗ってて乗り物酔いなどあるのか？ と少しずれた事を考える零良。結局家に着くまでアーヴィングは何も喋らず、黙って座っていた。

家に到着すると、リヤカーの掴み手部分を上に向けて外壁に立てかける。雨が降っても防水・防腐加工がしてあるので大丈夫だが、水が溜まると重いので立ててあるのだ。家に入り、今回の売り上げを家計簿に付ける。実は家を買った当初から、零良はずっと家計簿をつけていた。

売った剣やシャツに関しては、後で伝票を切って貰う事とする。そうじゃないと、毎月役場に税金を収めるシステムになっている以上、計算が出来なくなってしまうからだ。町民となった以上、

この国での税金は収入の3割を税金として納めるのだが、これは4カ月に1回役場に支払いに行かなければいけない。その計算は全て個人にやらせているが、計算が苦手な者の為に商売として扱って居る税理士のような職を持つ人も居る。

(女将さんに前回と今回と次の納品分の納品書を貰って、武器屋の人にも貰って……)

「レラ、ちよつといい？ 話があるんだけど」

「どうした？」

「ボク達に何を隠しているの？」

アーヴィングを見ると、真剣な表情をして聞いてきている。何を、と言うのは錬金して出した物に関してだろう。家まで戻る間ずっと黙っていたのは、聞きたい事を頭で整理していたのか、いつ言い出そうか、言ってももし零良が怒ったり家を追い出されたらどうしようかと考えていたのだろうか。

ロリーナもそうだが、この双子は人に話しかける時に顔色と機嫌を伺う。父親が生きている間、村人達の機嫌を伺いながら日々を過ごしていた故、そんな癖が付いてしまったのだろう。

「……俺は普通の人間とは少し違う」

言って、スケッチブックを開き、雑巾を1枚書いた。小学校などで使う、タオルを4分の1サイズにして回りを縫い、x模様をつけたような雑巾を。書き終わったら双子に見せ、スケッチブックの中に手をつ込んで雑巾を出す。双子は目を丸くし、雑巾と雑巾が書いてあった場所を交互に見る。

あまり難しい事を言っても、理解出来るかわからない。簡単な言葉で、双子にわかるように説明を始めた。こことは別の世界で生きていたが、本来死ぬ予定じゃなかったのに死んでしまい、天使にこの世界に連れて来られた。今のは錬金術だが、他の錬金術師が使うような物とは違い、自分が書いた絵を具現化させる事が出来る錬金術

だ、と。

「シャツも剣も、お前達の服も俺が今のようにして作った」

「すごい……！」

「うん、凄いやレラ！　なんで黙ってるの!？」

「ダンに言われた。この力を知れば、国のお抱え錬金術師に選ばれるかも知れない。俺はそんな物を望んでいない」

「なんで!？　お金持ちになれるかもしれないのに!？」

「異分子は淘汰　自分達と違う者を人は恐れ、その力が自分のよりも優れていたら、妬まれる。普通の錬金術師では出来ない事が俺は出来るから」

わかるようにもう少し詳しく話をすると、双子は納得してくれた。他の錬金術師と違い、無から有を生み出せる彼は、やろうと思えば金塊を大量に作る事が出来る。武器を無限に生み出す事も出来る。国にそれがばれたら、穏やかな生活など望めない、と。

自分が欲しいのは国に仕える者としての誇りでも、貴族の為だけに使う力でもない。穏やかな日常、平和な日々が欲しいのだ。ロリーナに朝食の用意を手伝って貰い、4人でご飯を食べ、アーヴィングと一緒に掃除をし、作った物を売って収入を得る。そんな日常で十分なのだ、と。

「面倒な事にはなりたくない。だから黙っていた」

「……わかった。ボクも誰にも言わない。リナも言わないよな？」

「うん！　だってレラがいなかったら、今でもきつと外で寝てたと思うし、ご飯も食べられなかった」

絶対に誰にも言わないと約束した双子。零良は小さく笑うと、『有難う』と礼を言う。まさか礼を言われると思っていなかった双子は目を丸くした。家族として自分達を受け入れてくれた零良の秘密を守るのは当然だと思っていたから。

これで双子の前で堂々と錬金を使い、品物を出せるようになった。彼等が大人なら、部屋で仕事をすると行って1人になる事が出来たが、まだ子供である2人を置いて部屋に戻る気にはなれなかったのだ。

「ボク達は家の事をやるから、レラは自分の仕事をしてて！」

「うん、わたしも1人で出来るようになるから！」

零良の仕事がある日は、家事を全て引き受けようとしてくれている双子にもう1度礼を言うと、『お礼を言いたいのは自分達だ』と、養子として引き取ってくれた事に礼を言う2人。

日本では里親として子供を引き取る際、資格は必要ないが、引き取る人の健康面や収入、養育される子供への理解・熱意・愛情を必要とされる他、虐待の心配がないかチェックされる。研修も受けさせられるようになったと言う情報も耳にはしたが、零良にはあまり関係のない話だったので、詳しく調べる事はなかった。

故に、零良が双子と暮らす事に何か条件が必要かも知れないと思っていたのだが、あまりにもあっさり了承されたので拍子抜けしたのは仕方のない事。ともあれ、条件がきつくないが故に双子を無事引

き取る事が出来たのだから、良かったと言っしかない。

飲み物淹れてくるね、ボクも手伝う、そう言ってキッチンに向かう
2人を見て口元を緩めると、早くシャツを仕上げて夕食を作る為の
準備を行おうとスケッチブックに向かい、シャツを書き始めた。

「17」一緒にとじる派？上に乗せる派？

ジユワジユワと音を立てる油と、キツネ色に変わってゆくカツ。ヨダレを垂らさんばかりの表情で見ている双子は、揚げた肉を見るのは初めてだと言う。鶏肉にすっかり味を付けて揚げた物も美味しい、と言う話をする、それも食べてみたいとリクエストを貰ったので、その内鶏のから揚げも作ってやる予定。

4人分のカツが揚がったので丼に白米を盛り、タレの中にカツを入れて玉子でとじた物を米の上に乗せる。4つ作って、一つに蓋をしてリュックに入れた。ダスティンの分で、これだと温かいままで保存しておける。

ダスティンは何時に帰ってくるのかわからなかった為、3人は先に夕食を取る。初めてのカツ丼。零良は箸を使うが、双子はフォークを使って食べる。箸文化で育った人にはフォークでカツ丼は邪道に見えるかも知れないが、文化の違いだから致し方ない。

初めてのカツ丼は受け入れられるのかと、双子が食べだすのを待っている零良。カツを食べて『美味しい！』汁が染み込んだご飯を食べて『美味しい！』と2人は絶賛してくれたので、安心してカツ丼に手をつけ始めた。

結局夕食が済み、3人がそれぞれの部屋に入ってもダスティンが戻って来る事はなく、零良は床に就いた。何時間か経った頃に、階段

を上って部屋に入る音が聞こえたので帰って来た事はわかったのだが、眠気に負けたので様子を見に行く事も出来ず、零良は直ぐに夢の世界へと戻る。

朝は直ぐに訪れ、ベッドから下りると大きなアクビをして伸びをし、部屋から出てキッチンに向かう。リビングを通る時に時計を見たら、午前6時過ぎ。キッチンにて朝食の材料に使う物を出し、野菜はざつと水洗い。

この世界のコンロは不思議な物で、一見電熱線コンロのよう。強・中・弱と火加減が出来るが、魔力の宿った石に何らかの刺激を与えて温めているらしい。

強さの調整は、ボタンのような物を押すと、ボタンの先端に付いている石が熱する部分に触れて温まると言う。3つともボタンは別なので、3つのボタンを押し込めば、強よりも強い火加減になる。

鍋に水を張って沸かし、水洗いした野菜を切って投入。その間にパンを切ってバターを塗り、トマトやレタス、チーズ、ハムなどを挟んでサンドイッチを作った。スープはあっさりとした塩味にする為、ウインナーを投入してから味を調える。

次にリンゴを出して皮を剥き、食べやすいサイズに切ってヨーグルトの中に投入。ヨーグルトの中には甘みが一切入っていないので、ハチミツを少し入れて混ぜると、子供でも食べやすい味になるのだ。

「おはよう、レラ」

「お早う、ヴィン」

「何か手伝う事ある？」

「机を拭いてくれ」

わかった、と布巾を洗って机を拭きに向かうアーヴィング。アーヴィングは早起きで、ロリーナは朝に弱い。それ故、朝食の準備を手伝うのはアーヴィングが多いのだ。机を拭き終わったら、4つトレイに皿やマグを乗せ、準備完了。サンドイッチは作ってラップ（錬金で製作）をし、2人が起きてくるのを待つ。

その間する事がないので、零良はスケッチブックに絵を書き、アーヴィングはそれを隣で見ている。注文分のシャツは既に作ってあったので、子供用のウエストポーチを作り始めた。書いたウエストポーチの内側の部分に模様？防水・防臭加工？と書き、具現化させる。

ついでにチャック式の財布を作り、2つをアーヴィングに渡すと、嬉しそうな顔をして受け取ってくれる。出来ればこのまま素直に育てて欲しいと思うのは、すっかり親の気分だからだろうか。ロリーナの分も作りながら、2人は他愛のない会話を楽しむ。

漫画家のアシスタントをしていた話や、その師匠が鬼才と呼ばれていたが私生活はとんでもなくズボラで、風呂のお湯を1ヶ月間取り替えずに入って逆に異臭がしたとか、溜めすぎた洗濯物を一気に洗って洗濯機に悲鳴を上げさせた事、零良が来るまで冷蔵庫は空っぽだった事。師匠の世話を引き受けるようになってから家事を覚え、料理も色々覚え、やっと毎日が？楽しい？と思えるようになった事などを。

勿論今の生活も充実していて、これからどうしようかと計画を立てるのはとても楽しいと言う。殆ど無表情で淡々と話しているから、アーヴィングが『本当に楽しいの？』と内心思っていたのは秘密の

話。

ロリーナが起きて来たのは7時少し前。彼女が起きて部屋を出た音でダスティンも起きたようで、4人は揃って朝食を取る事が出来た。朝食時、双子が零良の養子として引き取られた事、能力について話した事を言えば、彼は少し渋い顔をしてから『この子等なら大丈夫か』と苦笑。

零良が錬金術師だと言う事を話したので、ついでにダスティンも錬金術師の家系だった事を告げると、どうやらダスティンの家の話を耳にした事があつたらしく、とても驚いていた。なんでも旅の商人がダスティンの話をしたそうだ。商人は村の人間ではなかった為、双子相手に他の町の話をしてくれたと言う。

「すごい有名なお家に生まれたのに、能力を受け継がなかったから追い出されたって……」

「元々錬金術はやらされていたのであつて、自ら興味を持ちやっていた訳ではないからな。面白さを感じた事もない。その点妹は」

ダスティンは妹の錬金術の才能を褒め、発想力を褒める。元々興味のない錬金術を嫌々やっていたのだから、才能がある妹が継いで正解だったと、妹を思い出しているのだろう、少し遠い目をしつつ話す。

ダスティンの妹の話が終わると、今度は今日の予定の話に。シャツは昨日の時点で出来ているが、直ぐに持って行ったら驚かれるし怪しまれる可能性があるので、4日程日を空けて持って行く事になった。

その間、宿屋で売るシャツとは別に売るシャツを作るのだ。店を借りのは良いが、維持が大変だし掃除もしなければならぬと言ふ事で、考えたのは庭で行うフリーマーケット形式。沢山売るのでないなら、十分だろう。武器はダスティンに教えて貰った店で売れば良い。

「方向性は決まって来ているようだな」

「ええ。取り敢えずは家のローンを払い、生活に困らない程度の収入を得られれば良いので」

先に食事が終わったので先に片付け、シーツや枕カバーを取り替える為に部屋に向かう。自分の部屋、双子の部屋、ダスティンの部屋と順番に部屋の窓を開けて空気を入れ替え、シーツを剥ぎ取って枕カバーを外し、部屋にある替えをセットしてシーツは洗い場に。

洗うのは兎も角として脱水が大変なので、手動の脱水機があれば良いと思うが、これもまた構造がわからない。もしかしたら宿屋にあるかも知れないので、今度聞いてみようと考えている。

下に下りると、食事を終えたアーヴィングがテーブルを拭き、ロリーナが食器を洗っている。ダスティンとは言えば、外で準備運動をしている姿が窓から見えた。食後によく動けると感心する零良。彼は5時間目が体育だと、胃が痛くなるタイプ。

風呂に洗濯物を持っていくと、食器を片付け終えたロリーナが早速洗おうとする。しかしそんなに急がなくて良いから、と言って2人でリビングに戻ると、こちらも早速床に雑巾掛けをしようとする準備し

ているアーヴィング。働き者の双子に少し休憩するように告げ、いつもの場所に座る。

零良はスケッチブックを開くと、最近では某100円ショップにも売るようになっていた床ワイパーを描く。長さは130cm程、布を挟む部分はティッシュの箱と同じくらいのサイズで。次にワイパーに挟む為の布を作る。ワイパーには布を挟む所を作っていないので、端に紐を付けて上で縛る形に。その布を20枚程作って鍊金。

「ねえ、何それ」

「雑巾掛けを簡単にする道具だ」

「え、どうやって使うの？」

興味津々のアーヴィングに、零良は実践して説明。まず布を濡らし、硬く絞って床に置き、その上に床ワイパーを置いて紐を縛る。柄を持ってスライドさせると床が拭ける。1枚を何度も洗って使うのではなく、20枚全部を塗らして汚れたら取り替えるようにする方が早いし綺麗だと、この雑巾用のバケツ（1つのバケツだが、中央で2つになっている物）を作った。ついでに、雑巾を干す用の小さい物干しも鍊金。

洗った食器を入れる為の水切り籠を作る為キッチンにメジャーを持って移動し、洗い場の横にあるスペースを計る。作業の邪魔にならないサイズを調べ、再びリビングに戻ってスケッチブックに書き込む。簡単に出来上がった、食器の水切り棚。抗菌・防カビ仕様。

「……レラの作る物って、凄い現実的な物ばかりだねえ……」

折角色々作る事が出来る錬金術なのに、日常によく使うような物しか作っていない零良を見て、ロリーナが呟く。確かに今迄の錬金して来た物を考えると、日用品ばかり作っていた。しかし彼にしてみれば、生活に必要な物しか作っていない。 unnecessary 物を作る意味がなかったのだ。

何か必要な物で、自分が錬金して作れる物があれば遠慮なく言っただけ欲しいと言っと、双子は顔を見合わせて『今は特に何も欲しくない』と言う返事。遠慮している訳ではなく、ただ思いつかないのだろう。双子もギリギリの生活をして来たから、今は今で満足のような。これから先、平穩に暮らすにつれ、欲しい物が増えるかもしれない。

取り敢えず今の生活に慣れ、アサーカの町に慣れる事が先決だろう。双子だけではなく、零良も。そして行く行くは2人も学校に通って、夢を見つけて。と考え、物凄く今更な事に気付いた。2人を引き取って食事や寝る場所を与えた後に考えなければいけなかったのだが、誰も指摘しなかったので零良も気付かなかった事を。

「……………2人は学校はどうしていた？」

零良の問い掛けに、2人は首を傾げた。

「17」一緒にとじる派？上に乗せる派？（後書き）

私はどちらでも良い派です。

「18」零良と双子と校長先生

「学校？」

「はい。俺の暮らしていた場所では、小・中と義務教育があつて、そこから進学するか就職するかは自分で決められるんですが、この世界での学校に関してはどうなっているんですか？」

中学校を卒業すると大抵高校に進学する者が多いが、中には親の後を継いで職人になる人も居るし、そのまま直接専門学校に入る者も居る（後者は稀だろうが）。しかし、この世界での学校と言うのはどうなっているのか、零良は詳しくは知らない。

ただダスティンも学校には行かず、両親と両親の弟子達に教育を受けていたようだ。学校で習う勉強はあまりせず、錬金術の基礎から徹底的に叩き込まれていたと言うから、彼の環境も特殊と言える。故に2人が双子に？この世界での常識？を教える事は、難しいと考えられた。

「読み書き計算は兎も角として、学校は何を習うんだ？」

「俺に聞かれても困ります」

「うーん……。金のある貴族なんかは、家庭教師を付けていたな。村や町で子供が集まって勉強をする場所はあつたかも知れないが…

…」

オレも詳しくはわからないと苦笑するダスティン。寺子屋のような物があるのか、はたまた家庭学習なのか。その辺りを役場で聞いておけばよかつたと、後になって悔やむ零良。出来れば双子には一般の子供と同じ環境で育て欲しいと思つて居る以上、このままにしておく訳にはいかない。

役場に行つて聞いて来ます、と立ち上がる零良だが、双子は『別に学校に行かなくてもいい』『勉強が必要なら自分で頑張るから』と零良が聞きに行くのを止めようとする。きつと前の村で同じくらいの年の子の友人も出来ず、嫌な思いをしたから言つたのだろう。

「俺が教えるにしても、ダンが教えるにしても、自分で勉強するにしても、いずれ限界が来る」

学校になんて行きたくない、石を投げられる、馬鹿にされる、双子が呟くように俯いて告げる言葉の数々は、かつて村でされた事なのだろう。しかし環境が変わつた今、双子だからと2人にそんな風に当たる者など居ない筈。

何より、この町で生きていくと決めた以上、いつかは町に出て働きに行かなければいけない日が来る。それを考えるなら、子供は順応が早いから、今のうちに慣れさせたい。

「ヴィン、リナ。ここは、お前達が育つた村じゃない」

「……うん」「」

「そもそも双子はどうやって生まれるのか、科学的に解明されている。俺の居た国では双子所か、五つ子や六つ子も居た」

「それは、出産が大変だな……」

「大抵は排卵誘発剤を投与された結果が多かったようですが、1つの受精卵が3つに分裂したケースもあります。男女の一卵性双生児も極稀ですが存在しているようですし」

「難しく、ボクには何を言ってるかわからないよ」

「わたしも、わからない」

師匠の漫画で双子のキャラクターが作り出された時、双生児に関する話を調べていたし、ドキュメンタリーなども見ていた為、双子だけではなく多胎児の話も知っていた。簡単だがその事例を話すと、ダスティンも双子も何を言っているかわからない、と言う顔をしている。

確かに、科学があまり発達していない事が見受けられるので、排卵誘発剤だの一卵性だの二卵性だのと言ってもわからないだろう。そもそも調べる手段や方法があったとしても、興味がなければそんな事を調べはしないだろうし、双子に会っても『双子？　へー、そうなんだ』と詳しく聞く事もない筈。

「気にせず、堂々と胸を張れば良い。恥じる事など何もない」

「そうだな、レラの言う通りだ」

ダスティンは双子の頭を撫で、取り敢えず学校を見に行ってみたらどうかと提案。見学して、合わないようであれば、また別の方法を考えれば良い。双子は顔を見合わせてから、ちよっとなら見に行っ

てみると声を揃えた。ダスティンと零良も顔を見合わせ、互いに小さく頷く。

ただ見学に行くだけだが、この2人にはとても勇気の居る行動だろう。ずっと虐げられる環境におかれていたのだから、当然。それでも零良とダスティンの声を聞いて、行ってみたいと言ってくれた。行こう、と零良は準備を始め、ダスティンは仕事に向かう用意を始める。

双子も服を着替えて出掛ける準備をし、4人それぞれ用意が出来次第家を出る。街までの双子の足取りはどことなく重いが、あくまで今日は見学のみ。そんなに緊張する事も、不安に思う必要もない。双子の緊張を解すため、零良は話を始める。自分を救ってくれた友人の話を。

その友人とは学校で出会い、意気投合。自分が両親の矛盾に苦しんでいる事を愚痴ると、親身に相談に乗ってくれた。そして高校を出てからの就職先も紹介してくれ、今でも親友だと思ってる(零良は残念ながら死んでしまったが)

「折角の友人を作る機会を、失うのも惜しいだろ？」

問えば、小さく頷く2人。今日は半日潰すつもりで零良は付き合い合っている。ダスティンとは途中で別れ、役場に行つて学校について聞くと、役場より少し奥に行つた所にあると言つ。簡単な紹介状を書いて貰い、3人は教えて貰つた学校へ。

学校らしき建物の前で草を筆っている男に近寄つて、ここの職員か

と問えば肯定の返事。白髪で身長は低く、人の良さそうな顔をしている老人はこの学校の校長だと名乗った。零良は自己紹介をしてから役場で貰った紹介状を見せ、双子と一緒に見学をさせて貰えるよう頼むと、校長は快く了解。今勉強をしている場所に案内してくれた。

玄関を入って廊下を進み、教室らしき部屋を廊下の窓から眺めると、幾つもの机に座る生徒達。黒板に書かれている文字はこの世界のものだが、年齢はバラバラ。同じ年の子を纏めて学ばせるのではないのか？ と零良が聞くと、校長が『学力に応じての組編成』だと教えてくれる。

「この教室では、文字の読み書きや文法などを教えています。このクラスで合格点に達すると、計算のクラスに進学し、計算クラスの合格点を出すと、今度はもう少し難しい読み書き・計算を教わります。年齢によって進学するのではないのが、魅力的ですね。……校長、あそこの2人は……双子ですか？」

零良の視線は、教室の中央に並んで座っている女の子の双子。容姿がそっくりなので、一卵性だろう。学校の近くに住んでいる家庭の子で、年齢は8歳だそうだ。双子である事に不安を覚えていた2人だが、自分達よりもそっくりな双子が教室で勉強している事に驚いている。

ロリーナは校長を見上げ、双子でも、いじめられないの？ と率直な疑問を投げかける。校長は皺のある顔にもつと皺を刻み、双子である事を苛める人間などこの町には居ないと言ってくれた。

「どうする？ ヴィン、リナ」

「……ボク……」

「……もしか2人は、トドツケ村の子かい？」

「……！！」

校長の口から？トドツケ村？と言う単語が出た時、2人は顔をバツと上げてから堪えるように服を掴み、再び俯いてしまう。どうやら2人の出身地は？トドツケ村？と言うようだ。肯定の言葉も否定の言葉もないが、校長には双子が返事をしなくても態度で肯定だとわかったのだろう、2人に視線を合わせるようにしゃがみ、昔話をした。

嘗て校長は、ある村に生まれた。しかしその村では双子を災いとし、双子を生んだ両親や双子に辛く当たる風習があった。そして校長は、双子の弟を持つ兄だった。例え双子として生まれても、可愛い自分の弟。

赤ん坊が2人生まれたからとて、一体生まれた子になんの罪があるだろう？ そもそも何故双子が災いとされるのか？ 誰に聞いても、先人の時からの言い伝えだと言い、正当な言葉を返してくれない。やがて村人を信じられなくなった両親や校長は、赤ん坊が2カ月になった頃、最低限の物を持ち村を出た。

辿り着いたのがこのアサーカで、当時の町長に事情を話すと空家を格安で貸してくれた。この町では双子は災いなどと言う言い伝えはなく、とても親切にしてくれた。弟達はすすくと成長し、災いなど一つも起こらず、今も元気に暮らしていると微笑む。

「言い伝えなど、適当な物だよ。私も、私の家族も弟達も、災いなど一つも降りかからなかった。災いがあったとすれば、あの村の人々の偏見と言う災いだろう」

「……学校、通ってもいいの？」

「もう、馬鹿にされたりしない？」

「勿論だとも！」

「グイン、リナ、通うか？」

「うんっ……！」

弾けるような笑顔を見せた双子。零良も安堵と共に小さな笑みを浮かべ、校長に手続きをしたいと頼む。3人は職員室に案内され、来客用のソファに腰掛けて、学校に通う為の書類と必要な道具に関して説明を受ける。

必要なのは筆記用具と、昼に食べる弁当。教科書などは学校で用意されているので、買う必要はないと言う。授業は午前10時から、午後3時まで。説明はそのくらいで、後は明日登校して来てから学校での注意事項を双子に話すそうだ。

零良は頭を下げ、双子を宜しくお願いしますと校長に頼むと、双子も宜しくお願いします、と頭を下げる。校長は笑みを濃くし、『こちらこそ宜しくお願い致します』と頭を下げてくれる。願うのは零良の方なのに、頭を下げられてしまった彼は薄く苦笑。話は済んだので、学校を後にする事に。

街にはもう用はないので家に戻るのだが、零良の横で手を繋いで歩いている双子は、どこか足取りが軽い。行きと帰りで随分と違う。それはそうだろう、同じ村で過ごした人から『双子が災いなんて聞

違いだ』と言つて貰えたのだから。

家に戻ると、今日の分のお手伝いをしてくる！ と張り切つて二手に別れる双子。ロリーナは洗濯で、アーヴィングは床ワイパーを使つての掃除。明日が楽しみなのだろう双子の弾んだ背中を見、小さく吐息を漏らしてから、零良は双子の為の鞆や勉強道具、学校に着て行く為の服を作り始める。

まず、背負うタイプのリュック。遠足用によく見かけるような鞆である。ピンクはロリーナに、青はアーヴィングに作り、名前もきちんと入れてやる。次にエンピツと消しゴム、それを入れる筆箱。筆箱は落しても中身がバラけないよう、布地にファスナーの筆箱。ノートはB5サイズのノートを2冊ずつ。

次に作ったのは、学校に着て行く為の洋服。休み時間には友達と遊ぶだろう2人の為に、動きやすい物を作る。次に弁当箱と水筒。流石に魔法瓶の構造はわからないので、普通の水筒。弁当箱を入れる為の巾着を作り、学校に行く為の道具は粗方作り終えた。

零良は今度は、木製の大きなタライを作る。底から水が抜けるようになつてゐる物を。そして大人用の長靴を1足、子供用のを2足作ったのだが、底がギザギザにする。滑り止めではなく、洗濯物を足で踏んで洗う為だ。シーツなどは、手洗いよりも踏んで洗つた方が早いと思つた為。

一緒に作るのは洗う為の洗剤で、固形ではなく粉の石鹼。？優しい香り？で？水に解けやすい？？汚れを良く落とし、除菌も出来る？？柔軟剤配合？の？自然に戻る？石鹼を。石鹼の入れ物は厚紙。日本で普通に売られているような物だ。これでシーツは随分洗いやすくなるだろうと、大きなタライを外に持つていく。

折角の初登校だ、明日も晴れて欲しい。零良は家の中に戻ると、何も書いていない白い布を錬金し、てるてる坊主を作ると窓際に掛ける。この世界にはないだろう、お祝い。子供の頃に学校で作ったと懐かしい気分になりつつ、夕飯の仕込みをしようとキッチンへと向かった。

「19」前夜祭

弁当に入れるのは、サンドイッチと鳥のから揚げ、厚焼き玉子にリンゴ。2人分の物を作ってラップに包み、巾着の中に。朝食は既に出来て居るので、急ぐ事もない。

ダスティンは昨日の夕飯中に帰って来て、一緒に夕飯を食べた後に再び仕事に出て行った。なんでも、夜に活動する魔物が近くに居ると言う事なので、食事だけに来たそうだ。まだ戻って来ていないので、宿に泊まったか野宿でもしたのだろう。

「おはよう、レラ！」

「お早う……珍しくリナが先か」

えへへっ、と照れたように笑い、顔を洗つてくると洗面台に向かうロリーナ（洗面所と言うのはなく、風呂にステンレスの台を置き、そこに桶を置いて洗面所代わりにしている）ロリーナが洗面所に向かい、5分程してからアーヴィングが目を覚まして下りて来た。

『今日はリナが早かったな』と言えば、『リナは何かある日はボクより早い』と、自分が遅いのではなく、ロリーナが早いのだと主張。リビングから真っ直ぐに洗面所に向かう。今日の朝食は、おにぎりとスープ、弁当を作った残りの卵焼き。

顔を洗い終わった2人は朝食を出すのを手伝い、3人揃って食事を取る。学校に行くまではまだ時間があるので、食事が終わったら食器を洗い、2階の窓を開けて空気の入れ替え。服を着替えると、持って行く物のチェック。

「忘れ物は？」

「「ない！」」

「後は学校に行くだけだな？」

「「うんっ！」」

不安はもう消し飛んで、後は楽しみなだけの2人。今にも家を飛び出して行きそう。仕方ない、少し早いが家を出るか、双子に宿に寄ってシャツを置いてから学校に向かう事を告げる。宿で少し話しをしてから向かうなら、丁度良い時間になるだろう。

零良は作ったシャツを出し、枚数を確かめる。男女のM・L・LLのサイズが各20枚ずつで、合計120枚。看板の代金・40バドを合わせると、400バド。120枚のシャツを持って歩くのは大変なので、双子を少し待たせて、台車を作る。ホームセンターによくある、大きな物を運ぶ物をイメージして鍊金。

シャツはそれに乗せて家の戸締りを確かめ、3人は街に向かって歩き出す。ゴトゴトと音を立てながら進む台車。双子は鞆を持って、嬉しそうに歩いている。

「学校が終わったら、2人で戻って来られるか？」

「うん、大丈夫！」

「寄り道はするなよ」

「わかってるよ、レラ」

学校に通う子供は、日本と同様、保護者の送り迎えが必要とされていない。欧米では12歳以下の子供を1人にさせるのは罪になるので、こちらでもそうである可能性があったが、どうやら子供が1人で遊びに出ても大丈夫のようだ。

ただ、零良の家は郊外なので、魔物が時折出て来るらしい。その点だけは心配なのだ。もし魔物が現れたら戦う事などせず、逃げるとは教えてある。魔物から身を守る術は父親から教わったようなので、双子は零良よりは逃げるのは上手かも知れない。

宿に着くと受付の女将に挨拶をし、シャツが出来た事を告げて商品を見せる。シャツの出来を見、大喜びの女将。本当に5バドで販売し、2バドを受け取っても良いのか、と言う言葉に首肯。自分はいれから4バドでシャツを売るし、ここでしか買えない限定品は1バド高くても当然だ、と。

「じゃあ、これはお題の400バドね。また、仕入れたい時には連絡すればいいかい？」

「はい。大抵は家に居ると思いますので。居ない時には、ポストに発注書を入れておいて下さい」

前に置いていったシャツと、今回の売買に関する紙を女将に渡して、サインを貰う。税金を納める時の為の物だ。最初のシャツの販売に

関しては、まだアサーカの町の住人ではないので税金が掛からないと言う。市民としての税金が掛かるのは、住民登録以降。武器屋に關しては、学校に寄った後に向かう事に。

学校に到着すると、真っ直ぐに向かうのは職員室。ドアをノックしてから開けば、数人の教師が零良と双子を見た。その中に校長の姿もあり、校長は3人を見て笑みを浮かべると、ゆったりとした足取りで近づいて来る。

「お早う御座います。今日から宜しくお願いします」

「おはようございます！」

「はい、お早う御座います。では、確かに大事なお子さんをお預かりいたしました」

双子の頭にポンと手を乗せ、皺を深くして笑う校長。零良は頷いてから頭を下げ、宜しく願います、ともう一度言って学校を後にする。背後から双子の『頑張つて勉強するねー！』との声に振り向いて手を上げ、目指すのは武器屋。

武器屋の男は、零良が作った2枚目の馬のシャツを着ていて、『よお、新作もいいな！』と挨拶の前に商品を褒めてくれた。有難う御座います、と礼の後に商品を売った事の証明としてサインを貰い、また何か武器を作ったら宜しく願いますと言って、家に戻る。

台車を引いて、家に戻る零良。ふと、前方に同居人の姿が見えて声を出せば、気付いて振り返るダスティン。零良が追いつくまで待つてくれている。

「お帰りなさい。無事完了したんですか？」
「ただいま。なんとかな。双子は学校か？」
「はい、今送って来た帰りです」

そうか、とダスティンは言い、大きなアクビをする。どうやら寝不足のようだ。家に戻ったら風呂に入って仮眠すると言うので、起きる頃に食事が出来るよう用意しておく事を告げれば、『いつもすまないな』と苦笑。

昨日一緒に仕事をした男に、アサーカで世話になっている人が居ると言う話から、日々の暮らしぶりを話したら、まるで夫婦のようだと言われた、などと笑っている。

零良は日本でアシスタント時代も、？師匠の嫁？？我等が母？？一家に1人・零良？などと言われていた。家事を引きつけ、アシスタントや師匠の料理を作り、時には食生活の乱れを注意していた事から、そんなあだ名を付けられたらしい。

「世話好きだと師匠にも言われましたが、別段好きな訳ではないんですよね」

「まあ、大抵の世話好きは、自覚なしでやっているだろうからな」
「俺にしてみれば、ダンの方が世話好きですよ」

見ず知らずの自分の世話をし、家を探すまで手伝い、異世界から来た事を知ると世間を知る為に協力してくれる。中々こんな人は居ないと零良が言えば、ダスティンは照れたように笑う。彼もまた、自

覚なしの世話好きなのだろう。

家に戻るとリビングの窓を開け、空気の入れ替えを行う。ダスティンはその間に汗を流し、風呂上りにはそのまま部屋に戻って仮眠。零良は双子が戻って来るまでリビングで仕事をする。商品として売り出すシャツの製作と、剣の製作だ。

前回作った剣は、分類的にはロングソードの分類に入るだろう。今回はそれよりも短い武器を作ろうと考えて居る。少し湾曲した刃は、ククリ。汗で滑らないよう、グリップを加工。柄尻に紐を通す所を付ける。紐を通して使うか使わないかは本人次第だが、あっても邪魔にはならないだろう。

別の紙である程度デザインが出来たら、それを見本にスケッチブックに書き、色を付けて錬金。出て来たナイフは立派なナイフだが、切れるかどうかは試してみなければわからない。そもそも、武器の手入れをやった事のない零良は、武器が切れなくなったらどうやって磨ぐのかを知らなかった。

漫画でもそんな描写をする事がそんなに多くなかった為、剣を磨ぐ所を想像すると、どうも日本家屋の襖の奥で蝋燭の火の下、老婆気味の悪い笑みを浮かべつつ包丁を磨いでいる姿しか思い浮かべる事が出来ない。包丁の時点で、既に剣ではない。

磨ぐのは砥石を使うのだろうか事は、想像に容易い。だったら、某通販で見かけたダイヤモンドのシャープナーを作れば、と思うのだが、剣をダイヤモンドシャープナーで磨いでいるダスティンを想像すると。

「見てごらん、レラ！ あんなに切れなかつた剣でも、このシャーブナーを使えば魔物を一刀両断に出来るんだぜ！」

想像の中のダステインがテレビショッピングを始めたので、慌てて思考を外へと放り投げた。武器をダイヤモンドシャーブナーで磨くのは諦め、専門家に任せようと言う最もな選択を選んだ零良は、その後デザインした武器を十数本作ると、休憩ついでにダステインの軽食を作り始める。

寝起きの胃にあまり負担は掛けない方が良さだろう事を考え、鳥のササミを使った粥と、野菜がたっぷり入ったスープ。果物を切つてヨーグルトを掛けた物。食後にはミルクティーでも入れようかと、用意だけを済ませておく。

ダステインが起きて来たのは、それから2時間後。良く寝た、と大きなアクビをしつつリビングに下りて来たダステインは、零良の作った食事を食べた後、作ったナイフを見て『素晴らしいな』と指先で遊んでいる。

「この手の武器を使う人は、どんな戦いをするのですか？」
「魔法士が護身に持っていたり、体術を主に使う闘士が持っていたりするな」

どちらかと言えば、零良の中では暗殺者や盗賊が使っている印象が強かったが、確かに魔法を使う魔法士や体術メインの闘士も持っていておかしくない。欲しいなら1本どうぞと差し出すと、金を払うと言われたので、金は必要ないから、使い勝手が悪ければ教えて欲

しいと頼む。

元々ダスティンには武器の調整を頼んでいたから、必ず1本は彼に渡すようにしているのだ。ダスティンは礼を言っただけでナイフを受け取り、自分の前に置いた。

「なあ、レラ。実は、君に頼みがあるんだ」

「なんですか？」

「オレの、帰る場所になつてくれないか？」

突然の頼みに、零良と零良の周りの時間が停止した。

「19」前夜祭（後書き）

タイトルは、零良の脳内のイメージです。
最後のダスティンのセリフによる混乱とも言いますが（笑）

「20」狼狽のダスティン

帰る場所になつて欲しい。まるでプロポーズのような言葉に零良は硬直し、黙り込んでしまう。ダスティンは暫く零良を見ていたが、自分の言つた言葉の意味を違ふ風に捉えている可能性に気付き、『違ふぞ!? オレはちゃんと女性を好きだからな!?』と慌てて訂正。零良の時間は、その時やつと戻つた。

ダスティン曰く、彼は家を追い出されて戻る場所などない。だから、何があつてもここには帰つて良いと言う場所が1箇所でも良いから欲しい、との事。宿のようにその日その時の場所ではなく、何があつても帰る事の出来る場所を。

彼の気持ちは、零良には痛い程よくわかる。ダスティンとは違ふ形だが、自分の居た場所を失つた零良。生家であれ、自宅であれ、人には?帰つて良い場所?と言うのは必要だ。次に進む為の休息の場所として。

「わかりました。ダン、いつでも戻つて来て下さい」

「……有難う、零良」

「双子が大きくなつて、1人1部屋欲しがつた時には、俺達が双子の部屋に移動の可能性もありますが」

「ははは、それも面白いかも知れないな!」

零良は部屋で作業するだけだし、ダステインもダステインで仕事から戻って寝るだけだから、別段構わないような感じもする。将来双子が大きくなり、思春期に入って『異性と同じ部屋は……』と言いだした時には交換してやろうと考える。

それから2人の会話は双子の話になり、大きくなったらなんの職を選ぶのか、アーヴィングはダステインと同じく傭兵の道を選びそうだ、ロリーナは宿の看板娘になっているのではないかと未来の話に。

まるで子供の成長を楽しみにしている親のような会話だと気付いた瞬間、零良は真顔になって『俺達、独身ですよ……』と遠い目をする。ダステインもまた、零良が何故そんな事を言い出したのかに気づき、己もまた双子の成長を見守るモードに入っていた事に気付いて遠い目。

零良は静かにその場から離れると、キッチンに夕食の仕込みをしに向かう。作るのはカレー。野菜をたっぷり入れたチキンカレーにしようかと材料を出し、無言で野菜を切り始める。ダステインはダステインで、『オレは風呂の掃除でもしてみようかな』と浴室に向かい、風呂掃除専用の大きなタワシを掴んでガシガシ洗い始める。

居た堪れない気持ちになった男2人は、無言で自分の仕事に集中。作業に集中する間にその気持ちも忘れ、キッチンからは芳ばしいカレーの匂いが漂い始めた。

ただいま！ と元気に帰って来た双子。少しの陰りもなく、満面の笑みだったので学校は楽しかったのだと表情で察した。まずは手を洗ってうがいをさせてから、宿題はないかどうかの確認。少しだけ宿題があったのでリビングでそれをやらせ、零良は夕食のカレーを温め始めた。ダステインは自室にて、武器や防具の手入れを行っている。

宿題である文字の書き取りをしながら、いかに学校が楽しかったのかを語るアーヴィングとロリーナ。2人共同性の友人が出来て、休みに遊んだ事を身振り手振りを交えて話している。

双子の宿題が終わってから、夕食のカレーを盛り付け。付け合せはサラダ。双子の分は別に取って、甘めに仕上げている。零良とダステインは中辛のカレー。カレーがはねて服が汚れるのを防ぐ為、双子にはエプロンを装着。

「ダン、夕飯が出来ました」
「ああ、今行く」

階段から上に呼びかければ、扉越しにくぐもった声。返事の後でダステインは直ぐに下りて来て、4人がいつもの位置に座って声を揃え、頂きます。初めて食べるカレーライスに双子は『美味しい！』と言ってくれた。日本式のカレーは、異世界でも通用するようだ。

夕食を食べながら、双子はダステインが聞いていなかった学校の話

をする。勉強も楽しい、先生が優しい、友達が出来て嬉しい、などと。お弁当のおかずを取り替えっこしたら、零良の作ったから揚げが美味しいと言ってくれた、などと。

笑みを浮かべつつ話を聞いていたダスティンだが、カレーがあと数口で完食すると言う時、スプーンを置いて手を止める。水を一口飲んで、零良と双子の名を呼んでから、少しの間の後で言った。

「明後日にも、旅を再開しようと思う」

と。驚きの声を上げる双子だが、零良は納得していた。双子が帰って来る前の言葉で、予感はしていたのだ。ダスティンは、どうして、なんでと問う双子に、元々旅をしていた事を告げ、零良の事が心配だから留まったが、そろそろ大丈夫だろうと判断し、旅の再開を決めたと説明。

ある程度の情報はダスティンから得られたし、双子と言う家族を得て孤独もなくなった。宿屋の女将にシャツを下ろしたり、武器屋で武器を売ったりと、収入のあても出来た。もう零良は大丈夫だと、確信を持てたのだろう。

「ダン、居なくなっちゃうの……？」

「旅に出るだけだ。幸い、零良から戻って来て良いとの言葉も貰えたから、いずれはここに戻って来る。時間があれば手紙を書く」

「本当に戻って来る？」

「勿論だ」

ロリーナとアーヴィングの問いに答えるダスティン。嘘は吐かない、オレの家はここだからな、と零良を見、彼の視線によって零良を見る双子。口にカレーが入っていたので頷きで返事をすれば、早く帰って来てね、必ずお手紙ちょうだいね、と可愛いお願いをしている。アサーカから離れて、どこに行くんですか？ と聞けば、まずは恩人である宿屋の娘が働いていると言うロツサに行き、顔を見て来るそうだ。ここから近いのかと問えば、結構離れていると言う。

「あ、成程。ちゃんと好きな女性なんですな」

「な、何の話だ！？」

「昼の話ですよ。？オレはちゃんと女性を好きだ？とわかっているのは、女性を好きになった事がある人だから出るセリフでしょう？」

「……君は本当に、鋭い言葉で貫いて来るな」

零良の言葉に、ダスティンは苦笑。昔の話だと言って、残りのカレーを全て平らげ、水を一気に飲み。サラダも残さず食べると、ご馳走様！ 酒を飲みに行つて来る！ と逃げるように部屋に戻つて着替え、街に出掛けてしまった。

双子は慌てて出かけたダスティンをポカンとした表情で見送り、零良を見て『何の話だったの？』と聞いて来る。零良は小さく苦笑。アーヴィングやロリーナも好きな人が出来たらわかると言うと、双子は零良もダスティンも、この町の人も皆好きだと、純粋な答えを零良に返す。

初恋はまだの双子に、その好きとは別に？ 特別な好き？ が出来て、

ダスティンは昔？特別な好き？だった相手の話に照れているんだ、と説明するのだが、難しくてわからなかったようだ。

難しい顔をしている双子に、いつか必ずわかる時が来るから、焦らなくても良いとフォローし、ダスティンが下げなかった皿をキツチンまで持って行く零良。そんな彼の背を見て、双子が『大人って難しいね』と声を揃えて呟いていた事を、零良は知らない。

「20」狼狽のダスティン（後書き）

ダスティン、次回で旅立ちます。

ちゃんと戻って来る　とは思いますが……いつになるやら……（笑）

「21」3人になった家では

ダスティンが旅立つ日は、見事に雲一つない快晴だった。真つ青な空をバツクに、零良と双子に見送られて。手には零良が作った弁当と、変えの下着やシャツなどが入ったリュック。旅立つと言われた日に、零良が作って用意した物だ。

武器も新しい物を出し、料理に使えそうな小型のナイフなども作った。虫が苦手だと言う彼に、ミント油を抽出した液体をプレゼントし、薄めて肌に付ければ虫が寄って来辛い事を教えてやると、今迄で一番感謝され、手を握って『君は本当にオレの恩人だ！』と涙ぐまれたのには流石に驚いた。

ダスティンが居なくなると言う事で寂しそうな双子は、今にも泣き出しそうな顔をしていたが、涙を零す事はなく、ダスティンをしっかり見送った。学校があつたので、双子も直ぐに用意をして学校に行く。登校する背中が、どことなく寂しそうに見えるが、これだけは仕方がない。

双子だって、零良の元を離れて生きる日がいつか来るだろう。どんな形であれ、別れは唐突にやってくる。零良の場合は自分が死んだのだが、友人や師匠、アシスタント仲間に見れば、突然の死に驚いている事だろう。

仕事はまだ幾つか残っていたのに、死んでしまつて迷惑を掛けてい

るな。考え出すと申し訳ない気持ちから、気分が落ち込んで来るので、家事をして忘れる事にした。2人が学校に行って居る為洗濯をし、箒でゴミを集めてから、床ワイパーで雑巾掛け。窓を開けて扉を開け放ち、2階の空気の入替え。

階段も掃除し、次に1階の掃除をしてから、風呂を磨いてキッチンを軽く片付け、自分の仕事をするべくリビングのテーブルでシャツを書く。今回の模様は、剣を構えた剣士のシルエット。ダスティン旅再開記念として、彼をモチーフにした。

シャツだけではなく、上下セットの綿のスウェットなども作った。これの値段は7バド。男性用は犬、女性用は猫の可愛いキャラクターが付いている。サイズはいつもと同じくM・L・LL。鍊金はせず、スケッチブックに書いただけ。

シャツとスウェットを作った後、今日の夕飯は何にしようかと考える。ダスティンの分はもう必要ないので、3人分で良い。完熟トマトがあつた筈なので、今日の夕飯はパスタに決定。早くから用意をしなくても良いので、集中してシャツを作る事が出来る。

ただ、ダスティンが居なくなつたので武器を作った後、試作品を使って試してくれる人がいない。前に作った武器をヒントに、少しずつ改良していけば良いかと考え、暫くは簡単な剣を売って生計を立てる事にした。

作業に集中し、気付けば双子が帰って来る時間になつていたようで、『レラ、ただいま』との声に慌てて時計を見る。昼も食はず作業に集中していたようだ。肩はバンバンに張つていて、思い切り伸びをしてから立ち上がり、家の鍵を開いて双子を出迎えた。

「お帰り」

「何か手伝う事ある？」

「今の所はな あった。2階の部屋の窓を閉めて来てくれ」

「はい」

開けっ放しだった部屋の窓を思い出し、閉めに行って貰う。時計を見ると、時間は3時半過ぎ。そろそろ夕食の為の仕込みをしようとスケッチブックをリュックに仕舞って、キッチンへ。

まず鍋に湯を入れて沸かす。その間に玉ねぎのみじん切りを作り、ニンニクを包丁の腹を使って潰す。お湯が沸いたら、トマトの皮を湯剥き。鍋に油を入れてからニンニクと乾燥させた月桂樹の葉を入れてゆっくり炒める。

ニンニクに色が付いたら葉と一緒に取り除き、みじん切りにした玉ねぎを加えて炒める。中央に穴が開いているヘラを使って、満遍なく火が通るように。この辺りでロリーナが手伝うと言って来たので、炒めるのを交代した。

「玉ねぎに色が付き始めたら、そこにある切ったトマトを入れて潰しながら混ぜてくれ。焦げないようにな」

「うん」

色の付いて来た玉ねぎに、トマトを投入。潰しながら弱火でじつくりと温める。そこに塩とブラックペッパーを少し入れ、そのまま中火で煮込む。大体、10分程。途中で少し砂糖を入れて。煮込んだ

ら、トマトソースの出来上がり。

次に作るのは、ポテトサラダ。ロリーナと交代した後、零良はジャガイモを水洗いして土を落してから、皮を剥いて適当な大きさに切り、水から茹でる。茹で上がったら水分を飛ばし、自家製マヨネーズとハム、黒胡椒、砂糖を入れて混ぜ合わせる。

パスタとポテトサラダなので、スープよりもあっさりしたお茶の方が良いだろうと、鍋に茶葉を入れて2、3分蒸らし、茶漉しで濾してポットに入れた。味としては、ほうじ茶のような味をしている。態々先に煎れておくのは、温い方が双子も飲みやすいし、熱いお茶を喜ぶ季節ではないから。

夕飯にはまだ少し早いので、すっかり忘れていた洗濯物を取り込もうと思ったのだが、既にアーヴィングが取り込んでおいてくれた。それを畳んで各自部屋にしまい、リビングで今日の学校の話をする。新しい言葉を覚えた、先生が面白い話をしてくれた、と話す双子。

話している間に腹が空いたのか、ぐうと唸るように鳴いた腹の虫。アーヴィングの音かと思えば、ロリーナが頬を少し赤らめて笑っている。夕食にしようかと、タツプリの湯を沸かして塩を入れ、天使が用意してくれた乾燥麺を投入。トマトソースもその横で温め、ロリーナに食器を出して貰い、アーヴィングには机を拭いて貰う。

茹で上がったパスタの水気を切って油を掛けて軽く混ぜ、絡まないようにしてから1人分ずつロリーナが用意した皿へ。皿の枚数は4枚出していて、零良は苦笑。『3枚でいい』と言うとハツとした顔をし、1枚棚に戻す。寂しげな顔で。

用意をしてリビングに持っていけば、アーヴィングがいつもダステ

インが座っていた隣の席に座り、ロリーナは零良の隣に腰掛ける。並んで座ってもいいと言うのだが、2人は首を振って断り、零良とロリーナが並んで座る事になった。

いつもの通りに夕食を取り始め、宿題の話や勉強でわからない所などないか、との話をするのだが、最初は普段通りに話していた双子の声が徐々に小さくなる。ちらりと視線を送るのは、ダスティンが座っていた席。双子である2人を受け入れた内の1人が居なくなつて寂しいのだろう。

「寂しいか？」

問いかけに、小さく頷いて答える2人。パスタをくるくるとフォークで丸め、口を含む。トマトの酸味と玉ねぎの甘みが生きたソース。パスタとの相性も抜群。それを飲み込んでから双子を見、『きつとダンも今頃寂しいと思っっている筈だ』と言えば、顔を上げる双子。

別に寂しい思いをしているのは、双子だけではない。零良も家族が1人減つて寂しいし、ダスティンもそうだろう。4人で過ごしていたのが、これからは1人だ。会話をする相手は酒場などに行かなければいないだろうし、食事を誰かと食べると言うのも回数は減る筈。

「そ、うだよね……。ボクにはレラやリナがいてくれるけど、ダンは1人だもんね」

「誰かが家を出る時、寂しいのは残される者だけじゃない。家を出る方も寂しいものだ」

「うん……」

「今日はいい。明日からは、戻れるな？」
「うん！」

元気な返事に零良は小さな笑みを浮かべると、明日は学校が終わる頃に迎えに行くから何か買って家で食べようかと言えば、双子は零良の作るご飯が良いと言ってくれたので、リクエストを聞くと、鳥のから揚げを頼まれた。

だったら沢山作ってリュックに入れ、明後日の弁当にも入れると言えば、大喜びし、沢山入れてと言われる。どうやら零良のから揚げは双子の好物になったようだ。

暗い空気は払拭され、双子には笑顔が戻って、ダスティンが戻って来るまでに、何かを出来るようになりたいと言う。ロリーナは零良の作るから揚げをマスターしてダスティンに食べさせたい。アーヴィングはダスティンのように強くなりたいと希望を語る。

いつになるかわからないが、帰って来る家族を出迎える為に、成長しようとしている双子。零良も、ダスティンが戻って来る迄には家のローンを払い終えておきたいな、と目標を立てる。

ダスティンが旅立ち、4人から3人になった零良の家。しかし彼が予想しているよりも早く、再び零良の家では、4人の声が響くようになる。

「22」亜人のびしょーじょ(?)

ダスティンが旅に出てから、数週間。双子は変わらない生活を送り、零良もまた武器を売って生計を立てている。シャツの販売に関してはまだ考えておらず、どのタイミングで売り出そうか思案中。

宿屋・憩のシャツの売り上げは良いらしく、1度に数枚を購入する者も居るようで、発注も一定のペースにて入る。商品を納入時、新作が楽しみだと言うリーズの言葉に『その内売り出します』と伸ばし伸ばしに。

街では憩を真似て店に名前をつけるのがブームになっているようで、零良の元に看板の発注も来るようになった。いくつかのデザインを考えて見せてから錬金を行い、一部の人からは看板屋だと思われるようだ。ある意味、間違っではない。

順調に生活を送っていた零良は、現在ターミの村の食材を購入し、家に戻っている途中。日曜に双子と共に整えた庭は石畳を敷き詰め、庭も作ってある。玄関前は大きく開けてあり、シャツを売る為のスペースとして確保したのだ。

やっと見えて来た家。早く荷物を中に入れて、少し休憩しよう。玄関の数メートル手前で、零良は何かに気づいた。家の右手側、家に寄り添うように倒れている足を見つけた。

警戒しつつ遠回りをして近寄ると、そこに体を丸めて倒れていたの

は亜人の女性。顔立ちは一見人間と同じだが、頭部にペタリとした耳らしき物が付いている。もしかしたら作り物かも知れないが、一応は？亜人らしき女性？だ。ちなみに女性だと判断したのは、胸の膨らみがあったから。

ここで声を掛けて起こして良いのか、それともこのまま寝せておいて良いのか。取り敢えず買って来た荷物をしまうべきだと今は彼女の存在を放置する事にし、食材を家に運ぶ。リヤカーはそのまま外に置いてビニールを被せて大きな石を乗せた。

リビングの机に食材は乗せたので、今の所はこれでよしとし、取り敢えずあの女性だ。零良はスケッチブックにタオルケットを書くところを錬金。外に持って行って、寝ている女性に掛ける。完全に寝ているのか、タオルケットを掛けられても目を覚まさない彼女。

双子が居るので、見ず知らずの人間をこのまま放置しておくのも危険だが、悪い奴が人の家の敷地内で昼寝をするとも思えない。金がないから、取り敢えず人の家の壁に寄り添って寝ようと考えた可能性がある。

話を聞くまで悪人だと決め付けるのはよそうと思い、零良は家の中に戻ると、荷物をキッチンやリュックの中にした後、今回使った金を家計簿に記入。その後で次に売りに出す斧のデザインを始め、双子の帰宅を待った。完全に、亜人の女性の存在を忘れて。

今日の夕食は、魚を使った料理。焼き魚や煮魚ではなく、魚の身を使ったピザを作った。トマトソースをベースに、イカや貝なども乗せたピザは、とろりとしたチーズと相性も良い。ハフハフと熱いピザを喜んで食べている双子。3種類のピザは、それぞれ好きな具を乗せて作った物。

オーブンやレンジがあれば、もっと別の料理を作れるのだが贅沢は言えない。ここで作る料理でも十分双子は喜んで食べているので、出来る範囲で色んな料理を作ろうと考えるようになった。

茶を飲みつつ楽しい夕飯を取っていると、突如玄関の扉が開く。大きな音に目を丸くした双子。零良は立ち上がり、睨み付けるように扉を開いた主を見ると、片手で開いた扉に触れ、片手にはタオルケツトを持っている、亜人の女性が仁王立ちをしている。

くせつ毛の緩いウェーブの掛かった栗色の髪を、肩に届くか届かないか程度に伸ばし、黄色の瞳で3人を見据えている。顔立ちはどこか幼く、しかしその顔に反して体はグラビアアイドルを思わせる肢体。大きな胸に、細い腰、形の良い尻。

扉を開けたままの体制の女性を見て、アーヴィングが『あんた誰？』と訝しげに聞き、ロリーナは零良の後ろに隠れて女性を覗き見ている。

「なんで!？」

「え?」「」

「?びしょーじょ?が倒れてたら、優しく声を掛けて起こすもんじやないの!？」

「……？びしょーじょ？」「」
「布だけ掛けて後は放置って、信じられない！ 風に晒され、地べたに寝かせたままなんて……！」

ワナワナと震え、零良の作ったタオルケットを握り締めている？自称？美少女。確かに顔立ちは可愛いのかも知れないが、自分で言ってしまうと半減してしまう。そもそも、？少女？と言う年齢かも危うい。十代後半なら、少女ではない気がするのだ。

そもそも、自分が美しいとわかっている女性が、他人の家の外壁で眠っているものなのだろうか。こちらと日本の常識は違うのでわからないが、零良の知っている知識の中では、見た事もないし、聞いた事もない。

「ね、ねえ、レラ……知ってる人？」

「そっちの外壁の所で寝てた。お前達が帰って来た時にも居た筈」

「え、気づかなかった」

「わたしも……」

「危ない人かも知れないから、声を掛けなくて正解だ」

「コラー！ 誰が危ない人だ！ オイラは危なくなんてない！」

失敬な男だな！ と憤慨する亜人の女性。ロリーナは零良の服の裾を掴んで引き、危なくないって言ってるよ、と。零良は腰の辺りにあるロリーナの頭に手を乗せ、

「危ない人が態々？自分は危いです？と言いながら近づいて来る訳

ないだろ。大抵は？危険な人間ではない？と言いながら近づいて来るものだ」

と説明すれば、『成程』と声を上げる？3？人。危ないと称された女性もまた、零良の言葉に納得していた。3人と言うのは、自分を危なくないと言った女性もまた、零良の言葉に関心して頷いたからだ。

「君は何故家の外で寝ていた？」

「む？ ああ、疲れて眠くて、あそこ日当たり良くて寝てたの」

「アサーカの人？」

「違う。オイラは、ネムの出身」

「……ネム？」「……」

「亜人ばかりが住む集落だよ」

亜人だけが暮らす閉塞的な集落で、辛気臭いのが嫌で飛び出して来たんだ、と笑いながら後頭部を掻いている。飛び出した後でギルドに登録して、なんとか生き長らえては来たが、ここに来て金も尽き、空腹と眠気からどこか休める場所を探した。

それがこの家の壁際だったと言う。花壇の花の良い香りと、暖かい日差し、人の家の近くと言う事で魔物もいないだろうからと、安心して眠ったそうだ。

「寝たのは良いが、なんで怒鳴り込んで来る必要が？」

「良い匂いがしたから、起きたんだ！ んで、こっそり窓から覗い

たら、美味しそうなモノ食べてた！ 何より、びしょーじよである
オイラが外で倒れてるのに、声を掛けないのが悔しかったの！ だ
から怒りに来た！」

「倒れてたんじゃなく、寝てたんでしょ？ その上、八つ当たりだ
し」

零良の問いに亜人の女性は、美少女が倒れているのに声を掛けて起
こす事なく、布だけを掛けてそのまま放置した零良に対して憤慨し
ているようだ。彼女自身は『寝ていた』と言っているのに、零良に
対しては『倒れた自分に声を掛けないとはどういう見だ』と怒っ
ているので、言っている事は矛盾している。

彼女の発言にアーヴィングも冷静に突っ込みを入れ、ロリーナは？
びしょーじよ？の単語が気になってるらしく、小声で『びしょー
じよ、びしょーじよ』と呟いていた。零良は何を言っているかわか
らなくなり、黙るしかない。

「レラ、この人やつぱり危ない人だよ」

「だから、オイラは危なくない！」

「？びしょーじよ？なのに、男の人なの？」

「オイラは女だ！」

「だって、自分をオイラって……」

「オイラはオイラでも、オイラは女だ！ こんなに大きい乳がある
のに、男なワケない！」

胸を張って大声を出した後、亜人の女性の腹から轟音が鳴る。唸る
ような、吼えるような大きな音が。驚きに体を竦ませる双子。零良

はなんの音が直ぐに気づいたようだが、双子には得体の知れない音に聞こえたのだろう。

音を鳴らした張本人は照れたような顔をして頬を掻き、一言「腹鳴っちゃった」と笑ってから、零良達に向かって頭を下げた。「食べ物を恵んで下さい」と。零良は無言で皿に乗った自分の分のピザを差し出し、双子も零良と同様に、彼女へとピザを差し出す。

これが、この世界に来て初めての亜人種との出会いだった。

「22」亜人のびしょーじょ（？）（後書き）

一応この亜人の女性が、この小説のヒロインにあたるのかと思います。

「23」亜人のびしょーじょ(?) 再来

「グラシエラ？」

「そう、グラシエラはアコンチャ。地元じゃ、シエラって呼ばれたよ。ってか、これ美味しいー！」

ピザだけでは足りなかった亜人の女性・グラシエラに、零良は簡単に作れる料理を出す。本当にパンを切つてマヨネーズを塗り、ハムとレタスを挟めただけの物だが、彼女は喜んでそれを次々に食べて行った。

相当な空腹を抱えていたのか、作る物を次々平らげて行く。啞然としている双子と、キッチンで作るのが面倒になり、テーブルにまな板を置き、出来た傍から彼女に渡して行く零良。そろそろ材料が無くなりそうだと言う頃に、やっと腹一杯だと言って満足げな笑みを浮かべる。

腹をポンポン叩いて『ごち！』と頭を下げるグラシエラに『お粗末様』とキッチンに皿やナイフなどを持っていき、水を張って置いてある樽に浸けた。明日、また買出しに行かなければな、と考えながら。

「無一文だろ。これからどうするんだ」

「えっと、重ね重ねで悪いけど、一晩泊めて欲しいなあ、なんて……。勿論、明日はこの街のギルドで仕事をして宿に泊まる予定だから、今日だけでいいよッ！」

手を前にして、ねだるような目をし首をコトリと横に傾げて頼むグラシエラに、零良は小さく息を吐いてリュックから財布を出し、彼女の前に30バドを置く。何コレ、と言う表情をしてバドを一瞥してから零良を見る彼女。

泊める事は出来ないから、30バドを貸してやる。それで街の宿に泊まれと言うと、眉間に皺を寄せ困った表情をしているグラシエラ。まさか金を与えられるとは思っていなかったのだろう。

「返すのはいつでも良い。これで宿に泊まってくれ」

「……どこでもいいから、泊まらせてくれれば良いのに……」

「どこでも良いなら、その金で宿を取ってくれ。宿は1晩15バドだから、2泊は出来る」

俺には家族である双子を守る義務があるし、流石に初対面であるグラシエラを泊める訳にはいかないと言えば、少し頬を膨らませて『じゃあ、有難く借りる……』と言って、30バドを自分の着ている服のポケットにしまった。

看板があるから、街の宿は直ぐにわかる筈だと説明。グラシエラは先程の明るさから一変し、静かに零良の言葉に頷いている。双子も騒がしかったグラシエラが静かになったのが気になるのか、伺うような視線を彼女に送り続ける。視線を送られた彼女は、上目遣いで

零良を覗き見、小さな声で尋ねる。

「あのさ……オイラが、亜人だから？　亜人だから泊めてくれないの？」

「何？」

「ここに来るずっと前に、宿に泊まるうとしたら、亜人はお断りだつて追い出された事があるんだ」

やはりどこの世界でも差別や侮蔑はあるようだ。双子であるアーヴィングやロリーナも差別を受けていたが、彼女は別の町で亜人故に差別を受けていたのだろう。零良は差別しているつもりなど全くないが、彼女にしてみれば断つた理由が『亜人だから』だと思つている様子。

零良は小さく息を吐き、別に亜人だから泊めないのではなく、人間であつても初対面の人間を家に泊める気はないときっぱり言った。自分1人なら良いが、双子と共に暮らしている以上、正体の知れない人間をやすやすと泊める訳にはいかない。

もし自分が簡単に人を信用してホイホイ家に泊め、双子に何かあつたら、双子を生んだ彼等の母や、ここまで育てていた彼等の父親に申し訳がたたない、と。

「そっか……うん、わかったよ。ご飯ありがと。お金は必ず返すから」

「ああ」

グラシエラは立ち上がって再び頭を深々下げて礼を言うと、玄関から出て街の方へと向かって行く。折角なので見送りに出た3人は、徐々に小さくなってゆく彼女の背を見つめ続けた。

クイと袖が引かれ、グラシエラの背中から袖を引いたロリーナを見ると、『わたしは泊まってもらっても、大丈夫だったよ?』と言われるが、零良は軽く首を振り、『信用する事も大事だが、同じ位に疑いを持つ事も大事だ』と言ってロリーナとアーヴィングの頭に手を乗せる。

信用するのは簡単だ、何も考えず相手を受け入れれば良いだけ。ただ、それではただの愚か者になってしまう。本当に相手を信用してよいのか、考える事すらないのだから。

「幾ら口で?大丈夫だ?と言われても、初めて会った者同士で、本当に大丈夫かなんて判断が出来ないのはわかるな?」

「でも、レラはわたしやヴィンを、家においてくれたよ?」

「その時は俺しかいなかったし、戦えるダンが居た」

しかし今回はダステインは居らず、ある程度武道が出来ても双子を守る程の力量がない零良しか居ない。危険が及ぶとしたら、零良ではなく双子だろう。彼の言葉の意味を察したのか、自分達の所為で? 小さく問う双子に苦笑し、お前達の?所為?ではなく?為?だと思つたと言い直す。

もし彼女を信用して家に泊まらせ何かがあつた時には、責任は双子ではなく、双子の保護者である零良が負う事になる。別に責任を負

いたくない訳ではなく、自分の判断ミスの所為で双子を危険に晒したくはないのだ。

「お前達の両親から大事な子供を預かっているんだから、俺が警戒するのは当然の事だ。自分達の所為でなんて思わなくていいし、思う必要もない」

「レラ……」

「さ、明日の準備をして、風呂に入って寝るぞ」

2人の背を押すと、素直に返事をして玄関に向かう双子。グラシエラの姿が消えた街の方角を一瞥してから、零良も双子の後を追いかけて家に入り、玄関の鍵を閉める。明日は双子と一緒に家を出て食材を買って帰らなければいけないと、予定を考えながら。

双子と一緒に街に行き、食材を買って家に戻ってから荷物を整頓。売り出すワンピースなどを作っていると、ドンドンと玄関の扉が叩かれ、扉の向こうから大きな声が聞こえる。声の主は、昨日の女性・グラシエラ。名前を名乗って零良を呼んでいる所を見ると、何か用事なのだろう。

スケッチブックをリュックにしまい、玄関の扉を開いて姿を確認した零良は、グラシエラの格好に目を丸くした。汚れて泥だらけの姿

服も破けているし、擦りむいた頬は赤くなり、さらけ出している足には傷があつて血が流れた跡がある。擦つたような血の痕は、自分で適当に拭つたのだらう。

傷と汚れだらけの格好をしているのに、顔だけは満面の笑みを浮かべているグラシエラは、『おつす!』と手を上げて挨拶をした後、零良に手を出せと求める。黙って手を出すと、手に乗つたのは昨日貸した30バド。

「何時でも良いと言つたが？」

「早く返さないと忘れちゃいそうだからさ! それに、ギルドで良い仕事があつたんだ。ちよつと梃子摺つたけど、直ぐに返せる報酬だつたし!」

幾ら直ぐに返せる報酬を貰える仕事があつたと言っても、グラシエラの格好を見て『そうか、態々有難う』とは言えない。零良は小さく息を吐いて『入れ』と中に招き入れると、彼女を風呂場に案内。

家に招かれ、行き成り風呂場に連れて行かれたグラシエラは、顔を真っ赤に染め上げて慌てふためく。何か別な事と勘違いしているようだ。零良はそれに気付かず、泥だらけだから汚れを落とせ、服はある物を貸してやると言つて、さっさとリビングに消えてしまった。

零良の行動に1人勘違いをさせられたグラシエラは、ムツとした顔をして拗ねるのだが相手は既に居らず、ぶつぶつと文句を言いながら服を脱ぎ捨てると風呂に向かう。棚に並んでいる石鹸を手にとり、泡立てながら、仕事にてすっかり汚れてしまった体や頭を綺麗に洗い始めた。

零良はリビングに戻ってから直ぐ、グラシエラの為にワンピースを錬金。サイズはM。下着も一応作っておくかと簡単に女性用のショーツを書いて錬金。こちらサイズはM。グラシエラがまだ風呂に居るのを確認してから、バスタオルと共に服を置いておく。

グラシエラが風呂から出て来たのは、20分程経ってからの事。まだ湿り気を帯びている髪はボリュームが押さえられており、昨日と今日見た彼女の幼さは影を潜めている。犬の耳さえなければ普通の少女と変わらない。ただ手首と足首には、リストバンド・アンクレットをしているような毛が生えている。濡れている所を見ると、地毛なのだろう。

「ね、ねえ、これって……誰の服……？ あの女の子のじゃないよな……？ サイズ、明らかに違うし」

「売り出し予定の商品だ」

「だ、だよなー！」

彼女は一体誰の服だと思ったのだろうか、心の底から安堵したような表情を見せ、それから服と風呂の礼を言った。零良は机の上に出した箱を指し、その中に街で買った消毒薬と傷に当てる絆創膏があるので、自分でやってくれと頼む。

やってくれないんだ、と呟いたグラシエラに気付いたが、人間だったら、亜人だったららの問題ではなく、零良にとっては女性だから不用意に触らないようにした話。大きな怪我ならやっただろうが、小さな傷だったので自分で出来ると判断した。

「あの子等は？」

「学校」

「ふーん……。兄弟じゃないよな？」

「事情があつて引き取つた」

話題を出そう、出そうとグラシエラは色々考えて零良に問うのだが、淡々とした返事のみ。零良に、少し頬を膨らませる。彼としては普通に返事をしているのだが、気に食わないのだらう。ダスティンにもこんな風に会話していたので、彼は敬語のままを希望したのだ。

静かになった2人切りの空間。元々零良はあまり喋る方ではないので、無言で居ても空気の重さを気にしない。しかしグラシエラは違つうようで、視線を彷徨わせて話題を探す。だが話題に出せるような物は一切無い。

「え、ええと……。この服、売り物だつて言つてたよな！？」

「ああ」

「ちゃんと払うから！ 幾ら！？」

「まだ決めていない」

「もうちよつと会話を広げようよ！ 何、その無駄な言葉一切ない会話！！」

いー！ つと遂には立ち上がつて零良を指差し、文句をぶつけて来るグラシエラ。忙しい女だな、と思いつつ頬杖を突き、『元々だ』と答えれば、社交性の低い奴だな！ と頭を掻き毟っている。

師匠の元で暮らし始め、アシスタント仲間との生活で前よりも社交性は良くなった筈なんだが、と思いつながらもそれを口にはしないで、いかに会話が大事なのかを語るグラシエラを、観察するように見続ける。

どうも彼女は、零良の師匠と性格が被る。師匠は男だったが、こんな雰囲気でもよく零良に絡んで来た。絡むと言うよりも、無意識に人と距離を置く彼に対して、そんなんじゃない駄目だと言う説教でもあったが。

「　　と言うワケ！　わかった！？」

「……………一応は」

「聞いてなかったな！？」

「殆ど」

再び『いー！』と声を上げるグラシエラを見て、今更だが、一応来客なので茶でも出した方がいいかと、零良は立ち上がってキッチンへ。恨めしそうな目を見せる彼女を気付いていながら零良は無視し、湯を沸かして茶を煎れた。

「24」第1回フリーマーケット

結局、グラシエラが零良の家から帰ったのは、双子の帰って来る少し前。昼食もここで食べていき、またな！と言って家を出た時には『ああ』と返事をしたのだが、内心『また来るのか』と考えていた。そんなを訪れても、面白みのない家だろうに。

彼女が居なくなってから食器を洗い、風呂の掃除をして、リュックからスケッチブックを取り出すと、グラシエラに作ったワンピースを数枚作る。彼女に商品と言った手前、もし売り出す時にワンピースがなければ不自然だからだ。

売り出し商品が結構たまってきたので、1度庭で店を開こうと考えている。天気予報がないので晴れた日はわからないが、早くて再来週の休日にも、と。その為に必要なのは、商品を置く物。

フリーマーケットスタイルで売るにしても、商品を手に取りやすいようにしなければいけない。零良が考えたのは、ビールケース大の大きさの箱に布を掛けて商品を置く方式。片付け易いし、棚を作るより場所を取らない。

その箱に関しては、零良が錬金するのではなく、街で売っていきそうな物を買おうと考えている。流石に何でも間でも錬金していたら、街の経済が回らないと思ったのだ。

宣伝に関しては、憩・食材屋・武器屋にポスターを張らせて貰い、1週間程前から告知する予定。その時の売れ具合を見て、どの位のペースでやれば良いか考えようと思っている。まだこの町で過ごしそんなに経っていないので、四季によっての服の入れ替えも重要となるだろう。

だが最低限の生活さえ出来れば良いと思っているので、儲ける為に大量の服を作って売り出そうとは考えていない。無欲で在れ、その言葉が彼から離れない限り、零良は双子と共に生きられるだけの収入しか欲さないのだ。

前に、双子に『もっといっぱい出して、お金持ちになればよいのに』と言われたのだが、彼は首を横に小さく振るだけ。後に双子が自室にて、『レラは呪いを掛けられているみたいだね』とこっそり話していたのだが、言い得て妙な言葉。

両親から毎日のように言われていた、言葉の鎖が彼を雁字搦めにし、未だに鎖が解ける事がない。それ故に、彼は簡単に誰かと引き換えの死を受け入れられたのだ。願望と欲望は違っても気付かないまま

「「ただいまー！」「」
「お帰り」

双子の元気な声が扉を開く音と共に聞こえ、零良は双子を迎え入れる。いつものように学校の宿題や復習を終えた後、3人は並んで夕食作り。今日あった出来事を振り返って、楽しそうに喋る双子。

食事の支度を終え、夕食時に庭で店を開くと言う話をすると、自分達も手伝う！ と大張り切り。売るのはもっぱら大人の服ばかりだが、その内子供服も手がけてみようかと、双子が通う学校を思い出して考える。

どうやって店を開くのか、何時からやるのか、と言う双子の問いに、零良は考えながら答えた。金はザルのような物に入れるとして、商品を置く台は休みの日にでも買いに行く。台に布を被せて商品を置き、手に取って物を選んで貰う。

「計算はまだ出来ないだろう？」

「うーん、沢山の計算はまだ無理かな」

「わたしも」

「だったら会計は俺がやる。2人は、乱れた商品を綺麗に並べたり、接客をしてくれれば良い」

接客と言っても、2人は来た客に対して『いらっしやいませ』と言ってくるだけでよいのだ。スーパーやコンビニのようにレジ袋に入れるサッカー作業もないので、服を綺麗に畳んでくれれば良い。

頑張る！ と張り切る双子に笑みを向け、当日の事を想像して話を膨らませる双子。零良は時折それに返事をしつつ夕食を終え、貼って貰う予定のポスターを作り始める。

ポスターは手書きで、大きな紙を錬金し、それに告知を書くのだ。勿論、印刷したようなポスターにすると、そんな技術もないだろう世界で怪しまれる事は確実なので、墨と筆を使って書く。

綺麗に書いたポスターをテーブルで乾かし、風呂に入って翌日の支度をしてから戸締りをし、3人は2階へと上がる。お休みと寝る前の挨拶をして自室に入ると、久し振りに絵を描かずに就寝した。

意識を沈めながら、旅立ったダスティンは元気だろうか、と今何処に居るかもわからない恩人を思い出す。きっと、旅立った後で虫に襲われて悲鳴を上げているんだろうなと、あの時の情けない姿を思い出して口角を上げつつ。

「合計で12バドです」

「はい、12バド」

「丁度頂きます。有難う御座いました」

当日、中々の客入りをし、ザルに次々と金が入って行く。宿で販売していた服を着た旅人を見た町の人が、自分も商品が欲しいと足を運んでくれる。

服を自分で作るは限界があった。皆、簡単なものしか作れず、工夫をしても、やはり限界があった。しかし零良が作る服はシンプルでいて機能が良く、着心地も良い。まして服を作って平民に売ると言う店も人も無かったので、零良が作った服は飛ぶように売れた。

型紙から布を切って縫って、ここまで作るのは大変でしょう？ と

時折声を掛けられたのだが、『ええ』と短い返事でさりと流す。実際、苦労はあまりしていない。絵を描いて、スケッチブックから取り出すだけだ。

ロリーナに『将来は貴方も洋服を作る人になるの？』と、年配の女性が聞いているのだが、『まだわかりません！』と元気に返事をしている。アーヴィングも似たような事を聞かれているが、彼は『ボクは、将来学校の先生になりたい！』と、教師になる夢を持っているようだ。

「うっわあ、すごい人！」

「シエラ……いらっしやい」

大きな声を出し、服を見ているのは亜人の女性・グラシエラ。彼女もまた、ポスターを見て訪れたのだろう。ちなみに、宿屋で働く女性・リーズは最初に来て気に入った服を見繕い、数枚買って仕事に戻った。この日の為に、節約していたそうだ。

「これ、レラが作ったの？ 肩こりそー……」

「適度に運動はしている」

「……なんで肩こりで、運動の話になるのさ？」

「肩にある筋肉の緊張状態が続いて血行が悪くなり、肩が凝る。肩を適度に動かしてやると、肩こりは改善される」

「っ……つまり？」

体を動かす事が一番だ、と説明してやれば、グラシエラだけではな

く、近くに居る女性達も『へえ』と関心している。せつかくなので、アシスタント時代に肩こり改善の為覚えた体操を教えてあげると、近くに居た女性達は、零良の動きに合わせて運動をし、そこ一帯のみ面白い光景になった。

グラシエラも同様に体操を教えて貰うと、服を見て来ると言っ、まばらになった商品を観察に行く。観察、と言っのは、買う気がなさそうだとなく彼女を見て思っただからだ。

その間、商品は次々と売れて行く。男も女も、気に入った商品があれば手に取り、サイズを選んで購入。サイズの合わせ方もそうだが、試用においてある商品もあるので一（そこで着替えるのではなく、上から着る）サイズを間違っ人はいないだろう。間違ったとしても、在庫がここにあるだけなので、返金は出来ても交換は出来ない。

「レラ、レラ、レラー！」

「俺は犬か……」

「これ、オイラ買っても良い？」

「……他のお客様が迷惑するから、声を抑える。そして、欲しい商品は纏めてレジにどうぞ。サイズの間違ひは、返品出来ても交換出来ない可能性があるから、気をつけて」

「了解！」

これとか、オイラ好きだなあ〜などと独り言を言っっているが、途中から隣の女性と会話をしだし、数分目を離れた際に、そこに数名の女性達が固まって会話をしだしている。どうやら会話の中心はグラシエラのように、これにはこれが合う、これに合わせるなら〜色のスカートが良い、などと言っ話に。

彼女達の会話を離れた場所で聞いていると、どうやらグラシエラは色のセンスがいいようだ。まるでデパートに居る女性店員のように、彼女達に商品を薦めている。

「レラ、こちらのお嬢さん、3点お買い上げ〜！」

「有難う御座います。合計で、16レラです」

グラシエラの案内で、レジである彼の元に来た女性。スカートとシャツを2枚程買ってくれた女性に礼を言い、簡単に畳んで商品を渡す。頼んでもいないのにグラシエラは店員のように振る舞い、時折ロリーナやアーヴィングをからかいながら、はしゃいでいた。

双子もまたグラシエラのからかいや話を嫌がらず、時折笑みを浮かべている所を見ると、初日より打ち解けたのだろう。グラシエラに『これだと、この色が合うと思うな』などと教えて貰い、素直に頷いている。

（ ） と言うか、あいつはいつまでここに居るのか……（ ）

自分自身の買い物をせず、来た客に対して接客している所を見ると、自分の買い物は既に忘れていたようだ。商品の残りも少ないから、彼女が買おうと思う頃には、売り切れている可能性がある。

零良は小さく息を吐き、会計に来た男性客からバドを受け取ると一礼。時折、客や双子と話すグラシエラの姿を視線で追いながら、ど

の商品が売れるのか、どんな商品が望まれているのか会話を盗み聞いてリサーチ。

やはり女性は可愛い服を希望し、男性は丈夫で機能的な服を求めようだ。今回グラシエラに渡したワンピースはシンプルな物だったので、もう少し可愛いのが良い、などと言う希望も声もあった。

女性向けの商品はシンプルになり過ぎず、かと言って現代を思わせるようなデザインは避ける。男性向けの商品は丈夫さと機能性を持たせて、それでいてデザインの良い物を考える。

登場人物によって、モブキャラの服のデザインを任されていたが、これは中々難しいものだ。なんせ、アシスタント時代には雑誌やインターネットと言う、少し調べればデザインや流行が直ぐにわかる物が手元にあった。

漫画家やアシスタントは、何も一つも手元に資料をおかず書いていた訳ではない。服や装飾品に関してだと、元々あるデザインをパクリにならない程度にデザインを変えて書く事だつてあるのだ。

今回のフリーマーケットで得た物を次に生かすべく、こまめにメモを取っていた零良は、夜1人になった時にそれを纏めようと考える。騒がしい今の状態だと、考えが纏まらないと思ったのだ。

午前10時頃から始めたフリーマーケットは2時間程で商品を完売させ、後片付けを終えると、午後1時を過ぎている。最後まで手伝ってくれたグラシエラを昼食に誘えば、尻尾を振って喜んでいる。犬か、と内心突っ込みを入れたのだが、彼女は犬の亜人種だったと、自分の突っ込みに突っ込みを入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6936v/>

具現の錬金術師

2011年10月17日00時53分発行